三重県埋蔵文化財調査報告　88－1

昭和63年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

― 第 1 分 冊 ―

1989・3

三 重 県 教 育 委 員 会

序

青垣成す鈴鹿・大台の山々、御食国を育んだ伊勢・志摩の海、そして緑なす伊勢・伊賀の沃野。郷土三重県は豊かな自然に恵まれております。そして農業立県でもある三重県は、毎年農業基盤整備事業が施行されています。これは、より豊かな明日の近代農業育成のために、不可欠な公共事業と申せましょう。

ところが一方、豊かな自然は豊かな歴史をも育て、県下各地には多数の埋蔵文化財が存在します。公共事業推進と文化財保護は、ともに実現されるべき重要課題であり、単純・排他的な二者択一論であってはなりません。

昭和63年度も、広域な農業基盤整備事業が実施され、文化財保護問題が各所に生じました。幸い、関係各位の御理解と御協力をもちまして、多くの遺跡が現状保存できました。しかしながら、設計上やむを得ない箇所に関しては、記録保存の運びとなりました。

現代人の都合によって消失した文化財は、せめて正確な記録の保存と公開がなされ、今後の文化財保護に寄与するものとしていかなければなりません。ここに、昭和63年度県営農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査結果を報告する所似であります。

平成元年３月

三重県教育委員会

教育長　　中　林　　博

例　　言

1．本書は、昭和63年度農業基盤整備事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査結果の一部を、第１分冊としてまとめたものである。

2．当第１分冊には、久居市内を除く第１～２次範囲確認調査結果のみを掲載した。

3．第１～２次範囲確認調査の費用の大半は、県農林水産部の負担による。

4．当該年度の調査は下記の体制で実施した。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会事務局文化課

課長　　佐々木宣明

課長補佐　蒔田　　督

文化財第一係

係　　長　伊藤　克幸

技　　師	山田　　猛	主　　事	河瀬　信幸
主　　事	服部　久士	主　　事	森川　常厚
主　　事	宮田　勝功	主　　事	田中　久生
主　　事	服部　芳人	主　　事	中嶋　千年
主　　事	伊藤　裕偉	併任主事	小高　昌久
併任主事	江尻　　健	併任主事	堀田　隆長
併任主事	小林　　秀	研 修 生	平子　　弘
研 修 生	豊岡　　勇		

調査協力　三重県農林水産部農村整備課・耕地課・各農林事務所・各土地改良区・各教育事務所・各市町村教育委員会・県文化財調査員他。

5．本書で用いた方位は、全て真北である。

6．本書の執筆者は、各々文末に記した。各遺跡の執筆者および、現場調査と遺物整理とは原則的に一致している。

7. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　分布調査 …… 1
　2　第１次範囲確認調査 …… 1
　3　第２次範囲確認調査・本調査 …… 1
Ⅱ　藤原東部・員弁地区内遺跡 …… 5
　1　員弁郡藤原町　シャゴジ塚 …… 5
　2　員弁郡藤原町　ムギタ遺跡 …… 6
　3　員弁郡員弁町　溜尻遺跡 …… 6
　4　員弁郡員弁町　五軒屋遺跡 …… 6
Ⅲ　員弁郡大安町　中貝戸遺跡 …… 8
Ⅳ　津市大里窪田町　若林遺跡 …… 10
Ⅴ　安芸郡安濃町　迎山遺跡 …… 12
Ⅵ　一志郡白山町　家野遺跡 …… 13
Ⅶ　多気郡勢和村　畝ノ上遺跡 …… 26
Ⅷ　多気郡勢和村　丹生地区内遺跡群 …… 27
　1　若宮遺跡 …… 27
　2　大川原遺跡 …… 48
　3　柳浦遺跡 …… 50
Ⅸ　度会郡大宮町　中里遺跡 …… 51
Ⅹ　阿山郡伊賀町　畦垣内遺跡 …… 52
Ⅺ　上野東部地区内遺跡群 …… 53
　1　上野市下友生　風呂ノ上遺跡 …… 53
　2　上野市下友生　広見遺跡 …… 53
　3　上野市中友生　福地遺跡 …… 55
　4　上野市下友生　東場谷遺跡 …… 55
　5　上野市中友生　西場谷Ａ遺跡 …… 56
　6　上野市中友生　「奥小波田３号墳」 …… 56
Ⅻ　名張市赤目町　脇ノ田遺跡 …… 56

図 版 目 次

ＰＬ．１　シャゴジ塚調査前・調査区全景
ＰＬ．２　家野遺跡Ａ区
ＰＬ．３　家野遺跡Ａ・Ｂ区
ＰＬ．４　家野遺跡Ｂ・Ｃ区
ＰＬ．５　家野遺跡Ｃ区ＳＢ１～３
ＰＬ．６　若宮遺跡調査区遠景
ＰＬ．７　若宮遺跡調査区近景及び個別遺構
ＰＬ．８　若宮遺跡個別遺構
ＰＬ．９　若宮遺跡出土遺物（１）土師器類
ＰＬ．10　若宮遺跡出土遺物（２）土師器類
ＰＬ．11　若宮遺跡出土遺物（３）土師器類
ＰＬ．12　若宮遺跡出土遺物（４）土師器・陶器類
ＰＬ．13　若宮遺跡出土遺物（５）陶磁器類・石製品

挿 図 目 次

Ⅰ　前言
第１図　第２次範囲確認調査・本調査遺跡位置図 …… 4
Ⅱ　藤原東部・員弁地区内遺跡
（シャゴジ塚・ムギタ遺跡）
第２図　遺跡及び調査区位置図 …… 5
第３図　シャゴジ塚調査区全体図及び遺物実測図 …… 6
（溜尻遺跡・五軒屋遺跡）
第４図　遺跡位地図及び調査区周辺地形図 …… 7
第５図　五軒屋遺跡調査区位置図 …… 7
第６図　溜尻遺跡調査区位置図 …… 7
Ⅲ　中貝戸遺跡
第７図　遺跡位置図 …… 8
第８図　調査区周辺地形図 …… 8
第９図　調査区位置図 …… 8
第10図　遺物実測図 …… 9
第11図　調査区平面図 …… 9
第12図　ＳＫ１実測図 …… 9
Ⅳ　若林遺跡
第13図　遺跡位置図 …… 10
第14図　試掘坑・調査区及び遺跡範囲位置図 …… 10
第15図　調査区位置図 …… 10
第16図　調査区平面・個別遺構土層断面図 …… 11
第17図　出土土器実測図 …… 11
Ⅴ　迎山遺跡
第18図　遺跡位置図 …… 12
第19図　調査区位置図 …… 12
第20図　調査区平面・断面及び出土土器類実測図 …… 12
Ⅵ　家野遺跡
第21図　遺跡位置図 …… 13
第22図　調査区位置図 …… 13
第23図　Ａ区平面図 …… 14
第24図　Ａ区遺物実測図 …… 15
第25図　Ａ区弥生土器拓影 …… 15
第26図　Ｂ区平面図 …… 16
第27図　Ｂ区遺物実測図 …… 17
第28図　Ｂ区弥生土器拓影 …… 17
第29図　Ｃ区平面図 …… 18
第30図　竪穴住居及び堀立柱建物平面・断面図 …… 19
第31図　Ｃ区遺物実測図 …… 20
第32図　Ｃ区弥生土器拓影 …… 21
Ⅶ　畝ノ上遺跡
第33図　遺跡位置図 …… 26
第34図　調査区位置図 …… 26
第35図　調査区平面図及び出土土器実測図 …… 26
Ⅷ　丹生地区内遺跡群
（若宮遺跡）
第36図　遺跡位置図 …… 27
第37図　調査区位置図 …… 27
第38図　Ａ区平面及び土層断面図（１） …… 28
第39図　Ａ区平面及び土層断面図（２） …… 29
第40図　Ａ区各個別遺構平面・断面・立面図 …… 30
第41図　Ａ区土坑ＳＫ35、柱列ＳＡ01他平面・断面図 …… 31

第42図　A区土坑ＳＤ３（北）及び
土坑ＳＫ16土層断面図 …… 32
第43図　A区土坑ＳＫ33礫群・土器出土状況 …… 32
第44図　若宮遺跡出土土師器器種分類図 …… 34
第45図　出土土器類実測図（１）
（A区土坑ＳＫ４・24） …… 35
第46図　出土土器類実測図（２）
（A区土坑ＳＤ３〔北・南〕） …… 36
第47図　出土土器類実測図（３）
（A区土坑ＳＤ３〔北・南〕他） …… 37
第48図　出土土器類実測図（４）（A区各遺構） …… 38
第49図　出土土器類実測図（５）（C区溝ＳＤ１） …… 39
第50図　出土石製品実測図（１） …… 45
第51図　出土石製品実測図（２） …… 46
第52図　出土貨幣拓影 …… 46
（大川原遺跡）
第53図　調査区位置図 …… 49
第54図　調査区平面・土層断面図 …… 49
第55図　出土土器実測図 …… 49
（柳浦遺跡）
第56図　柳浦遺跡第１次調査坑設定図 …… 50
Ⅸ　中里遺跡
第57図　遺跡位置図 …… 51
第58図　調査区位置図 …… 51
第59図　調査区平面図 …… 51
第60図　遺物実測図 …… 51
Ⅹ　畦垣内遺跡
第61図　遺跡位置図及び調査区位置図 …… 52
第62図　B地点調査区平面図 …… 53
第63図　遺物実測図 …… 53
XI　上野東部地区内遺跡群
（風呂ノ上遺跡・広見遺跡）
第64図　遺跡位置図 …… 54
第65図　広見遺跡出土遺物実測図 …… 54
第66図　調査区位置図 …… 54
（東場谷遺跡・西場谷A遺跡・福地遺跡・
「奥小波田３号墳」）
第67図　調査区位置図 …… 55
XII　脇ノ田遺跡
第68図　遺跡位置図 …… 56
第69図　調査区位置図 …… 56
第70図　B・C区平面図 …… 57
第71図　遺物実測図 …… 57

表　目　次

Ⅰ　前言
第１表　県圃地内遺跡一覧（１） …… 2
第２表　県圃地内遺跡一覧（２） …… 3
第３表　その他の事業地内遺跡一覧 …… 3
Ⅵ　家野遺跡
第４表　出土遺物観察表（１） …… 22
第５表　出土遺物観察表（２） …… 23
第６表　出土遺物観察表（３） …… 24
第７表　出土遺物観察表（４） …… 25
Ⅷ　丹生地区内遺跡群
第８表　出土土器類観察表（１） …… 40
第９表　出土土器類観察表（２） …… 41
第10表　出土土器類観察表（３） …… 42
第11表　出土土器類観察表（４） …… 43
第12表　出土土器類観察表（５） …… 44
第13表　化学分析結果 …… 48

Ⅰ　前　　言

県教育委員会事務局文化課は、毎年翌年度の事業照会を開発関係各課に行ない、この回答に基づいて遺跡地図との照会や分布調査を実施している。県農林水産部関係各課に対しても、その結果をもとに第１次範囲確認調査を実施し、事業地内における遺跡の範囲や遺構の深さ等を把握する。そして関係各課と協議し、設計変更による現状保存に努めるが、やむを得ず記録保存となる部分に関しては、新年度に発掘調査を実施している。発掘調査の年度計画は、新年度当初に作成するものの、年度途中に事業計画の変更や新規事業の着手等があり、年度当初よりも調査面積は増大するのが一般的である。発掘調査は、費用の一部を県教育員会が国庫補助金の交付を受け、その他の部分については県農林水産部から執行委任を受けて実施している。しかし、第１次範囲確認調査によって遺跡の縁辺部と推定された地区は、第２次範囲確認調査を実施することとしている。第２次範囲確認調査とは調査経費の執行委任を受けず、工事期間中に実施するものである。

昭和63年度は、県営圃場整備事業877ha及び排水対策特例事業等の事業地内15遺跡、合計34,667㎡を発掘調査し、9,248㎡を第２次範囲確認調査として記録保存する旨で合意・着手した。なお調査面積は実施に際して多少の変更もあった。またこのほかに、調査対応能力を超えた部分は、翌年度以降に持ち送りとした。さらに、工事計画そのものの変更によって、第１次範囲確認調査のみにとどめた遺跡もある。一方、久居市内の県営圃場整備にかかる発掘調査は、久居市教育委員会に委託し、範囲確認調査においても協力を得た。

１　分　布　調　査

昭和63年度事業照会の回答を受けて、62年度の内に遺跡地図と照会し、事業予定地内及び隣接地に周知の遺跡がある地区、あるいは周知の遺跡はなくても地形的に遺跡の存在が想定可能な地区を検討した。その結果、事業予定地の大部分に関して分布調査の必要が認められ、文化課文化財第１係の職員の手によって実施した。この分布調査結果はただちにまとめられ、各農林事務所に報告した。なお、この内にはその後63年度施工予定地区外になった地点や、遺跡の可能性を認めたのみの地点も含んでいる。

２　第１次範囲確認調査

先の分布調査の結果よりも具体的な遺跡範囲の確認と、各地点の遺物包含層や遺構面の深さ、遺跡の性格等々を把握し、その後の具体的な協議資料を得る目的で、第１次範囲確認調査を実施した。

第１次範囲確認調査は、農業基盤整備事業が継続事業の場合は前年度末に、新規事業の場合は新年度途中に実施した。調査は農林水産部の依頼を受け、提供された詳細計画図を基に現地協議の上で計画した。実施にかかる準備は、主として農林事務所と土地改良区において行ない、調査は文化課職員が主導した。

この調査坑は、原則的に４ｍ×２ｍの大きさとした。調査坑の密度は、現況の１筆につき１箇所設定することを目標としたが、作付等の問題もあり、計画１筆に１箇所となった例もある。調査坑が密に設定された場合は実施上の困難は増すが、遺跡範囲をより正確に把握できる。一方、調査坑が疎な場合は遺跡範囲を実際以上に広く推定し易く、その後の協議を困難にし、再度調査した例さえあった。

３　第２次範囲確認調査・本調査

前年度の内に実施した第１次範囲確認調査の結果、事業地内に所在する遺跡の件数・面積があまりに膨大であり、調査能力をはるかに超えるものであった。そこで前年度末から63年度当初にかけて協議を重ね、極力地区除外や切り盛り等の設計変更により、現状保存に努めた。その結果、最終的には、15遺跡

事務所名	地区	事業ha面積	遺跡名	所在地	事業地内㎡遺跡面積	範囲確認調査㎡ 一次	範囲確認調査㎡ 二次	本調査㎡	備考
桑名農政	藤原東部	37.0	シャゴジ遺跡	藤原町川合	400	−	400	−	塞神信仰
			ムギタ 〃	〃 〃	4,500	32	180	−	希薄
	員弁	48.6	溜尻 〃	員弁町大泉	7,000	64	90	−	希薄
			五軒屋 〃	〃 畑新田	200	264	120	−	〃
			七ツ橋 〃	〃 笠田新田	−	48	−	−	地形良好
			東永長 〃	〃 〃	−	24	−	−	〃
			小向 〃	〃 楚原	−	72	−	−	〃
	大安西部	15.8	中貝戸 〃	大安町丹生川中	20,000	456	480	−	追加調査
四日市農林	八風	39.5	勝部 〃	菰野町永井	(15,000)	−	−	−	希薄
			姫塚古墳 〃 〃	〃 〃	100	−	−	−	地区除外
			火穴 〃	〃 小島	100	−	−	−	〃
			下森永遺跡 〃	〃 竹成	1,000	64	−	−	工事対応
	合川・下ノ庄	30.0	桑名垣内 〃	鈴鹿市長法寺町	1,420	−	−	1,420	昨年度の送分
			加和良神社 〃	〃 三宅町	2,050	−	−	1,980	〃
			加和良1～2号墳	〃 〃	600	−	−	600	昨年度からの継続協議
			門田遺跡	〃 徳居町	27,000	88	230	−	希薄
			東代A 〃	〃 〃	15,000	96	−	−	工事対応
			〃 B 〃	〃 〃	25,000	88	−	−	〃
			〃 C 〃	〃 〃	−	40	−	−	
			別所 〃	〃 三宅町	43,000	80	−	−	工事対応
			金堤 〃	〃 〃	−	16	−	−	工事翌年度送り
			西条 〃	〃 〃	200	32		−	〃
津農林水産	河芸北部	11.6	小町 〃	河芸町久知野	2,400	11	−	−	工事対応
	大里	5.8	若林 〃	津市大里野田	31,000	312	680	−	希薄・追加調査
			毛抜 〃	〃 〃	−	32	−	−	
	芸濃南部	14.7	北奥 〃	芸濃町多門	38,000	184	−	4,600	
			椀田 〃	〃 〃	420	8	−	97	
			下川 〃	〃 雲林院	16,000	136	190	−	希薄
	穴倉川沿岸	4.8	迎山 〃	安濃町今徳	2,400	64	84	−	追加調査 水路のみ施工
	美里中南部	35.0	西出遺跡	美里村三郷	7,000	76	−	−	工事翌年度送り
	久居	21.8	前川原 〃	久居市森	56,000	992	−	2,280	久居市教委へ委託(1300㎡)
			野田 〃	〃 稲葉	5,000	−	−	−	翌年度以降に送り
	久居Ⅱ期	26.5	宝垣内遺跡	久居市稲葉	12,000	32	−	140	久居市教委の協力
	家城	9.5	家野 〃	白山町南家城	25,000	272	740	−	
			水尻 〃	〃 北家城	−	64	−	−	希薄
			北家城 〃	〃 〃	21,000	280	−	−	工事翌年度送り
	中郷	8.9	釜生田 〃	嬉野町釜生田	25,000	160	−	4,700	現地説明会
松阪農林	堀坂川沿岸	62.8	伊勢寺 〃	松阪市伊勢寺町	185,000	784	470	7,180	一部昨年度送分と追加調査
			上相田 〃	〃 〃	12,400	32	260	740	
			鳥戸 〃	〃 〃	36,400	328	1,250	−	
			榎長 〃	〃 〃	4,000	32	−	180	
			伊勢寺廃寺	〃 〃	12,000	72	−	−	工事対応
			広遺跡	〃 〃	−	40	−	−	
			白塚 〃	〃 〃	−	40	−	−	
			定井 〃	〃 〃	−	48	−	−	
			文珠 〃	〃 〃	−	24	−	−	

第1表　県圃地内遺跡一覧（1）

※遺跡面積は当該年度施工地内の遺跡面積であり、工事対応前の数字である。

事務所名	地区	事業ha面積	遺跡名	所在地	事業地内㎡遺跡面積	範囲確認調査㎡		本調査㎡	備考
						一次	二次		
松阪農林	明星	18.7	黒土 〃	明和町明星	5,500	48	−	520	
			本郷 〃	〃 〃	2,850	40	−	−	工事翌年度送り
	丹生	34.1	若宮 〃	勢和村丹生	26,000	128	170	−	協議時「垂清水」と仮称
			大川原 〃	〃 〃	25,000	376	680	−	希薄、協議時「久保垣外」と仮称
			畝ノ上 〃	〃 〃	1,700	−	440	−	昨年度の送分 希薄
			柳浦 〃	〃 〃	−	32	−	−	追加調査後施工
	東黒部	10.9	東浜 〃	松阪市東黒部町	−	32	−	−	工事対応
上野農林	柘植川沿岸	18.4	野田 〃	伊賀町西ノ沢	20,000	88	−	−	〃
			荒打 〃	〃 〃	15,000	24	−	−	〃
			天道 〃	〃 〃	7,000	248	−	−	工事対応（屋敷遺跡）も含む
			畔垣内 〃	〃 御代	6,850	104	450	−	追加調査・希薄
	上野北部	28.9	伊賀国府推定地	上野市印代		−	−	5,000	
	上野東部	55.3	広見遺跡	〃 下友生	4,000	96	440	−	希薄
			風呂ノ上 〃	〃 〃	11,000	61年度	94	−	〃
			大谷A 〃	〃 〃	−	48	−	−	
			〃 B 〃	〃 〃	−	24	−	−	
			下代 〃	〃 〃	−	48	−	−	
			福地 〃	〃 中友生	5,500	96	80	−	追加調査・工事対応
			東場谷 〃	〃 〃	2,700	84	110	−	〃
			西場谷 〃	〃 〃	−	48	−	−	追加調査
			奥小波田3号境	〃 下友生	−	110	−	−	追加調査・墳丘は市教委
	上野南部第2	23.9	森脇遺跡	〃 市部	16,000	200	−	4,300	一部保存・現地説明会
			ぬか塚古墳	〃 〃	400	−	−	−	現状保存
			小泉氏館跡	〃 依那具	27,000	136	−	1,000	
	上野南部第3	48.1	磯田氏 〃	〃 下神戸	3,200	−	−	−	工事翌年度送り
			古郡氏 〃	〃 古郡	2,100	24	−	−	工事対応
			稲田遺跡	〃 〃	39,100	168	240	−	希薄、協議時「東城」と仮称
			大北 〃	〃 下神戸	16,800	56	−	−	工事対応
	赤目	15.7	脇ノ田 〃	名張市赤目町	3,750	48	1,220	−	追加調査 工事対応
			〃 〃	〃 〃	−	64	−	−	工事対応
			南成滝 〃	〃 青蓮寺	−	−	−	−	地区除外

第2表　県圃地内遺跡一覧（2）

※遺跡面積は当該年度施工地内の遺跡面積であり、工事対応前の数字である。

事務所名	地区	事業ha面積	遺跡名	所在地	事業地内㎡遺跡面積	範囲確認調査㎡		本調査㎡	備考
						一次	二次		
桑名農政	公害土地改良	4	下垣内遺跡	藤原町東禅寺	7,000	61年度	−	−	工事対応
			精好 〃	北勢町奥村	20,000	−	−	−	〃
四日市農林	広域農道	0.75	三条 〃	四日市市和無田町	−	64	−	−	調査後施工
津農林水産	〃	0.6	萩野城跡	芸濃町萩野	800	−	−	−	用買待
		0.5	赤坂遺跡	〃 岡本	3,600	−	−	−	〃
松阪農林	かんがい排水	0.13	山下 〃	多気町井内林	−	32	−	−	調査後施工
松阪農林	畜産経営環境整備	1.5	柏野 〃	飯南町柏野	−	40	−	−	
		2.3	小野 〃	飯高町田引小田	−	24	−	−	
伊勢農林水産	〃	1.7	中里 〃	大宮町永会	1,200	32	150	−	希薄
			中出 〃	〃 金輪	−	24	−	−	
			東沖 〃	〃 〃	−	8	−	−	
上野水産	排水対策特例	0.3	稲田 〃	上野市古郡	930	−	−	930	県圃に隣接協議時「東城」と仮称

第3表　その他の事業地内遺跡一覧

※遺跡面積は当該年度施工地内の遺跡面積であり、工事対応前の数字である。

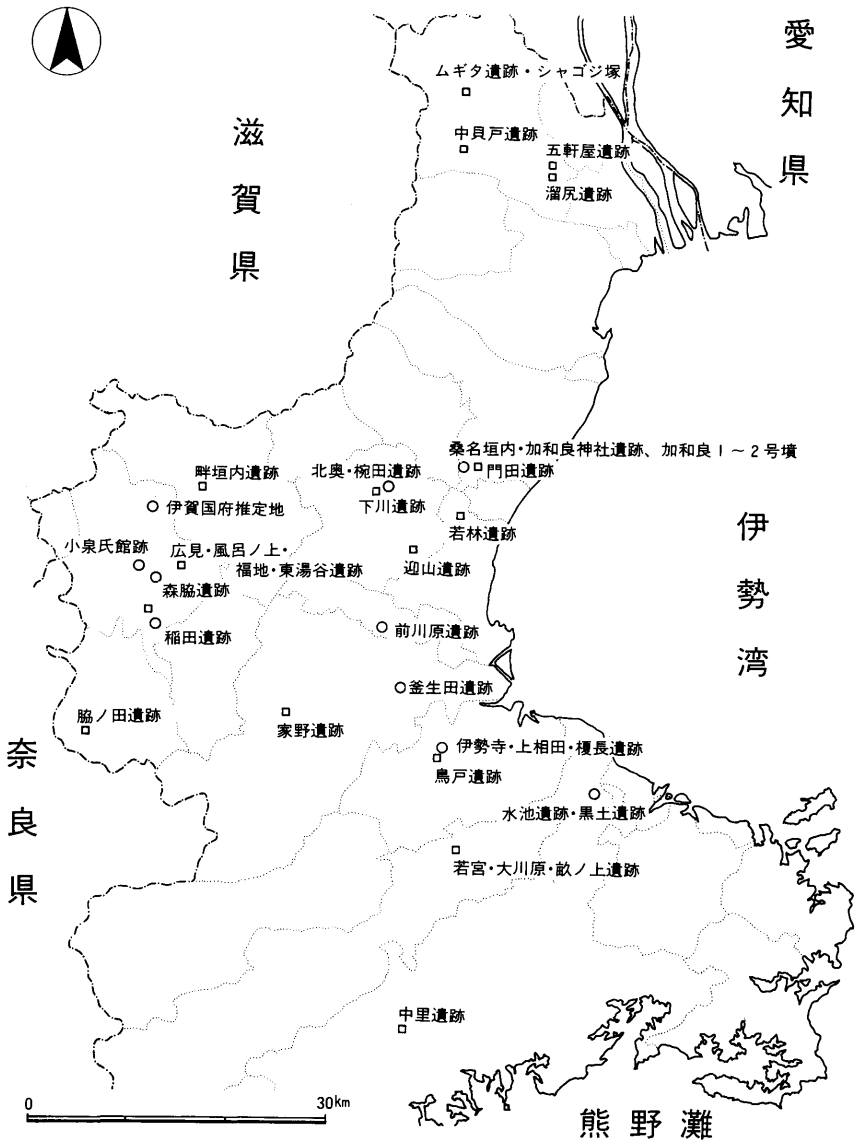
35,667㎡の本調査と、24遺跡9,248㎡の第2次範囲確認調査を63年度に実施し、これ以外の調査を翌年度以降に実施することで合意を得た。この合意の直後、年間の調査計画を作成し、農村整備課を通じて関係各農林事務所に通知し、調査実施の円滑化を計った。

ところが、第1次範囲確認調査によって遺跡の外縁と判断された地点の内にも、設計変更が不可能な地点も含まれる。そこでこれらの地点は、まず執行委任を受けずに工事に際して調査し、万一本調査が必要であると判断される遺構・遺物が確認され、設計変更が不可能な場合は、改めて執行委任を受けて本調査に切り替える場合もある。しかし調査を開始した結果、ある程度濃密な遺構・遺物が確認されても、現実にはその全てを本調査に切り替えることは、予算上の制約等から不可能な場合が多い。したがって第2次範囲確認調査には、遺跡のある程度主要な部分を農林水産部から執行委任を受けずに、本調査並みの現場調査をする場合が含まれる。また一方では、結果的に全くの遺跡周辺部であり、ほとんど調査らしい調査の必要性がない場合も含まれている。

ともかく、こうして対応能力の限界に至る年間調査計画をもって開始したわけであるが、年度途中にも継続事業の計画変更や、新規事業の開始も多々あった。この内でも新規事業の水路は、公共事業推進という観点から重点的に対応した。したがって、当初計画をはるかに超えた、数字に表われた以上に苦しい1年間であった。

文末ではあるが、関係各位の御協力はもとより寒暑・風雨の中、調査に邁進した若い現場担当職員達の情熱と、裏方である室内作業員諸氏の献身的な協力を特記しておきたい。

（山田　猛）



第1図　第2次範囲確認調査・本調査遺跡位置図（○＝本調査、□＝第2次範囲確認調査）

Ⅱ　藤原東部・員弁地区内遺跡

1　員弁郡藤原町　シャゴジ塚

当遺跡は、行政区画上、員弁郡藤原町川合字西久保に所在する。員弁川上流北岸の河岸段丘上に位置し、標高は約120mである。周囲の現況は水田である。この塚は、礫によって形成されているために一見して積石塚のような外観である。開墾が塚の縁辺にまで行なわれ、形状は変形しているものと思われるが、現状で径約16m・高さ約0.8mの規模を測る。

幅約2mの調査溝を十字形に設定し調査を行なった結果、この塚は黒色土と人頭大以下の礫によって形成されていることが判明した。さらに、この礫層中から中近世の陶器（1～8）が出土し、近世以降に築造されたことも明らかになった。また、礫層下で黄褐色礫の地山になるが、塚の中央やや北寄りで土坑1基を検出した。1.1m×0.9mの長方形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色で、遺物は含まれていない。この塚に直接関連するものかどうかは不明である。

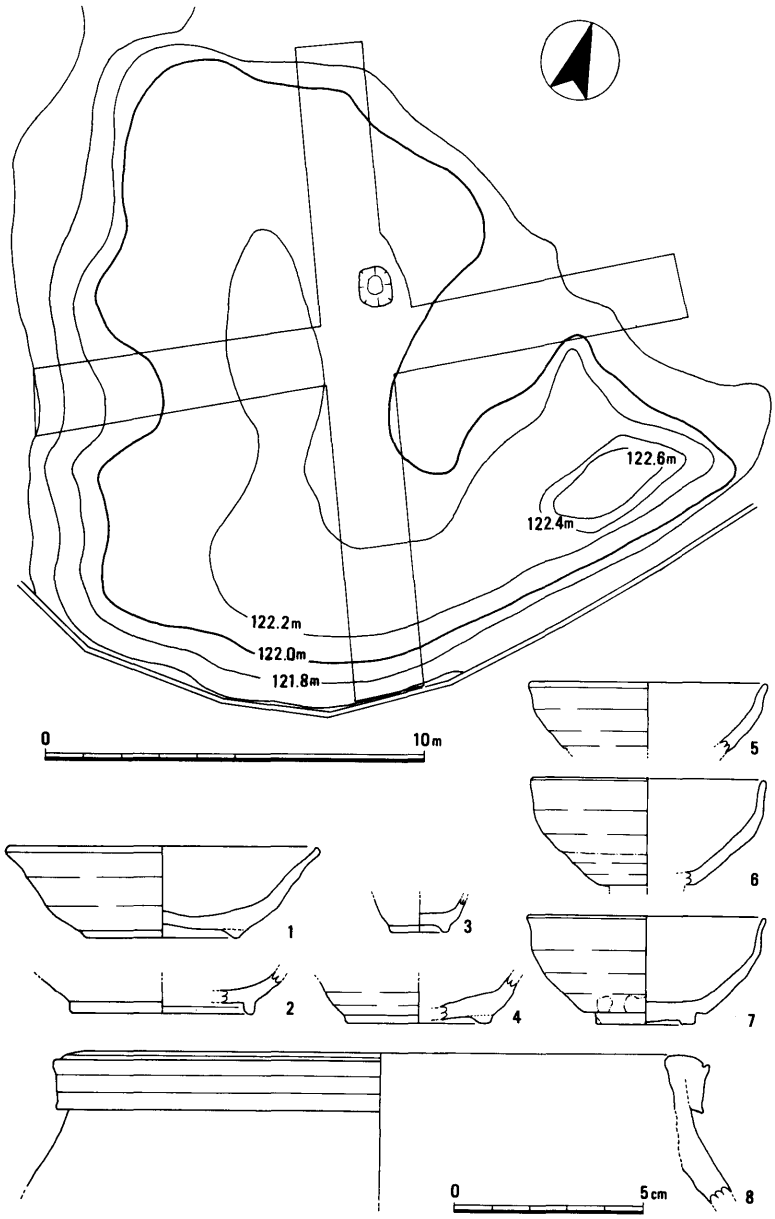
遺物はすべて礫に混じった状態で出土した。1と4は山茶椀であり、ともに13世紀前半のものである。1は口径の割に器高が低く、口縁をわずかに外反させ端部はやや厚い。2は淡灰黄色釉のかかった皿である。内面に菊花文の陰刻を施し、削り付し高台をもつ。17世紀後半の美濃産である。3は白磁の小杯である。5～7は天目茶椀で、いずれも16世紀後半のものである。7は暗黄色釉のかかったいわゆる黄天目である。体部下半はほぼ直線的で、口唇部は若干内傾し、端部は再び外反する。8は常滑産の甕で16世紀前半のものである。

出土した遺物により、近世以降に成立したものと推定されるが、意図的な築造か、畑の石を捨てた結果できたような非意図的なものかは明らかでない。ただ「シャゴジ」という名称や、塚の位置が日内地区と川合地区の境界にあたることから考え、塞の神信仰に関係するようである。[1]

（服部芳人）

註　①　柳田国男監修『民俗学事典』　1972

第2図　遺跡及び調査区位置図（1：50,000）および（1：2,000）



第３図　シャゴジ塚調査区全体図（１：200）および遺物実測図（１：４）

確定はできない。

今回調査を行なった部分では明確な包含層・遺物ともに確認されなかったが、西側での第１次範囲確認調査において山茶椀数点が出土している。したがって、遺跡の中心は今回の調査溝より西方にひろがっているものと思われる。

（服部芳人）

3　員弁郡員弁町　溜尻（ためじり）遺跡

当遺跡は、行政区画上、員弁郡員弁町大泉字溜尻に所在する。員弁川の支流、戸上川の上流東岸の低丘陵上に位置し、現況は水田である。分布調査において新たに確認された遺跡であり、南北10m・東西70mの約700㎡が範囲であると推測された。遺跡の西側500㎡が削平をうけるため、幅1.8m・南北長50mの調査溝を設定した。

この結果、現地表下60～70㎝で礫入黄褐色粘質土の地山となる。遺物も全く見られず、遺跡の中心は調査区の東方に存在するものと思われる。

（服部芳人）

2　員弁郡藤原町　ムギタ遺跡

当遺跡は、行政区画上、員弁郡藤原町川合字戌貝戸に所在する。員弁川とその支流である相場川とにはさまれた南向きに伸びる台地の縁辺に位置する。シャゴジ塚の北方約150mにあたり、その間に県道時・下野尻線がはしる。

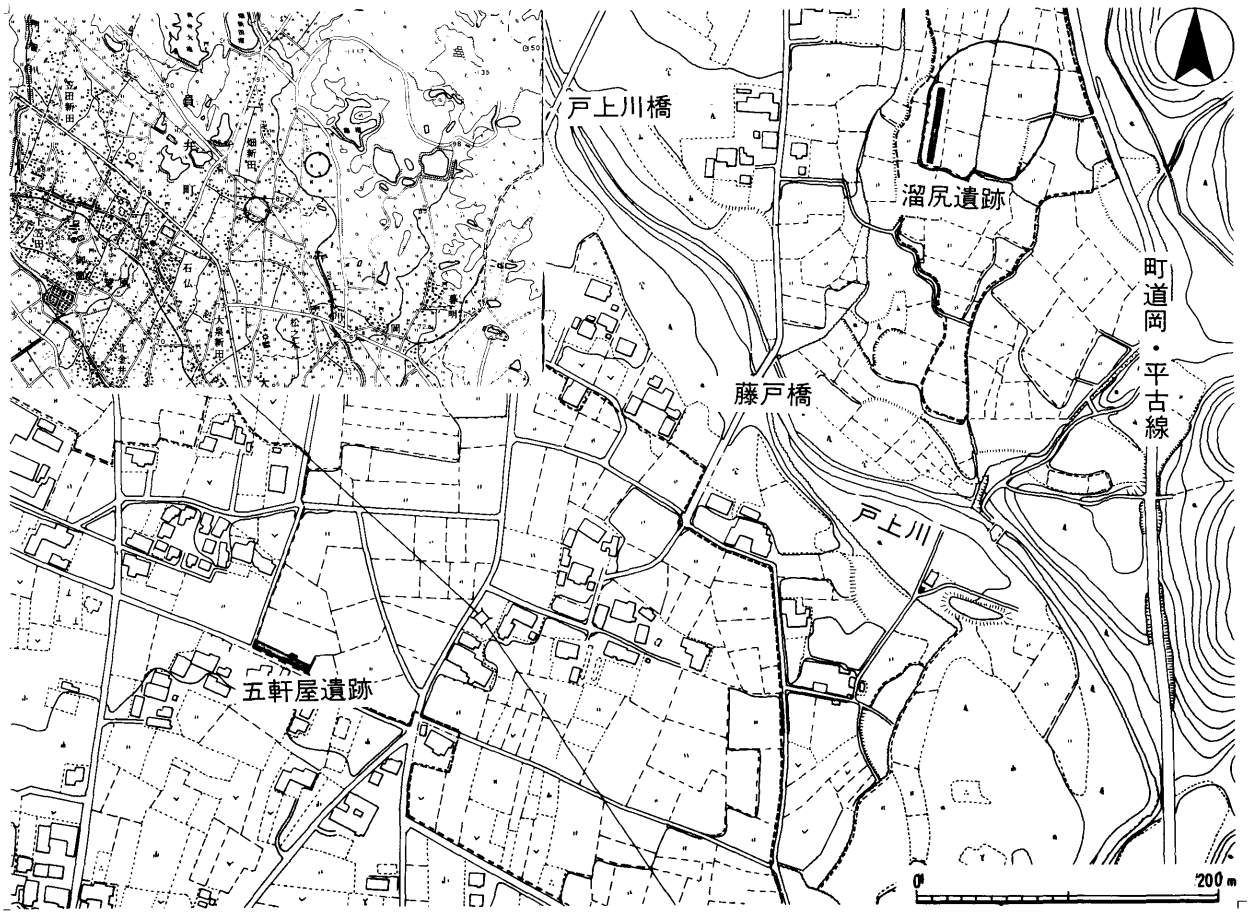
今回、遺跡の東側に排水路が計画され削平をうけるため、幅３m・南北長35m・東西長24mのＬ字形に調査溝を設定し、調査を行なった。この結果、現地表下約60～70㎝で黄褐色礫の地山となり、径約60㎝のピットを10数余り検出した。いずれも埋土は黒褐色を呈し、遺物を全く含んでいないため、時期の

4　員弁郡員弁町　五軒屋（ごけんや）遺跡

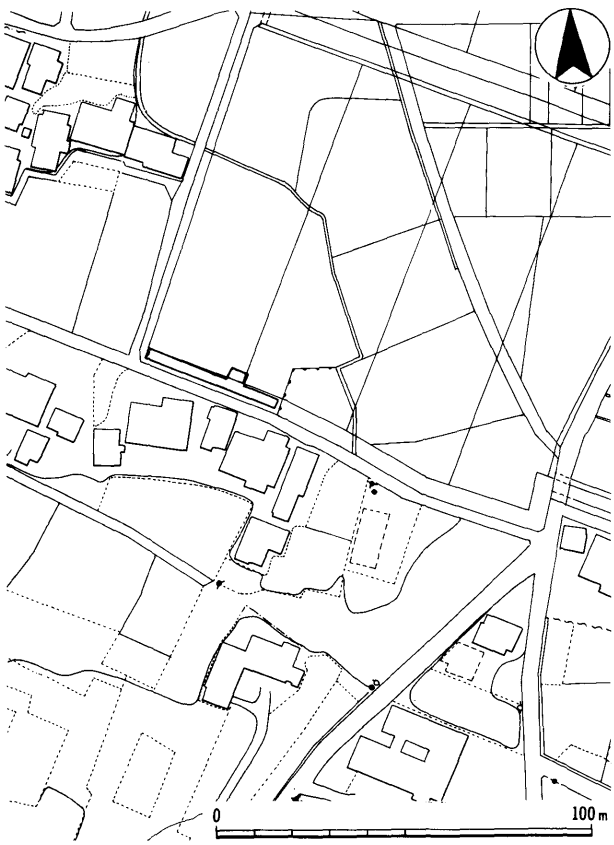
当遺跡は、行政区画上、員弁郡員弁町畑新田字五軒屋に所在し、溜尻遺跡の南西約500mに位置する。第１次範囲確認調査において、遺跡西隅と思われる部分で土師器の細片が出土した。調査は排水路部分に幅２m・東西長38mの調査溝を設定して行なった。

遺構は、現地表下約90㎝において、幅約40㎝の東西方向の溝１条のみである。埋土には遺物が全く含まれておらず、時期については不明である。また、北側に調査溝を拡張したが、自然の落ち込みを確認したにとどまる。

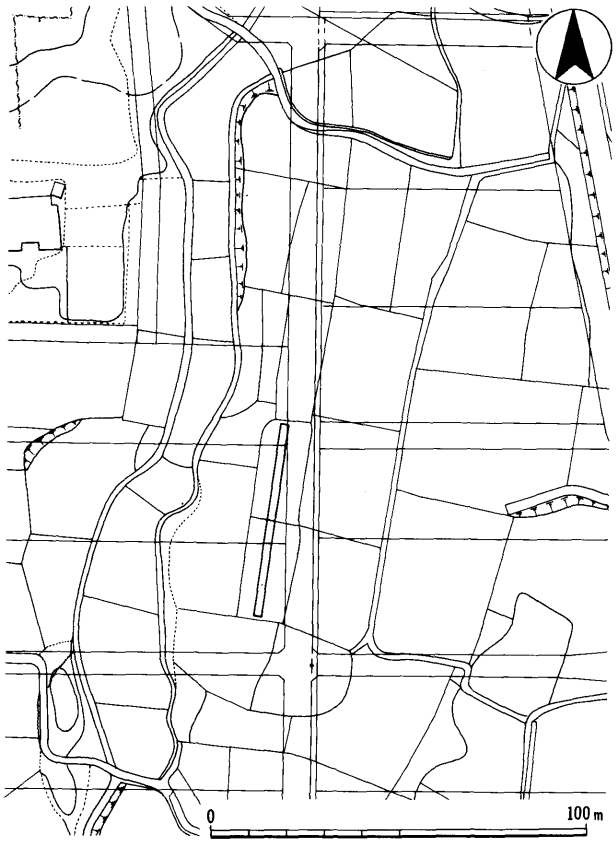
（服部芳人）



第4図　遺跡位置図（1：50,000および1：2,000）及び調査区周辺地形図（1：5,000）



第5図　五軒屋遺跡調査区位置図（1：2,000）



第6図　溜尻遺跡調査区位置図（1：2,000）

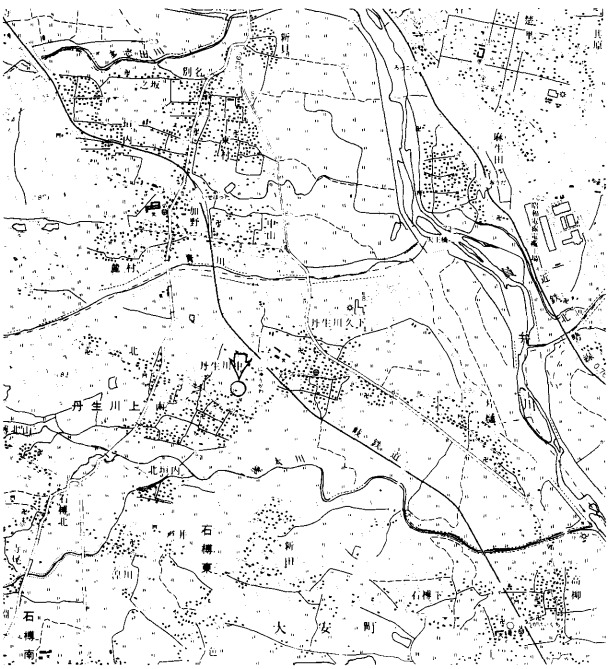
Ⅲ　員弁郡大安町　中貝戸（なかがいと）遺跡

当遺跡は員弁郡大安町丹生川中字中貝戸に所在する。現況は水田及び畑地である。調査期間は昭和63年８月31日～９月２日、調査面積は480㎡である。

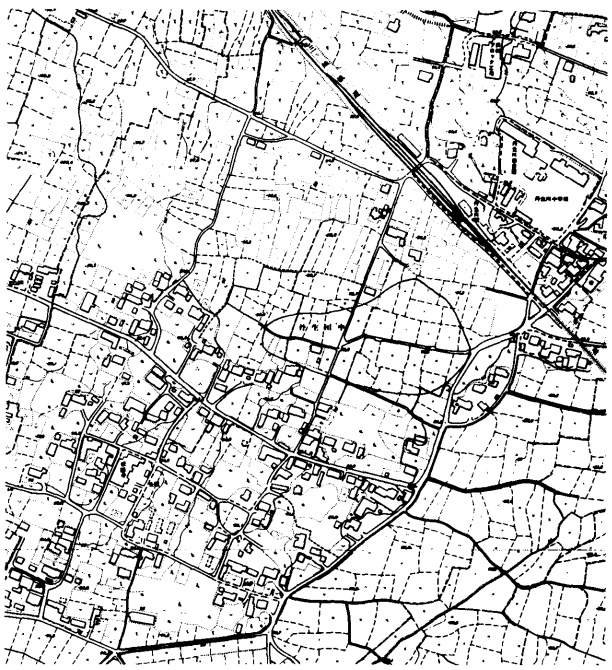
検出した遺構は、掘立柱建物１棟、土坑11基、溝３条などである。掘立柱建物ＳＢ１は３間×２間で、桁行7.2m、梁行3.2m。柱間は等間で桁行が2.4m、梁行は1.6mである。棟方向はＥ－58°－Ｓである。出土した遺物は少なく、明確な時期は決定し得ない。調査区東端で検出した土坑ＳＫ１は径3.8mの略円形を呈し、側壁全体に人頭大の石を積んでいたと推定される。埋土中から山茶椀、鉄滓、フイゴの羽口片などが出土した。また、熱を受けたと思われる石もあり、ＳＫ１は鉄鍛冶に関わる遺構と考えられる。

遺物の出土量は少なく、包含層から細片の土器少量と、ＳＫ１から山茶椀（１～２）、フイゴの羽口（３～４）などが出土したにとどまる。１～２は口径15.9cm、器高5.0～5.3cmで底部外面にロクロ糸切痕が残り、高台にはモミガラの痕跡が認められる。いずれも鎌倉時代前期に比定されよう。３～４は残存長８～10cm、直径８～10cmと大きい。

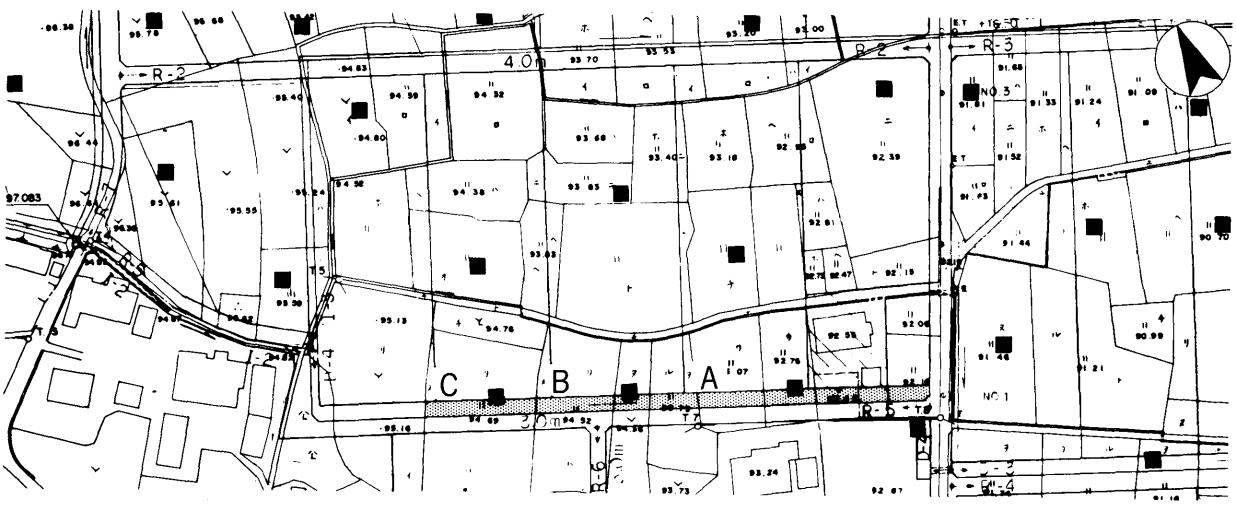
（田中久生）



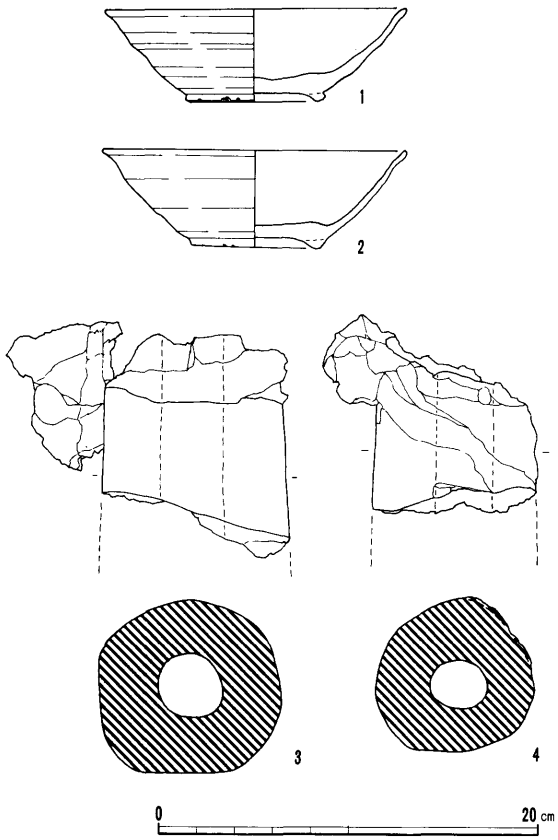
第７図　遺跡位置図（１：50,000）
（国土地理院地形図１：25,000『阿下喜』から）



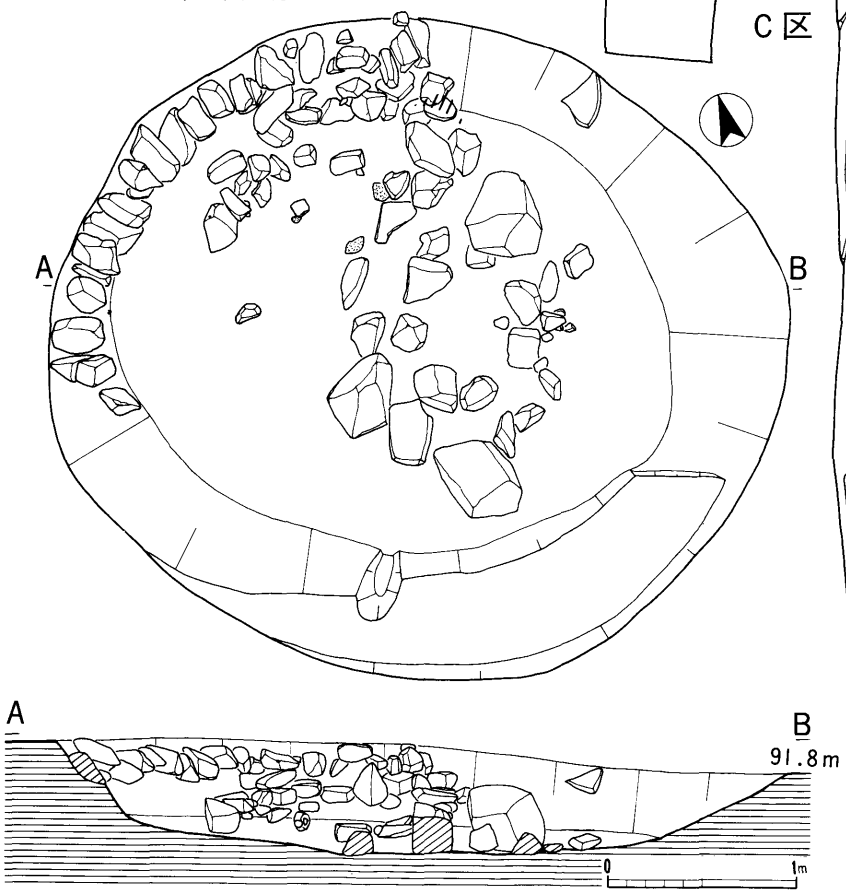
第８図　調査区周辺地形図（１：10,000）



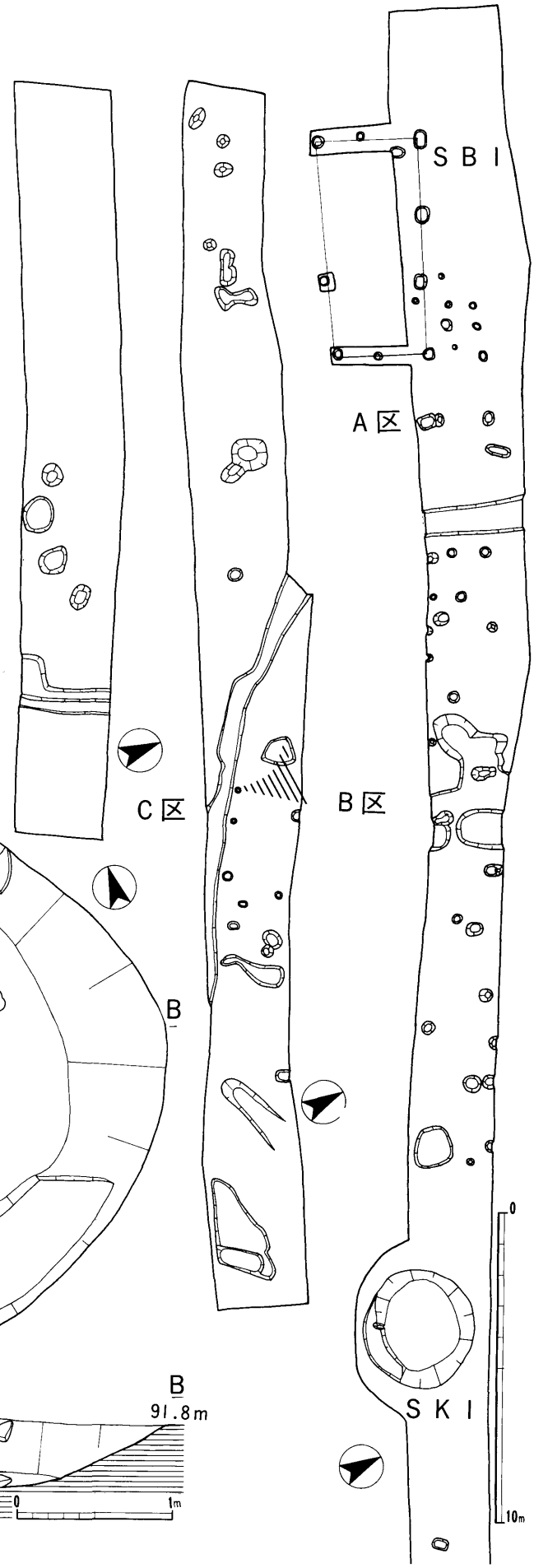
第９図　調査区位置図（１：2,000 ■は試掘坑）



第10図　遺物実測図（1：4）

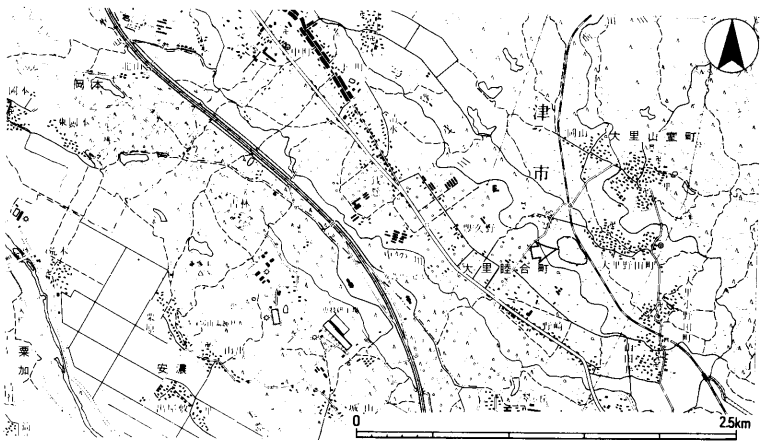


第12図　ＳＫＩ実測図（1：40）

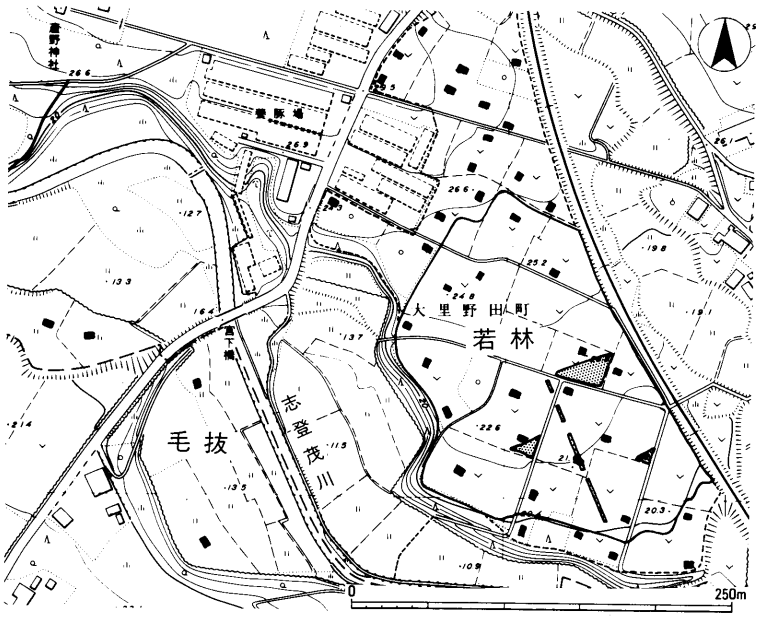


第11図　調査区平面図（1：200）

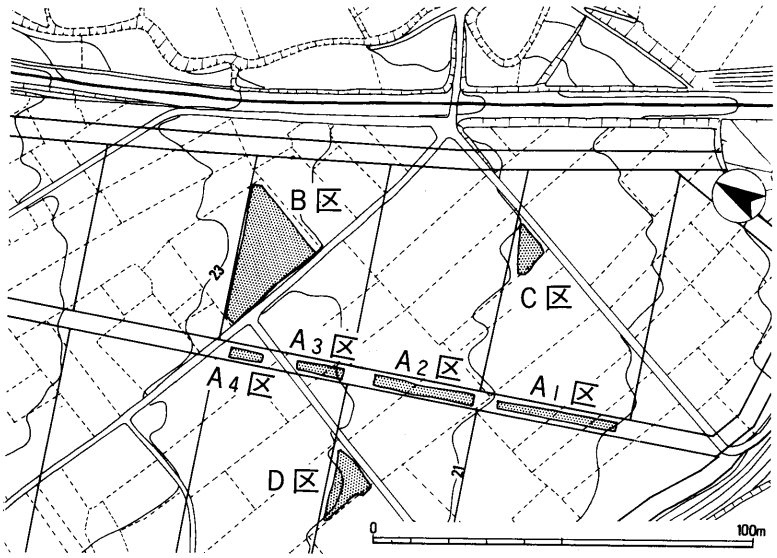
Ⅳ　津市大里窪田町　若林（わかばやし）遺跡



第13図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院地形図1：25,000『椋本』から）



第14図　試掘坑・調査区及び遺跡範囲位置図（1：5,000）
（■黒ベタは試掘坑、被線は分布調査による遺跡範囲
実線は第一次調査結果による遺跡範囲）



第15図　調査区位置図（1：2,000）

当遺跡は津市大里野田町字若林に所在する。地形的には志登茂川の中流左岸、侵食段丘上にあり、水田部分もあったようであるが現地はなだらかに傾斜する畑地となっている。

第1次範囲確認調査は当遺跡の他、土器の散布が見られた字毛抜においても実施した（第14図）。その結果、後者では遺構・遺物とも確認されなかった。

第2次範囲確認調査は水路部分と耕地部分の削平を受ける地点において行った（第15図）。調査は平成元年1月9日～13日、調査面積は約680㎡である。調査区の基本層序は上から耕土（20～30㎝）、床土（2～3㎝）、黒色土、明褐色土（地山）となり、さらに下層では淡褐色砂を含んだいわゆる段丘礫層に達する。なお、床土は耕作地によって存在する場所としない場所があり、黒色土は標高の低いA_1区では20～40㎝の堆積が認められたが、A_4、B、C区では遺構埋土の一部としてのみ認められた。

A_1区では調査区南端で3条の溝を検出した。SD1は断面逆台形で、北側法面は垂直に近く落ちる。中世の陶器片が出土した。SD2は断面U字形で埋土に黒色土が入る。須恵器甕の体部片が出土した。SD3は断面U字形の浅いもので、奈良時代頃の土師器甕片（第17図9）が出土した。

A_2区では比較的多くの遺構を検出したが、溝SD6と土坑SK1以外は不定形なものである。SD6は深さ約60㎝、幅約3mの大きいものである。埋土の最下層に黒色土が認められ、その堆積後にも掘り直しか水流があり、溝の機能を果たしていたようである。遺物は出土しなかった。SK1は半分ほどが調査区外であるが、その形状から方形を呈するもの

と考えられる。埋土は純粋な黒色土の堆積ではなく、黒色土にブロック・小粒を含んだものである。土師器皿（第17図５）、鍋（同６）のほか、陶器椀（山茶椀）がある。その他、落ち込みＳＫ２・ＳＤ５からは土師器小皿（ＳＫ２・第17図４、ＳＤ５・同３）が出土した。

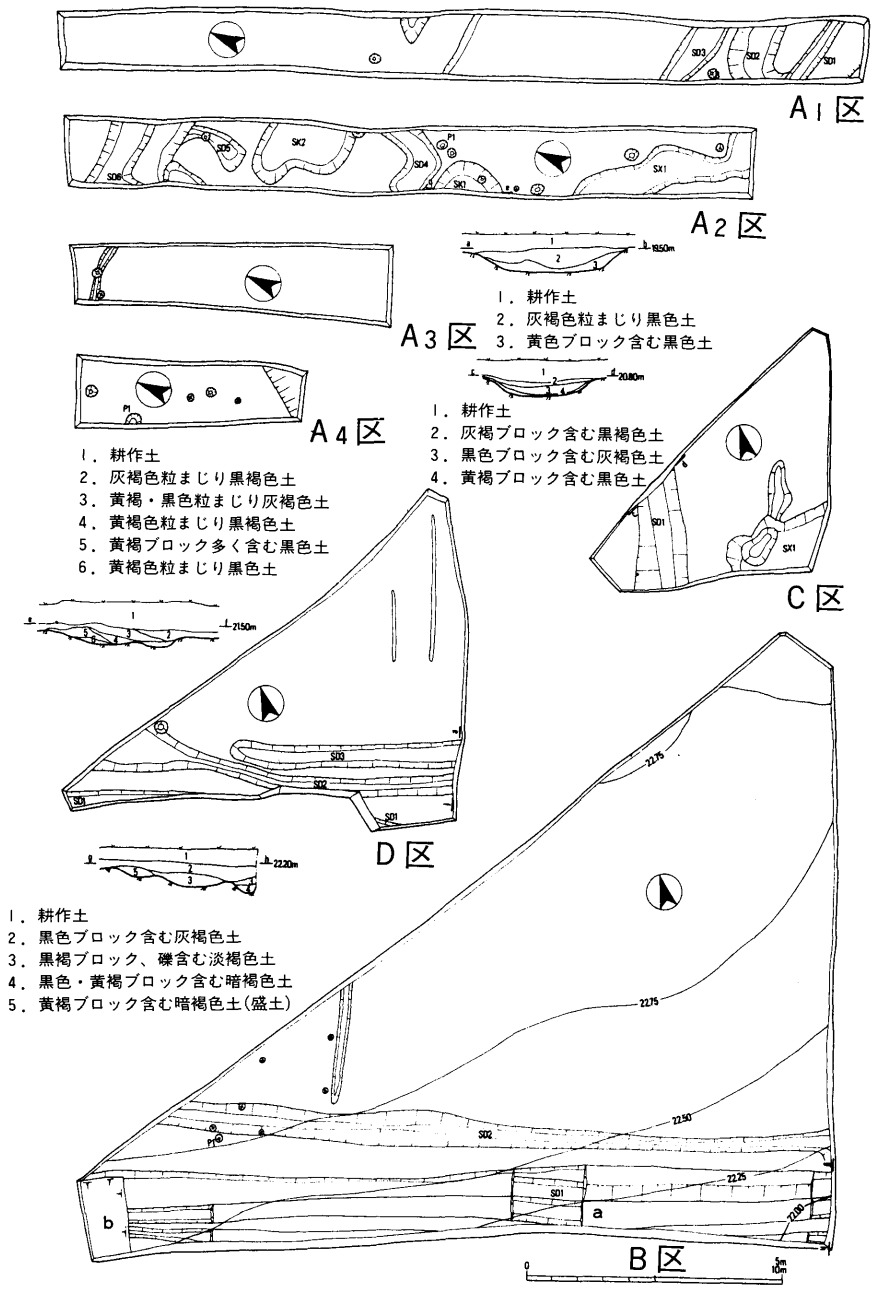
A_3・A_4区からは目立った遺構や遺物は認められなかった。

Ｂ区は耕作土直下で地山面に至り、現況の小道に並行する状態で溝ＳＤ１・２を検出した。ＳＤ１は溝が２～３段の落ち込み内に２条の溝（ａ・ｂ）が走っている。落ち込みの最上段には盛土があり、ａ、ｂ内は礫で固められていた。これらのことからＳＤ１は古道の可能性が高い。遺物は須恵器の小片が混入していた。その他、ピット１からは志摩式製塩土器と平安時代頃と考えられる土師器甕（第17図７～８）が出土しているが、混入と考えられる。

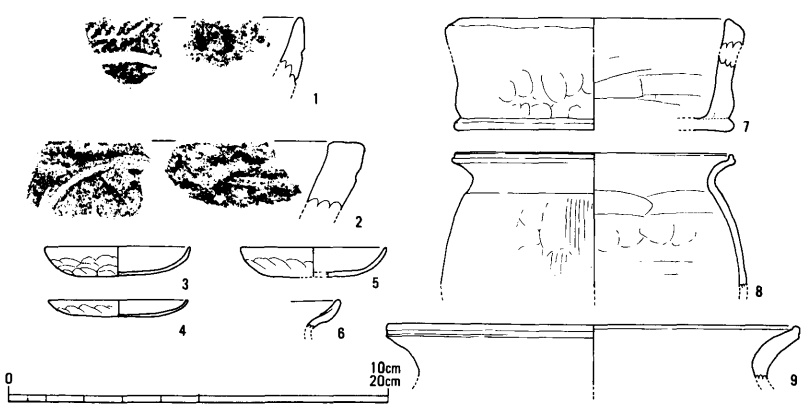
Ｃ区では不定形な落ち込みＳＸ１と溝ＳＤ１を検出したが遺物の出土はなかった。ＳＸ１の埋土は黒色土である。

Ｄ区では現況の小道に直行する溝ＳＤ１～３を検出した。時期は不明であるが、ＳＤ１には中期末か後期に比定される縄文土器片（第17図１～２）が混入していた。

（伊藤裕偉）



第16図　調査区平面（1：300)、個別遺構土層断面（1：150)図



第17図　出土土器実測図（1～2：½，3～8：¼）

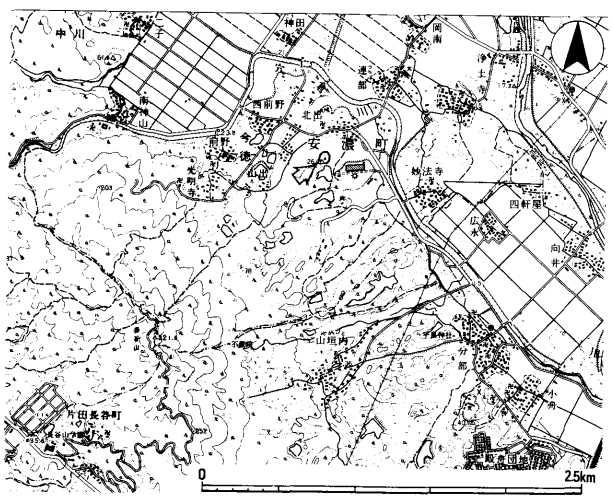
V　安芸郡安濃町　迎山（むかえやま）遺跡

当遺跡は安芸郡安濃町今徳字迎山に所在する。地形的には標高約321mの長谷山から北東方向へ派生する尾根の先端にあたり、同じ尾根のやや上がった場所には2基の古墳がある（第19図）。調査は昭和63年12月21～22日に行い、調査面積は85㎡である。

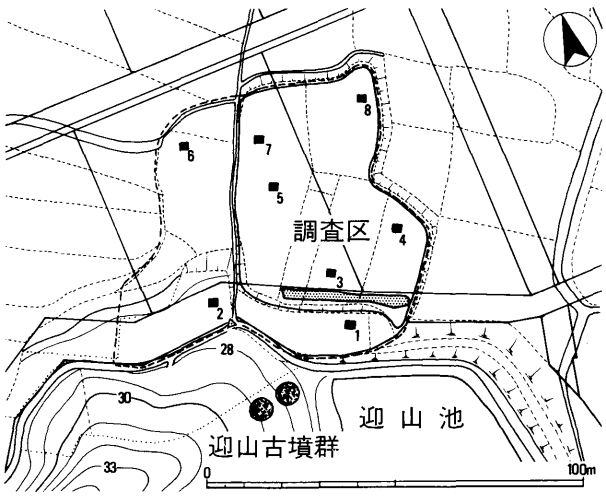
第1次範囲確認調査ではNo.4の調査坑を中心に埴輪、黒色土器、陶器椀（山茶椀・第20図7～8）等が出土したが、当調査区の遺構・遺物は希薄であった。その中で旧地形の落ち込みSX1と土坑SK1の存在が注目される。地山（明褐色粘土）は基本的に表土直下で検出したが、SX1からSK1付近まではその間に4層の堆積が認められた。SK1の埋土は地山に近似した淡赤褐色土であった。遺物は出土しなかったが埋土の状況やNo.3の調査坑付近でサヌカイトの剥片を表採していることから、弥生時代以前の遺構の存在が想定される。なお、溝SD1からは陶器椀の小片が出土した。

遺物は埴輪が注目される。迎山古墳群に伴うものと考える。埴輪は調査坑No.3～4・7や当調査区において散見された。6以外は全て須恵質・半須恵質で、ヨコハケを施すもの（4）とタテハケ・ナナメタテハケを施すもの（1、5～6）がある。川西宏幸氏のV期(注)に相当しよう。　（伊藤裕偉）

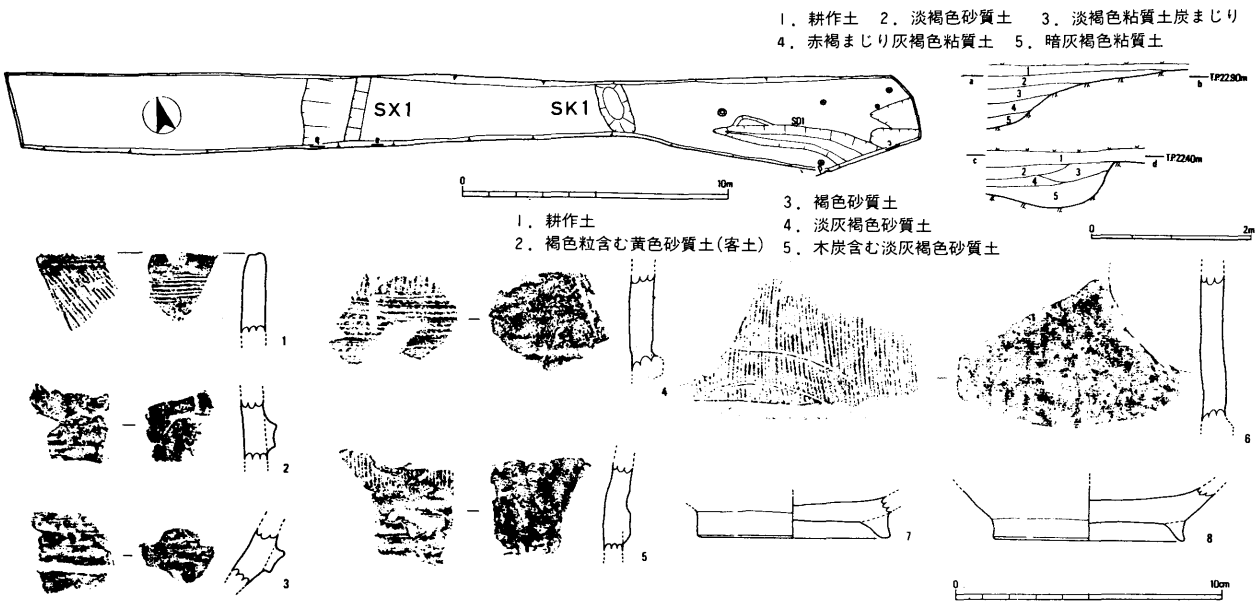
（注）川西宏幸『古墳時代政治史序説』（1988年 塙書房）



第18図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院地形図1：25,000『津西部』から）



第19図　調査区位置図（1：2,000）
（■は第一次調査坑）



第20図　調査区平面（1：300）・断面（1：100）、及び出土土器類実測図（1：3）

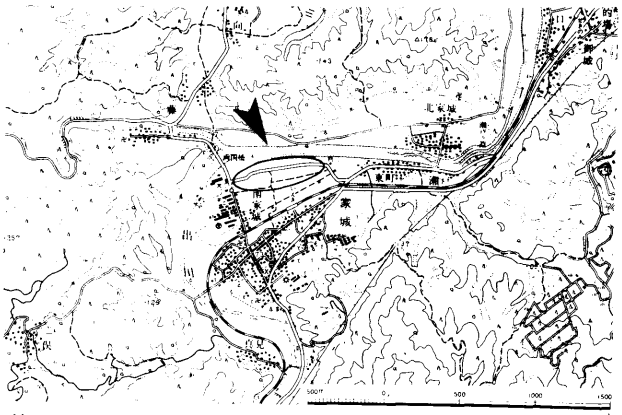
Ⅵ　一志郡白山町　家野（いえの）遺跡

高見山地に源を発する雲出川は、白山町家野付近で谷間を蛇行しながら北流し、川口付近で流れを東にかえる。遺跡は、蛇行する雲出川が南家城付近で一時流れを東に向けた右岸の河岸段丘低位面の上に位置する。現況はＪＲ名松線家城駅から北に広がる水田地帯である。行政上、一志郡白山町南家城字家野に属する。標高は65m前後である。

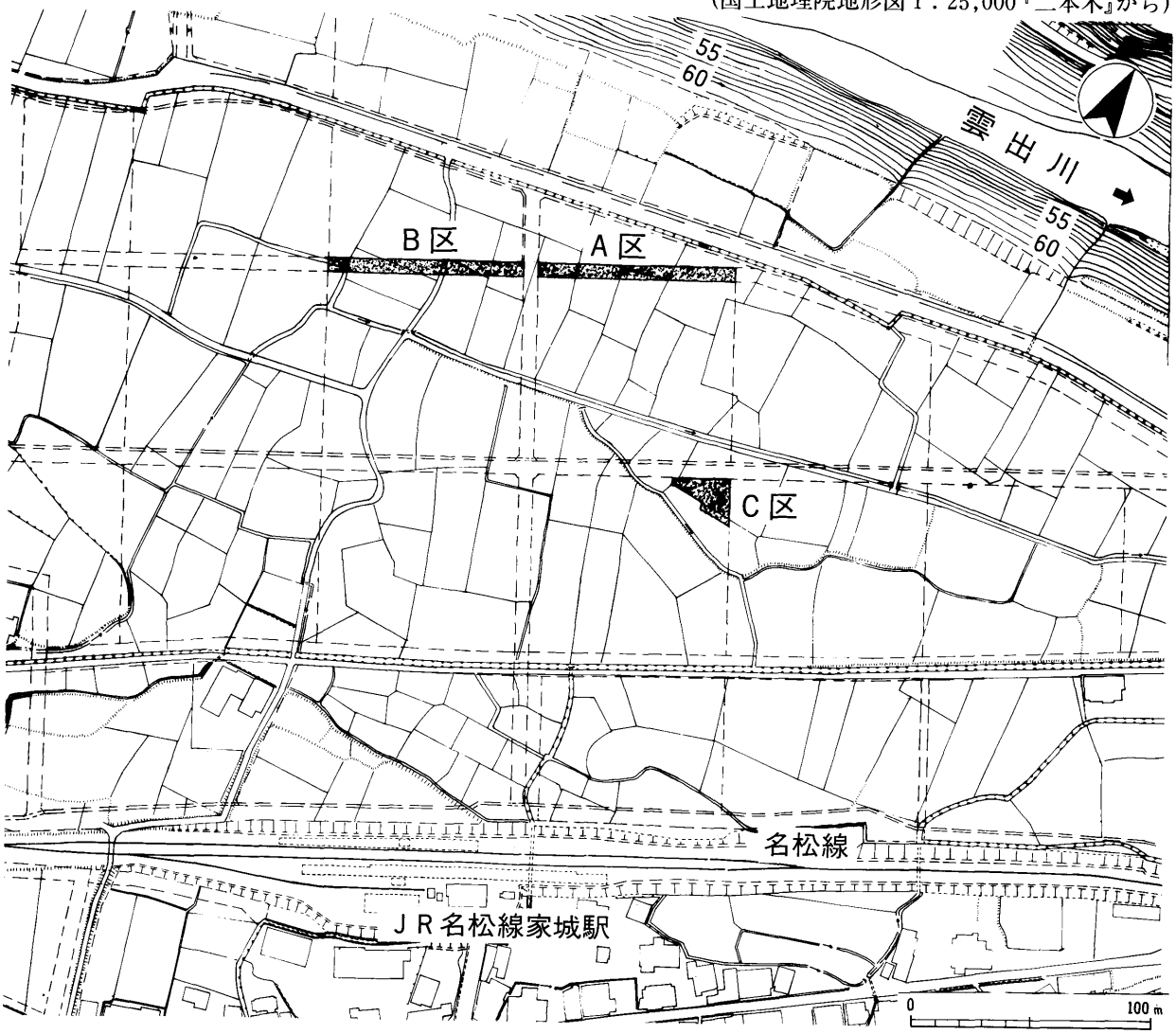
県営圃場整備事業に伴い、第１次調査を実施した。その結果、溝、土坑などの遺構とともに、弥生時代中期の壷や甕をはじめ、中世の土師器や陶器などが出土し、当遺跡は、白山町立家城小学校から家城神社に至る約20,500㎡に及ぶことが判明した。そのため、事業地内の遺跡に影響を及ぼす部分について第２次範囲確認調査を実施した。

調査は、地元改良区および住民の協力を得て平成元年１月９日から開始し、１月16日をもって終了した。調査地区を便宜上、排水路部分をＡ・Ｂ区、面調査部分をＣ区と呼称した。調査面積は各地区合せて約740㎡である。

以下、各地区ごとに概述することにする。



第21図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院地形図１：25,000『二本木』から）



第22図　調査区位置図（1：3,000）

A　区

東西に延びる排水路部分の東半で、幅３ｍの極めて細長い調査区である。調査面積は約240㎡である。

調査区の基本的層序は、第１層が暗灰褐色土（耕作土）、第２層が黄灰色土（床土）、第３層が黒褐色土、第４層が暗褐色土、第５層が黄褐色粘質土である。遺物包含層は第３層であり、第４層上面で遺構を検出した。第４層の暗褐色土は無遺物層で、地山面は第５層の黄褐色粘質土の上面である。

耕作土の上面から遺構検出面までの深さは85㎝で、包含層の厚さは60㎝ほどである。

１　遺　構

検出した遺構は、溝３条、土坑14基、墓１基などがあり、特に土坑が多く検出されたことが特徴的である。これらの遺構は調査区全体に見られ、時期としては、弥生時代中期と平安時代後期の二時期に分かれる。

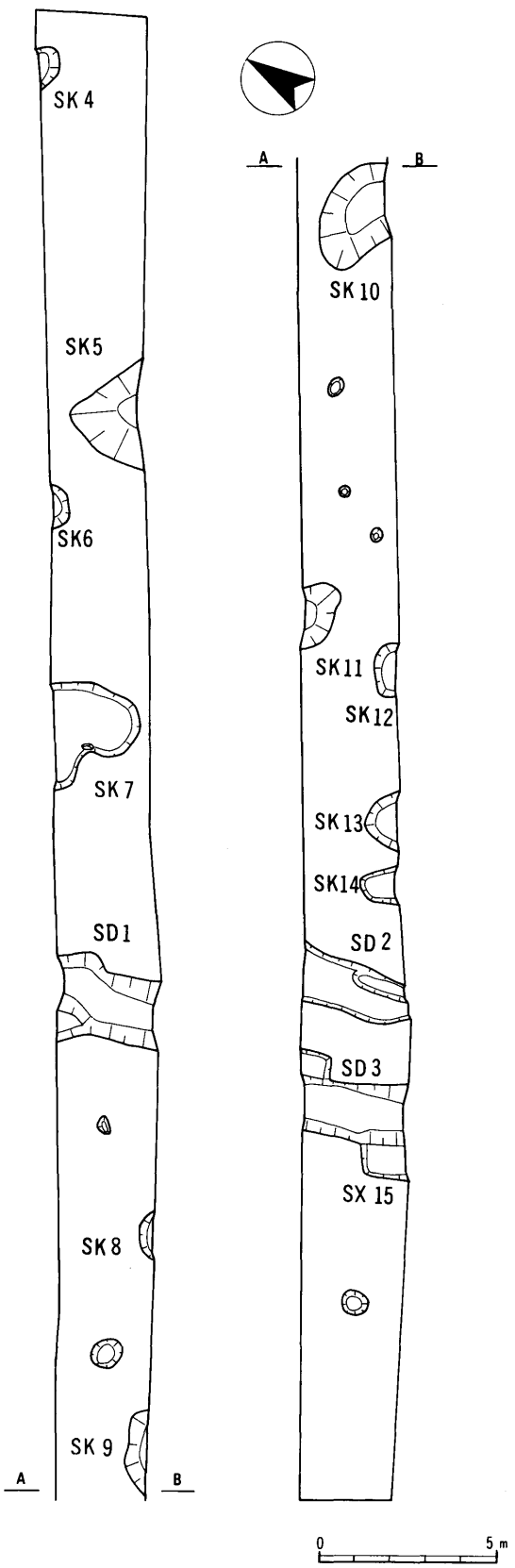
弥生時代中期の遺構には、ＳＤ１～３、ＳＫ４・６～10・12～13がある。

ＳＤ１は溝幅2.3m、深さ75㎝の南北溝であり、溝底から10㎝浮いた状態で壷（５）が頸部以上を欠損して出土した。ＳＤ２は溝幅1.4m、ＳＤ３は溝幅1.6mで溝内から弥生土器細片が出土した。

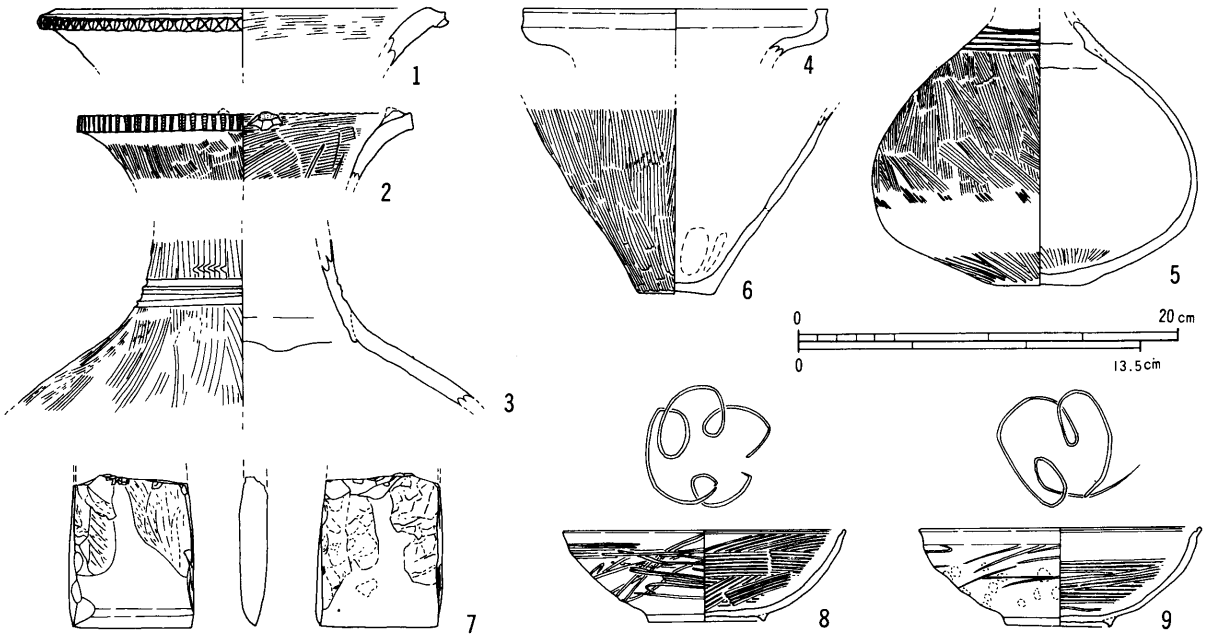
土坑のほとんどは、調査区が狭小のため全体を検出することはできなかったが、おおむね楕円形を呈するものと不整円形を呈するものに分かれよう。ＳＫ11からは扁平片刃石斧（７）が出土した。

平安時代後期の遺構には、墓ＳＸ15がある。ＳＸ15は、東側をＳＤ13と切り合い、また南側が調査区外になるために土坑の北西部しか検出されなかったが、隅丸方形状を呈すると考えられよう。土坑内の西壁近くで瓦器椀（８）を身とし、瓦器椀（９）を蓋するものが出土した。椀内には、黒褐色土が充満しており骨片等は見られなかった。土坑内からも刀子、釘などは出土しなかった。松阪市出間町の服部遺跡では青磁椀２個を出土した例があり[1]、瓦器碗を蔵骨器に転用したと考えられる。

その他に土坑３基などがあるが、各々の土坑とも出土遺物はなく、時期は不明である。



第23図　Ａ区平面図（１：200）



第24図　A区遺物実測図（1：4，7は1：3）

2　遺　物

遺物は、弥生時代を中心に少量出土した。

弥生時代中期の遺物には、広口壷、細頸壷、無頸壷、甕があり、石製品は石斧が1点出土している。

広口壷（1）は、外方に開いた口縁部に粘土帯を貼付して肥厚させた端部に、ヘラ状工具による刻み目を施している。内面に横位の刷毛目が残る。このような口縁の形態は、本遺跡出土の土器としては珍らしく、他地域からの搬入品とも考えられる。広口壷（2）は、外方に開いた口縁部に垂直な面をもつ壷で、端部外面には櫛状工具による刺突文を施し、体部外面には縦位の、内面には横位の刷毛目を施す。口縁端内面には2個1対の瘤状の突起を貼付する。広口壷（3）は頸部にヘラ描横線文を持ち、内面及び断面に頸部と体部との接合痕が見られる。

細頸壷（4）は、水平気味に開いた口縁部を垂直に立ち上がらせ、この外面に1条の浅い凹線文を施す。壷（5）は、頸部に擬口縁らしい接合痕を持つ。外面は縦位のハケ調整ののち、頸部下半にヘラ状具による横線文を施している。体部下半は横位にヘラミガキし、特に底部を中心にした部分には棒状具によるヘラミガキが放射状にめぐる。

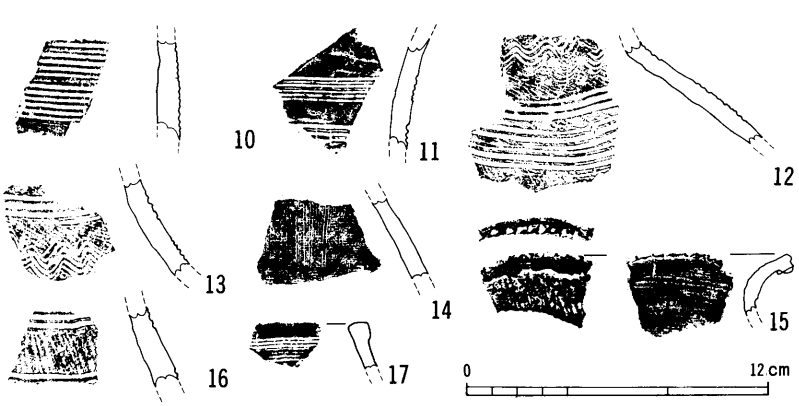
無頸壷（17）は、細片だがＳＤ1から出土している。口縁部は折り返して肥厚する。あるいは鉢か。

壷形土器の文様としては、櫛状具による単帯の横線文や波状文で飾るもの（11～13・16）のほか、複帯構成の横線文（10）を施した古相を示すものがある。14は直線文を縦位に重ねる。

甕（15）は、外反させた口縁部を垂下させ、端部に櫛状具による刻み目をつける。

石製品には、扁平片刃石斧（7）がある。基端より刃部がやや幅広い。刃部はわずかに両刃気味の片刃となる。粘板岩製である。

平安時代後期の遺物には、瓦器椀（8～9）がある。墓ＳＸ15出土の椀で、いずれも口縁部内面に沈線がめぐり、底部には断面三角形の高台が貼り付く。内面にはヘラミガキを密に、外面には粗に施す。見込みには8は3個、9は2個の連結輪状文を施す。器高指数は8が29、9が28であり、山田編年[2]のⅡ段階第3～4型式に相当し、12世紀後半に比定されよう。



第25図　A区弥生土器拓影（1：3）

B　区

A区と同じ排水路部分で、A区の東側に続く調査区である。土層の層序もA区と同一であるが、地形が東側に向うにつれ若干高くなり、A区とB区の検出面の高低差は、約30cmほどである。

1　遺　構

主な遺構は、溝２条、土坑８基の他小穴群がある。

弥生時代中期の遺構には溝、土坑がある。

ＳＤ１は南北に伸びる溝で溝底部を検出した。ＳＤ２は調査区西端で検出し、溝の西肩は調査外にあり、溝底部は平坦である。

土坑は８基あるが、遺物が出土しなかった土坑もある。出土遺物は極めて少なく細片がほとんどである。平面形は、楕円形又は不整円形を呈するものが多い。坑内には黒褐色土が充満していた。測定可能な径の平均は、長径2.1m、短径1.2mである。

室町時代後期の遺構には、調査区東側で検出した小穴（ピット）群がある。これらの小穴は、径30cmほどで個数42を数える。土師器鍋（13）をピット12から出土した。小穴群はさらにA区側へ広がり、建物としてはまとまらなかった。しかし、集中的に見られるところから複数の建物が重複している可能性がある。

2　遺　物

A区と同様に遺物の出土量は少ないが、弥生時代中期の土器、室町時代の土師器などが出土した。

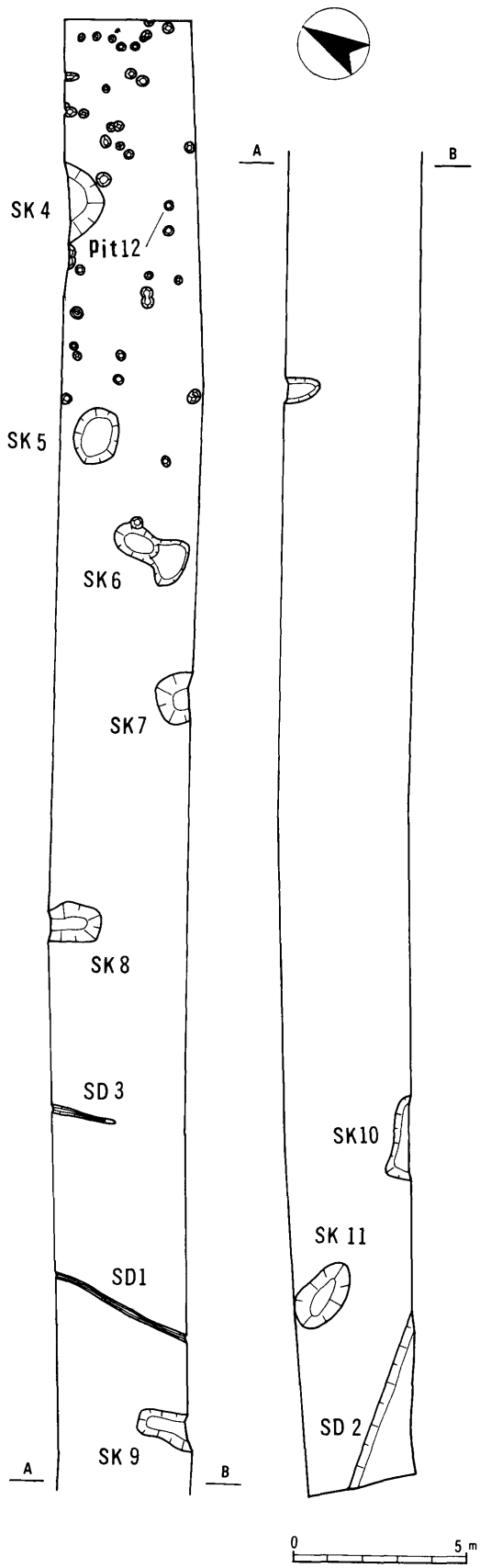
弥生時代中期の遺物には、広口壷、細頸壷、甕、蓋などがある。

細頸壷（１～２）は、受け口状にやや内傾させた口縁をもつ。１の外面には刻み目を持つ棒状浮文を２個１対貼付する。浮文間にヘラ状具による斜格子文を配している。２は、櫛状具を断続的に動かした波状文を施し、文様帯下端を刺突文で飾る。

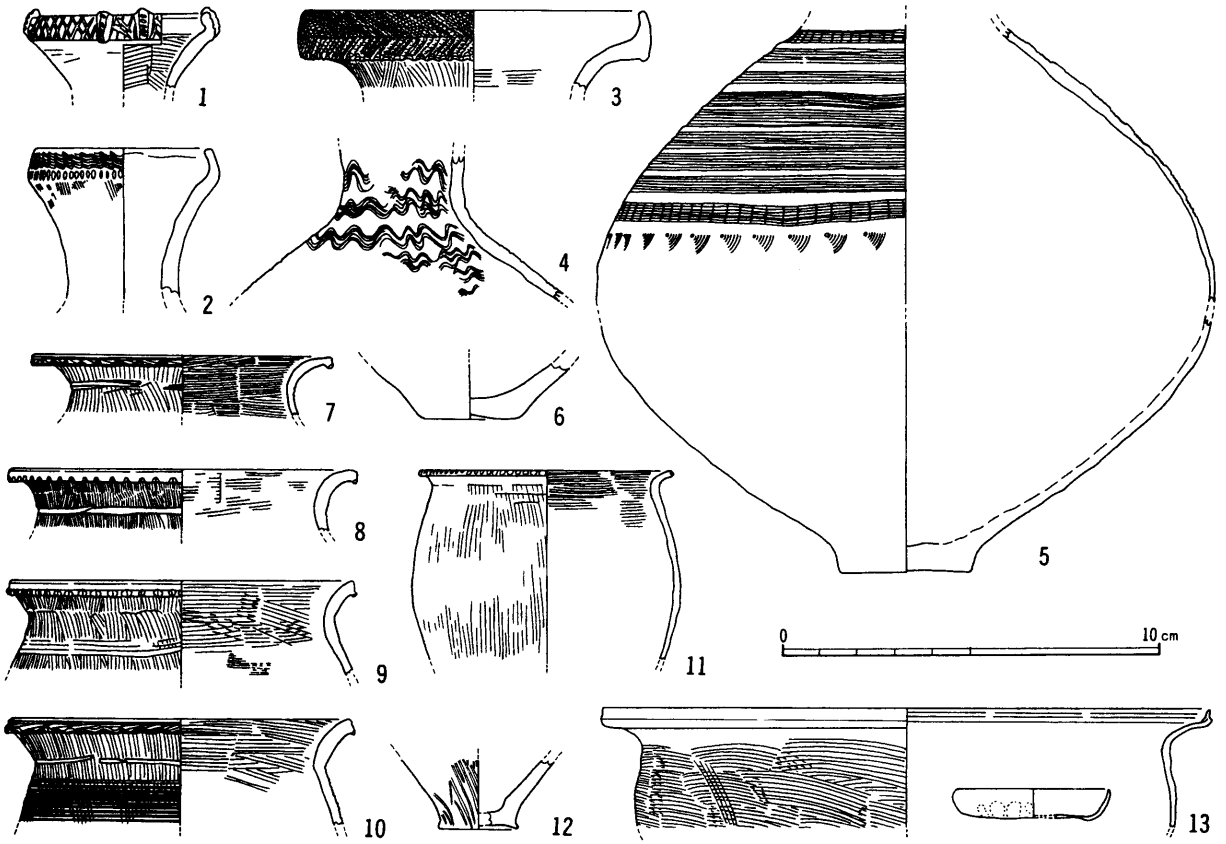
広口壷（３）は水平に開いた口縁部を垂直に立ち上がらせて外面に面をもつ壷で、櫛状具により羽状に刺突文を飾る。

壷（４）は、頸部から体部上半にかけて粗雑な波状文を６帯施す。

壷（５）は、最大径が体部中央にある大形の壷で、２帯の簾状文の間に、７帯の直線文を配し、文様帯の最下段を扇状文で飾る。体部下半には、細かい横



第26図　B区平面図（１：200）



第27図　B区遺物実測図（1：4）

位のヘラミガキが見られる。

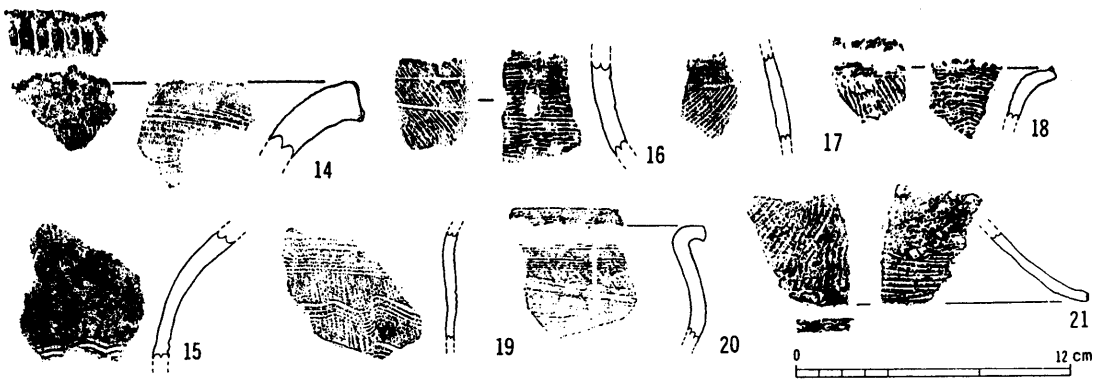
16には2条のヘラ描沈線、17はヘラ描沈線間に斜めの縄文を施す。6は壷の底部でやや上げ底気味になっている。

甕（7～10）は、ゆるやかに外反する口縁部を垂下させ、その下端に櫛端具による刻み目を施す。7～8はヘラ描沈線文、9は櫛描沈線文、10はヘラ描きと櫛描きの両方の沈線文を頸部にめぐらす。11は外方に開いた口縁端部に刻み目を、18は口縁内面に横位のハケ調整ののち、2帯の波状文を施す。12は、甕の底部でやや上げ底につくっている。

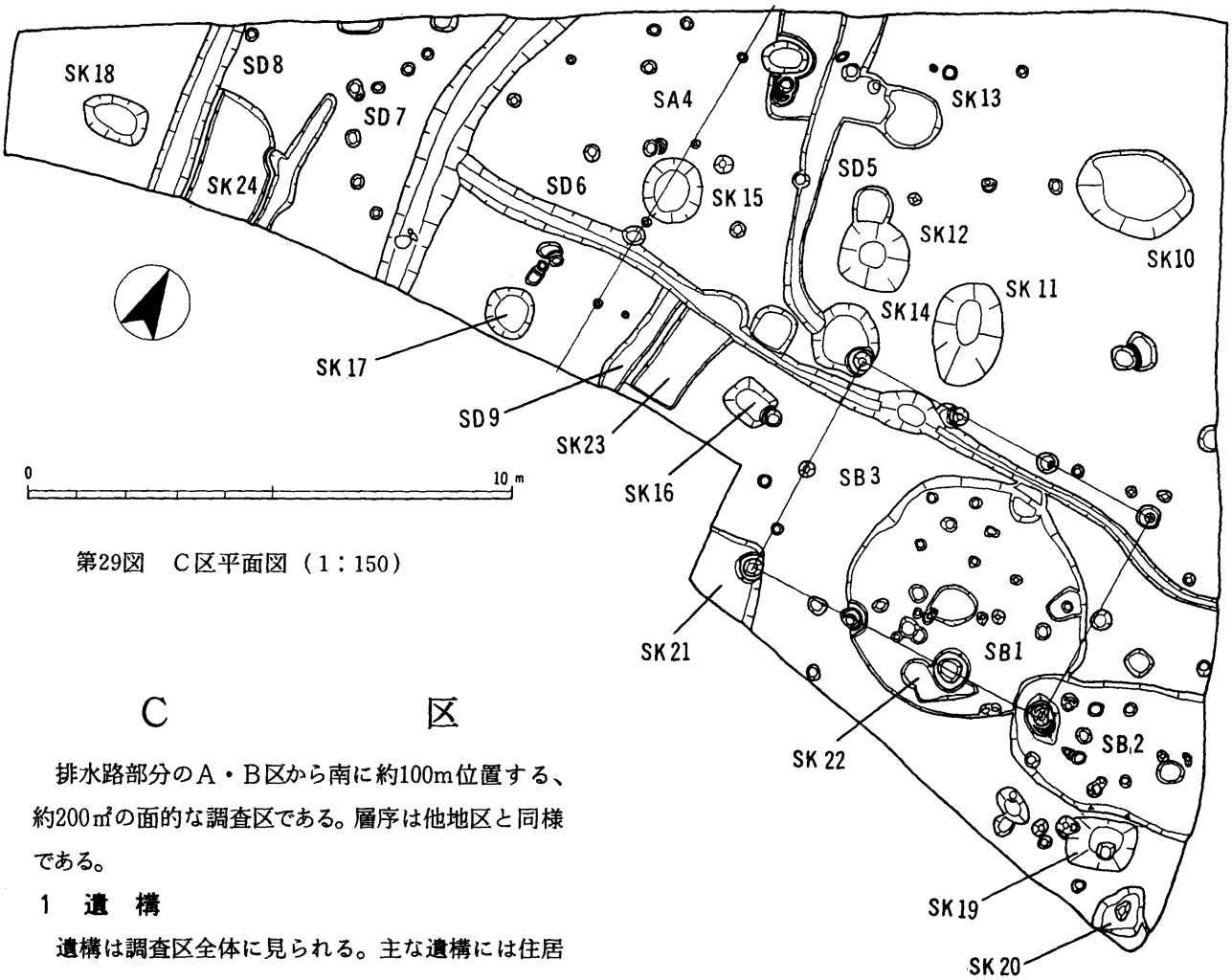
蓋（21）は、口縁部をハケ調整したのち、櫛状具により端部に刻み目を施す。

室町時代後期の遺物は、すべて小穴群出土の遺物で土師器小皿、鍋などがある。また包含層から土釜や常滑産の壷が出土している。

土師器鍋（13）は、口縁部を上方につまみ上げた三角形状を呈しており、体部外面に粗いハケ調整を斜位に行なう。時期的には新田編年[3]の7類、16世紀代に比定されよう。



第28図　B区弥生土器拓影（1：3）



第29図　C区平面図（1：150）

C　　区

排水路部分のA・B区から南に約100m位置する、約200㎡の面的な調査区である。層序は他地区と同様である。

1　遺　構

遺構は調査区全体に見られる。主な遺構には住居跡3棟、溝6条、土坑12基、柱列1列などがある。時期的には弥生時代中期、平安時代、室町時代後期に大別される。

弥生時代中期の遺構には、竪穴住居2棟、溝4条、土坑12基などがある。

竪穴住居ＳＢ１は、径6.5mのほぼ円形の住居跡で、住居内に多数の小穴を検出したが主柱穴は確認できなかった。また中央部と南壁近くで土坑を検出したが、中央部に位置する土坑からも焼土は見られなかった。埋土内から石鏃（21）の他に土器細片が多数出土した。ＳＢ２は、長軸２mほどの東西に長い楕円形状を呈する。主柱穴や炉跡などは検出されなかった。ＳＢ１～２は炉跡や主柱穴などが確認できず住居跡としての決定要素に欠けるが、その平面形態から住居跡として取り扱った。

溝跡としては、ＳＤ５～８がある。ＳＤ５は溝幅30cm～80cm、深さ10cmほどの浅い南北溝で、その南端をやや東に曲げる。東西溝ＳＤ６は、溝幅40cm、深さ10cmほどの溝である。南北溝ＳＤ７は、溝幅１m、深さ40cm、南北溝ＳＤ８は、溝幅70cm、深さ20cmほどの溝である。ＳＤ６～８はほぼ磁北にのる溝である。

土坑にはＳＫ10～21がある。これらの土坑の平面形は円形か楕円形を呈し、断面形は、摺鉢状を呈すものが多い。最も大きい土坑がＳＫ10で、2.3m×1.5m、深さ40cmほどある。坑内から石鏃（20）のほか土器片が多数出土した。これらの土坑群の性格としては、確実な共伴遺物はないが、貯蔵穴、もしくは土坑墓の可能性が考えられよう。

平安時代の遺構には掘立柱建物ＳＢ３がある。桁行6.8m、梁行4.8mの３間×２間の東西棟の建物で、柱間は桁行で2.4m＋2.0m＋2.4m、梁行で2.4m＋2.4mである。柱掘形は45～30cmのほぼ円形である。

棟方向はN84°Wである。柱穴から土器片が出土した。

柱列ＳＡ４は、小穴の径がすべて20cmほどしかない。小穴間は約2.0mの等間である。出土遺物は、土師器細片のみで時期を決定する要素に欠く。方位はＮ８°Ｅであり、ＳＢ３の西に約35尺離れて並ぶため、同時期と考えた。

室町時代後期の遺構には、ＳＤ９がある。溝幅60cm、深さ10cmほどの南北溝で、土師器（22～23）が出土した。

2　遺　物

出土遺物には、弥生時代中期の土器や石製品の他に、平安時代、室町時代の土器などがある。

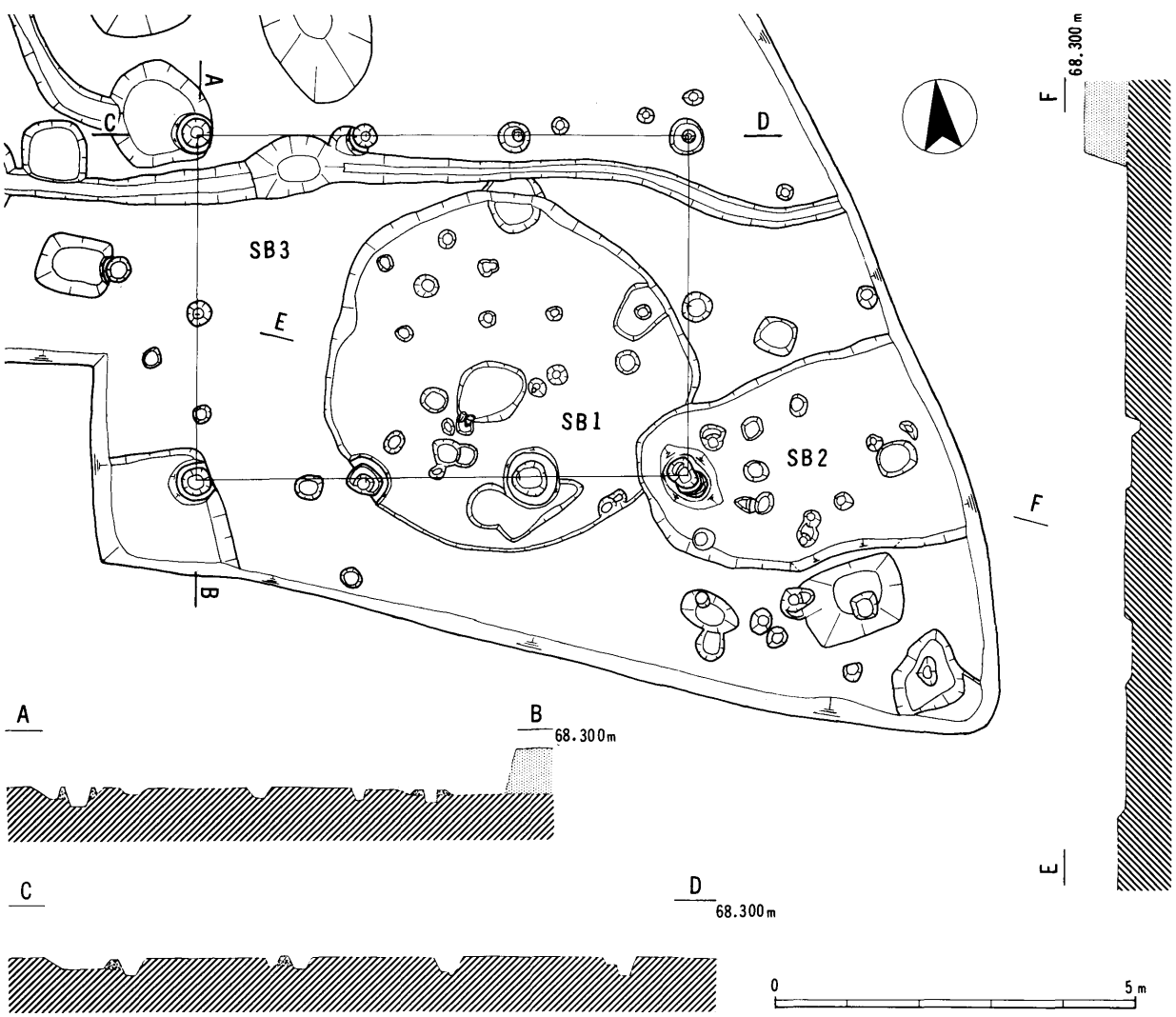
弥生時代中期の土器には、広口壷、細頸壷、甕、鉢、高杯があり、石製品には石鏃などがある。

広口壷は、外反させた口縁部に面をもち、ヘラ状具による沈線をめぐらしたのち、櫛状具により刺突文を施すもの（１～２）、３・26のように刻み目文のみのもの、無文のもの（27）がある。また口縁端部を垂下させて端部に面をもち、端面に１～２と同様に沈線と刺突文を施したもの（４・25）、無文のもの（28）もある。これらの土器の外面には縦位に、口縁部内面には横位にハケ調整されている。２～３の頸部にはヘラ状具による沈線が２条めぐる。

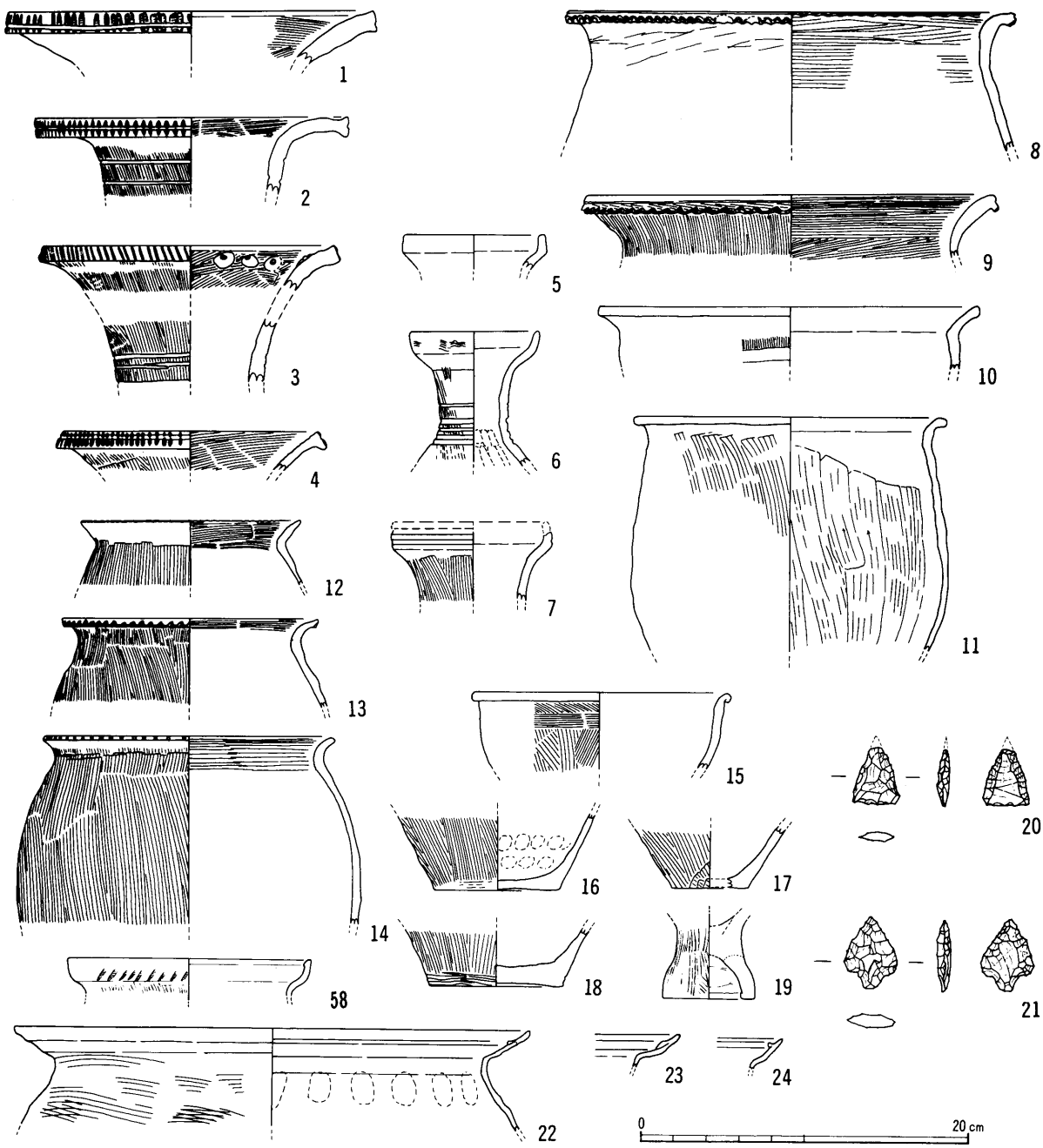
また、口縁部内面に浮文や突起を貼付する土器が多く、３は竹管を押した円形浮文を３個１対にし、26には刻み目を加えた棒状浮文を横位に貼り付ける。

細頸壷（５～７）は、受口状の口縁部をもち、６の口縁部には波状文、７には凹線文が見られる。

文様としては、頸部に櫛状具による粗雑な横線文を施す31のほか、35のように縦位にハケ調整した後に、ヘラ描沈線を２条横位に施した間に波状文を描き、他をナデ消したものや、30や32のように縄文を施し、２条のヘラ描沈線により区画したものが見られる。また38はハケ調整のあと二又ヘラ状具により格子文を施している。29は櫛状具による刻み目を施した凸帯の細片である。



第30図　竪穴住居及び掘立柱建物平面・断面図（１：100）



第31図　C区遺物実測図（1：4，20・21は1：2）

甕は、近江系のもの（58）があるものの、大半が外反させた口縁端部に刻み目を施したもの（12～14・40・43～44・47・49）である。また口縁端部を櫛状具により垂下させ、その下端に刻み目を施したもの（8・47～48）もある。これらの土器には指による圧痕を施した土器（8・39・47）も多い。10は、口縁部を「く」の字状に外反させ、外面に縦位のハケ調整ののち、下半を横位にヘラケズリするものである。11は、体部内面を底から上にヘラケズリするものである。

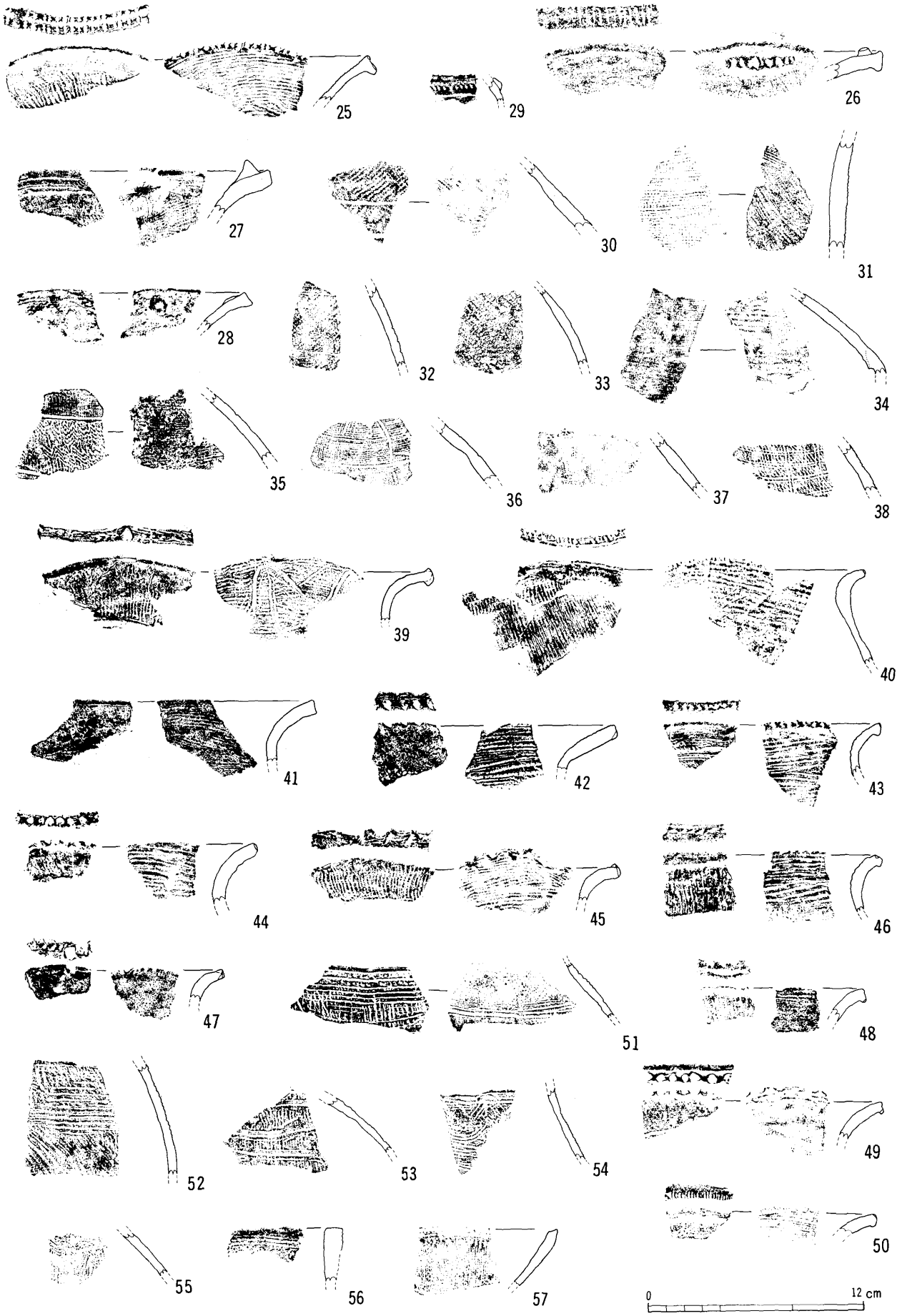
甕の頚部の文様には、櫛描横線文を施したもの（51～53）が認められる。また54には櫛描横線文の他に波状文を施す。

甕底部には平底のもの（16～18）の他、脚台をもつもの（19）もある。

鉢（56）は外面に櫛描横線文を施している。15は鉢か高杯である。外方に丸めた口縁部をもち、体部外面を斜位と横位にハケ調整する。57は外方にのばした口縁部をヨコナデする。

その他の遺物には、サヌカイト製の石鏃（20～21）がある。20は平基無茎式で先端部を欠く。21は凸基有茎式である。

室町時代後期の遺物には、土師器鍋（22～24）がある。いずれも口縁部を折り返した後、さらにヨコナデをする。新田編年[4]の6類、15世紀後半頃である。



第32図　C区弥生土器拓影（1：3）

結　　語

家野遺跡の調査は県営圃場整備事業に伴い、その排水路の調査区と面的調査区の極めて狭い部分であった。しかし雲出川中流域に位置する本遺跡の概要は把握できたと思う。

調査の結果、本遺跡は弥生時代中期中葉に盛期を向かえ、検出された住居跡やそれを取り巻く土坑群から、集落が営まれたことが判明した。その後、平安時代にも掘立柱建物や土坑墓が認められ、断続的に生活が営まれていたと言えよう。

今回の調査で検出された竪穴住居跡は、出土した遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。ＳＢ１の平面形態は、ほぼ正円形を呈している。伊勢地方では弥生時代の竪穴住居の平面形態の変化は、円形から方形に変化していくと考えられ、その変遷の過渡期を中期に求められる。[5] 雲出川流域の中期中葉の竪穴住居跡の検出例としては、約5.5km下流の和遅野遺跡[6]（二本木）で３棟、一志町片野遺跡[7]で５棟、同町鳥居本遺跡[8]で１棟がある。和遅野遺跡の住居跡は、本遺跡のとほぼ同時期と考えられ、その平面は、遺構全体を検出していないが、１棟は楕円形、２棟は方形と見ることが出来よう。また下流の片野遺跡の住居跡は、中期中葉でも新しい段階であり、５棟とも方形を呈している。

中期には平面形態の過渡期を迎えるが、中期中葉の段階には、雲出川の中流域では両方が併存していたことを示しているのであろう。

遺物の大半は弥生土器である。ほとんど細片であるが、壷形土器の体部の文様に縄文を施した貝田町式の古段階に属するもの（第32図の30・32）が多く見られる。また口縁部外面に１条の沈線をめぐらせた土器（第31図の１～２・４、第32図の25）があり、類例としては、和遅野遺跡に１例（壷形土器48）[9]ある。これはこの地域の特徴であろうか。また甕形土器は、外面を縦位にハケ調整する畿内的な甕が一般的であり、口縁内面に波状文を施した「近江系」甕と呼ばれる土器（第24図の４、第31図の58）も出土している。これらの出土土器は、雲出川の中流域の良好な資料となろう。　　（宮田勝功）

註

（１）福村直人「服部遺跡」（『昭和57年度県営圃場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1983）
（２）山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986）
（３）新田洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚え書」（『三重考古学研究１』　三重考古学談話会　1985）
（４）註（３）に同じ
（５）伊藤久嗣他『納所遺跡』（三重県教育委員会　1980）
（６）稲生進一『和遅野遺跡発掘調査報告』（白山町教育委員会　1975）
（７）河瀬信幸他『片野遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1985）
（８）『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県教育委員会　1988）
（９）註（６）に同じ

家野遺跡　Ａ区

No.	出土遺構	器種・器形	法量（cm）			成形・調整技法	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	整理No.
			口径	器高	底径							
1	ＳＤ１	弥生壷	(21.7)	－	－	口縁部ヨコナデ 内面横位のハケ	やや粗 砂粒多	良	(外)暗褐色 (内)赤黄色	口縁部１／４	２個１対の瘤状突起	102
2	ＳＫ４	〃 〃	(17.5)	－	－	口縁部ヨコナデ 体部外面縦位、 内面横位のハケ	やや粗 砂粒多	〃	赤褐色	口縁部１／10	口縁端部に刻目	101
3	ＳＫ13	〃 〃	－	－	－	体部外面縦位のハケ	やや粗 砂粒多	〃	(外)赤褐色 (内)淡褐色	体部から頸部 １／３		104
4	ＳＫ７	〃 甕	(14.8)	－	－	口縁部ヨコナデ	精	〃	淡褐色	口縁部		106
5	ＳＤ１	〃 壷	－	－	4.8	体部外面縦位のハケ	金雲母	〃	淡褐色	体部から頸部	外面に煤・頸に横線文	103
6	〃	〃 甕	－	－	4.0	体部外面縦位のハケ 横位のヘラミガキ	金雲母	〃	(外)赤褐色 (内)暗褐色	体部以下	頸部に横線文	105
7	ＳＫ11	偏平片刃石斧	遺存長 6.1	最大幅 5.0	厚さ 1.1			－	淡緑灰色	下半のみ遺存	基端部欠損・粘板岩製	112
8	ＳＸ15	瓦器椀	14.9	5.2	6.2	内外面ヘラミガキ	精	良	灰黒色	完形	器高指数29 連結輪状文３個	110
9	〃	〃 〃	14.8	5.2	5.5	〃	精	〃	明灰色	〃	器高指数28 連結輪状文２個	111

第４表　出土遺物観察表（１）

No.	出土遺構	器種・器形	法量（cm）			成形・調整技法	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	整理No.
			口径	器高	底径							
10	SK7	弥生壷	−	−	−	内面ナデ	精 細砂粒	良	赤褐色	体部片	外面に複帯構成の直線文	159
11	〃	〃 〃	−	−	−	〃	細砂粒	〃	淡白褐色	頸部片	外面に直線文、簾状文	151
12	SK12	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ	砂粒	〃	暗褐色	体部片	外面に波状文1 帯複帯構成の直線文1帯	157
13	〃	〃 〃	−	−	−	〃	砂粒多	〃	(外)黒褐色 (内)赤褐色	〃	12と同一個体外面に直線文1帯、波状文1帯	155
14	SK10	〃 〃	−	−	−	外面横位のヘラミガキ	細砂粒	〃	淡褐色	〃	外面に区画した直線文	154
15	SK7	〃 甕	−	−	−	内面横位のハケ	砂粒	〃	淡褐色	口端部片	口端部に刻目	152
16	SK12	〃 壷	−	−	−	外面斜位のハケ	細砂粒	〃	暗褐色	体部片	外面に直線文2帯	156
17	SD1	〃 〃	−	−	−	口縁部ヨコナデ	細砂粒	〃	淡褐色	口縁部片	外面に簾状文	158

家野遺跡　B区

1	SK5	弥生壷	(9.0)	−	−	内面横位のハケ	細砂粒	良	淡褐色	口縁部片	棒状浮文2帯・斜格子文	201
2	包	〃 〃	(7.0)	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位のハケ、内面ナデ	粗	〃	暗褐色	口縁部～頸部 1／8	波状文、刺突文	511
3	包	〃 〃	(18.0)	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位・内面横位のハケ	粗 砂粒多	〃	暗黄褐色	口縁部1／10	綾杉状に刺突文	513
4	SK6	〃 〃	−	−	−	内面ナデ	細砂粒	〃	暗褐色	頸部～体部片	波状文6帯	202
5	SK4	〃 〃	−	−	6.7	外面下半ヘラミガキ 内面横位のハケ	砂粒多	軟	淡黄褐色	体部～底部片	外面に黒斑、内面に剥落、簾状文2帯、直線文7帯、扇形文1帯	203
6	包	〃 〃	−	−	−	外面横位のハケ 内面ヘラミガキヘラケズリ	粗	〃	(外)黒褐色 (内)淡褐色	底部片	外面に煤	508
7	SK9	〃 甕	(15.6)	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	砂粒	〃	赤褐色	口縁部～頸部片	口縁端部に刻目ヘラ描沈線文	205
8	包	〃 〃	(18.0)	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位・内面横位のハケ	金雲母 粗	〃	暗褐色 一部赤褐色	口縁部1／5	口縁端部に刻目ヘラ描沈線文	512
9	包	〃 〃	(17.8)	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	砂粒多	〃	赤褐色	口縁部1／10	口縁端部に刻目櫛描横線文	514
10	SK8	〃 〃	(17.4)	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	細砂粒	〃	淡赤褐色	口縁部～頸部片	口縁端部に櫛状工具による押引文、ヘラ描沈線文	206
11	SK8	〃 〃	(13.0)	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	金雲母 細砂粒	〃	暗褐色	口縁部～体部 1／3	口縁端部に刻目	203
12	包	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面ナデ	粗	〃	〃	底部1／3	外面斜位のハケ調整	509
13	P'12	土師器鍋	(32.0)	−	−	口縁部ヨコナデ 外面斜位のハケ	精 金雲母	〃	褐色	口縁部～体部片		209
14	SK10	弥生壷	−	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位・内面横位のハケ	金雲母 細砂粒	〃	暗褐色	口縁部片		257
15	SK9	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	金雲母 細砂粒	軟	〃	頸部1／3	弧状の波状文	255
16	SD1	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ 内面横位のハケ	砂粒多	良	淡赤褐色	頸部片	ヘラ描沈線文2条	254
17	SK4	〃 〃	−	−	−	外面横位のヘラケズリ 内面ナデ	金雲母	〃	淡褐色	体部片	ヘラ描沈線間に縄文	258
18	包	〃 甕	−	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位・内面横位のハケ	金雲母 細砂粒	〃	褐色	口縁部片	口縁端部に刻目・ 口縁部内面に波状文	517
19	SK4	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ 内面ナデ		〃	〃	体部片	直線文、波状文・近江系	251
20	包	〃 鉢	−	−	−	口縁部ヨコナデ外面ハケ・ヘラミガキ内面ハケ・ナデ	砂粒 雲母	〃	(外)褐色 (内)黒褐色	口縁部片		507
21	SD1	〃 蓋	−	−	−	外面斜位のハケ 内面横位のハケ		〃	暗褐色	口縁部片	口縁端部に刻目	259

第5表　出土遺物観察表（2）

家野遺跡　C区

No.	出土遺構	器種・器形	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	整理No.
1	SK19	弥生壷	(21.8)	—	—	口縁部ヨコナデ 内面横位のハケ	細砂粒多	良	淡赤褐色	口縁部片	口縁部外面刺突文竹管による沈線1条	328
2	SK5	〃 〃	(18.8)	—	—	外面斜位のハケ 〃	砂粒	やや脆	淡褐色	口縁部1／3	口縁部外面に刺突文 頸部外面に沈線2条	303
3	SK8	〃 〃	(17.4)	—	—	〃 〃	細砂粒 金雲母	良	暗褐色	口縁部～頸部	口縁部外面に刺突文 円形浮文(3個1対)	310 311
4	SB1	〃 〃	(15.4)	—	—	〃 〃	金雲母	〃	褐色	口縁部片	口縁部外面に刻み目	301
5	SD23	〃 〃	(8.5)	—	—	口縁部ヨコナデ 体部内外面ナデ	砂粒	やや軟	淡褐色	口縁部1／5		324
6	SK10	〃 〃	—	—	6.0	外面斜位のハケ 底部外面にヘラミガキ(?)	細砂粒	良	褐色	底部のみ		306
7	SK21	〃 〃	(9.2)	—	—	口縁部ヨコナデ 外面縦位のハケ	細砂粒 金雲母	〃	淡褐色	口縁部～体部 1／4	口縁部外面に凹線文	327
8	SK10	〃 甕	(27.0)	—	—	内面縦位のハケ	細砂粒 金雲母	〃	〃	口縁部1／6	口縁端部に棒状工具による押圧文2個の指頭による押圧文	304
9	SK17	〃 〃	(24.6)	—	—	外面縦位のハケ	細砂粒	〃	褐色	口縁部片	口縁端部に櫛状工具による押引き文	315
10	〃	〃 〃	(22.8)	—	—	〃	砂粒 金雲母	〃	〃	〃	口縁部外面に刻目	314
11	SK15	〃 〃	(18.6)	—	—	外面縦位のハケ 内面縦位のヘラケズリ	細砂粒 金雲母	〃	〃	口縁部～体部 1／4	体部に付煤	319
12	SK17	〃 〃	(15.0)	—	—	〃 内面横位のハケ	細砂粒 金雲母	〃	〃	口縁部片	口縁部外面に刻目	320
13	SK10	〃 〃	(15.4)	—	—	外面斜位のハケ 内面横位のハケ	細砂粒 金雲母	〃	〃	口縁部～体部 1／4	〃	307
14	〃	〃 〃	(17.3)	—	—	〃 内面ナデ	砂粒 金雲母	〃	淡褐色	口縁部～体部 1／5	〃	309
15	〃	〃 鉢?	(15.0)	—	—	外面斜位のハケ	細砂粒	〃	暗褐色	口縁部片	頸部に横線文。高杯か?	308
16	SK17	〃 甕	—	—	(7.6)	外面縦位のハケ 内面ナデ	細砂粒 金雲母	〃	褐色	底部片		318
17	SB1	〃 〃	—	—	(4.7)	外面縦位のハケ 〃	砂粒	やや脆	赤褐色	底部1／4		302
18	包	〃 〃	—	—	—	口縁部ヨコナデ。外面縦位のハケ。内面横位のハケ	細砂粒 金雲母	良	褐色	口縁部片	口縁部に刻目	517
19	SK11	〃 台付甕	—	—	15.6	外面縦位のハケ 内面ハケ	細砂粒 金雲母	〃	淡褐色	脚台部片		316
20	SK10	石鏃	遺存長 1.8	最大幅 1.4	厚さ 0.3	打製	—	—	—	一部欠	サヌカイト	325
21	SB1	石鏃	長さ 2.1	最大幅 1.5	厚さ 0.4	〃	—	—	—	完形	〃	326
22	SD9	土師器鍋	(31.2)	—	—	口縁部ヨコナデ 外面斜位のハケ内面ナデ、ユビオサエ	細砂粒 金雲母	良	淡褐色	口縁～体部 1／6		322
23	〃	〃 〃	—	—	—	口縁部ヨコナデ	細砂粒	〃	〃	口縁1／10		323
24	SK23	〃 〃	—	—	—	〃	細砂粒	〃	〃	口縁部片		313
25	SB1	弥生壷	—	—	—	外面斜位のハケ 内面横位のハケ	金雲母	〃	褐色	口縁部片	口縁部に刺突文	355
26	SK10	〃 〃	—	—	—	口縁部ヨコナデ 内面ナデ	砂粒	軟	淡褐色	口縁部片	口縁部に棒状浮文	365
27	〃	〃 〃	—	—	—	〃 外面斜位のハケ	砂粒	良	〃	口縁部片	口縁部に瘤状突起	360
28	SD8	〃 〃	—	—	—	口縁部ヨコナデ	細砂粒	軟	淡白褐色	口縁部片	口縁部に円形浮文	362
29	SK12	〃 〃	—	—	—	内面ナデ	金雲母	良	褐色	頸部片	刺突文を施す貼付凸帯	375

第6表　出土遺物観察表（3）

No.	出土遺構	器種・器形	法量（cm）			成形・調整技法	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	整理No.
			口径	器高	底径							
30	SK10	弥生壷	−	−	−	内面斜位のハケ	細砂粒 金雲母	良	褐色	体部片	ヘラ描沈線間に縄文	381
31	SK22	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	砂粒 金雲母	〃	淡褐色	頚部片	直線文	383
32	SB1	〃 〃	−	−	−	内面ハケ	細砂粒	〃	〃	体部上半片	直線文3帯	357
33	SK10	〃 〃	−	−	−	内面横位のハケ	〃	やや脆	赤褐色	〃	縄文	368
34	〃	〃 〃	−	−	−	外面ヘラミガキ 内面横位のハケ	砂粒	良	淡褐色	口縁部片	口縁部に刻目	367
35	SK17	〃 〃	−	−	−	内面横位のハケ	細砂粒	〃	赤褐色	体部上半片	沈線間に波状文	379
36	SK21	〃 〃	−	−	−	内面ナデ	粗砂粒	〃	淡褐色	〃	沈線間に直線文	389
37	SB1	〃 〃	−	−	−	剥離のため不明	〃	やや脆	〃	体部片	櫛状櫛線文 擬似流水文	356
38	〃	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ	細砂粒	良	淡白褐色	〃	直線文	352
39	SK10	〃 甕	−	−	−	口縁部ヨコナデ。外面縦位のハケ。内面横位のハケ	金雲母	〃	褐色	口縁部片	口縁部に刺突文	370
40	SK11	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	細砂粒	〃	淡白褐色	〃	口縁部に刻み目	371
41	SK14	〃 〃	−	−	−	口縁部ヨコナデ 〃	細砂粒 金雲母	〃	褐色	〃	煤	377
42	SB2	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 〃	細砂粒 金雲母	〃	黒褐色	〃	口縁部に刻目	391
43	SB1	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ	細砂粒	〃	淡褐色	〃	〃	351
44	SK10	〃 〃	−	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位のハケ	〃	〃	〃	〃	〃	380
45	〃	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	粗砂粒	〃	〃	〃	〃	363
46	〃	〃 〃	−	−	−	〃 〃	細砂粒 金雲母	〃	〃	〃	〃	369
47	〃	〃 〃	−	−	−	〃 〃	細砂粒	軟	淡赤褐色	〃	〃	364
48	包	〃 〃	−	−	−	〃 〃	砂粒多	良	淡褐色	〃	〃	603
49	SK14	〃 〃	−	−	−	〃 〃	細砂粒 金雲母	〃	赤褐色	〃	〃	386
50	SB1	〃 〃	−	−	−	内面ハケ	金雲母	〃	褐色	体部上半片	波状文	358
51	SK11	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面横位のハケ	細砂粒	〃	〃	〃	横線文	374
52	SB1	〃 〃	−	−	−	外面斜位のハケ 内面ナデ	〃	〃	〃	〃	〃	354
53	包	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面ナデ	細砂粒 金雲母	〃	〃	〃	煤　横線文	601
54	SD6	〃 〃	−	−	−	内面ハケ	〃 〃	〃	〃	〃	波状文	359
55	SK20	〃 〃	−	−	−	外面縦位のハケ 内面ナデ	砂粒 金雲母	〃	〃	〃	〃	387
56	SK18	〃 鉢	−	−	−	口縁部ヨコナデ	砂粒多 〃	〃	赤褐色	口縁部片	直線文	388
57	SB1	〃 高杯	−	−	−	口縁部ヨコナデ。外面縦位のハケ。内面横位のハケ	細砂粒 〃	〃	淡褐色	〃	黒斑	382
58	SK21	〃 甕	(14.8)	−	−	口縁部ヨコナデ 外面縦位のハケ。内面ナデ	砂粒 〃	〃	淡黄褐色	〃	口縁部に刻目近江系	329

註「法量」内の（　）内の数値は推定を表す。

第7表　出土遺物観察表（4）

Ⅶ　多気郡勢和村　畝ノ上遺跡

本遺跡は勢和村丹生集落の北方約250mほどに位置し、行政上多気郡勢和村丹生畝ノ上に所在する。遺跡は櫛田川右岸の河岸段丘低位面上に立地する。

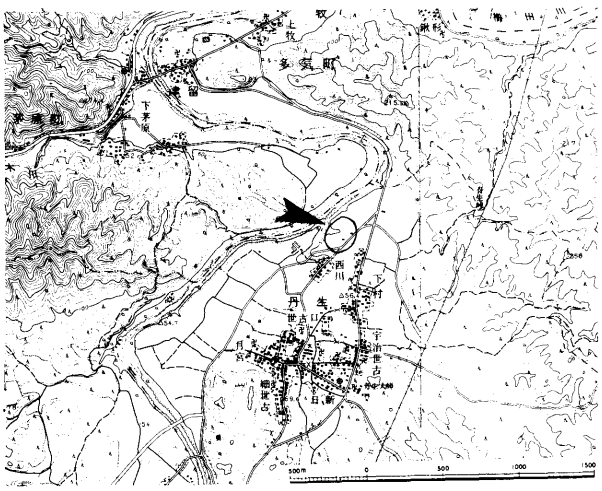
調査は、昭和63年12月13日から開始し同年19日に終了した。調査面積は約440㎡である。

遺構は、掘立柱建物１棟、土坑５基などがある。

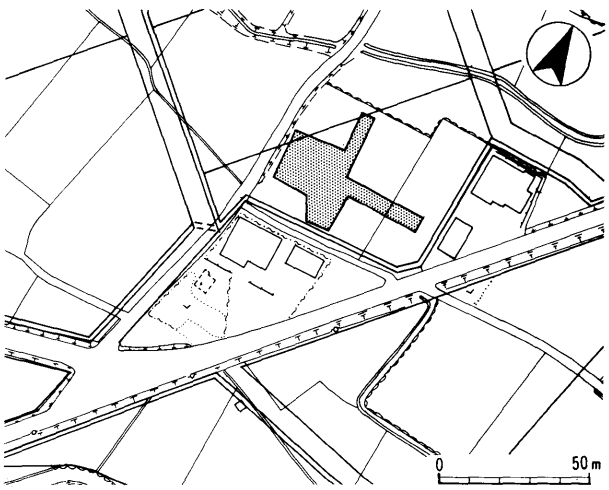
掘立柱建物（ＳＢ１）は、３間×２間の東西棟で総柱建物である。桁行6.6m、梁行4.0m。柱掘方は径28～48cmで不揃いである。柱間は、桁行2.2mの等間、梁間2.0mの等間である。数か所の柱掘方内では柱痕跡を認めた。ＳＢ１の東にあるＳＫ２は不定形な土坑であるが、坑内から焼土・炭化物を出土した。ＳＢ１に伴う施設とも考えられる。

遺物は若干の小片にとどまった。ＳＫ３から土師器小皿（１）、ＳＢ１の柱掘方内から２を出土した。２は復元図示することは困難であるが、須恵器薬壷片とし、９世紀頃の所産と考え、掘立柱建物の時期を平安時代前葉と考える。

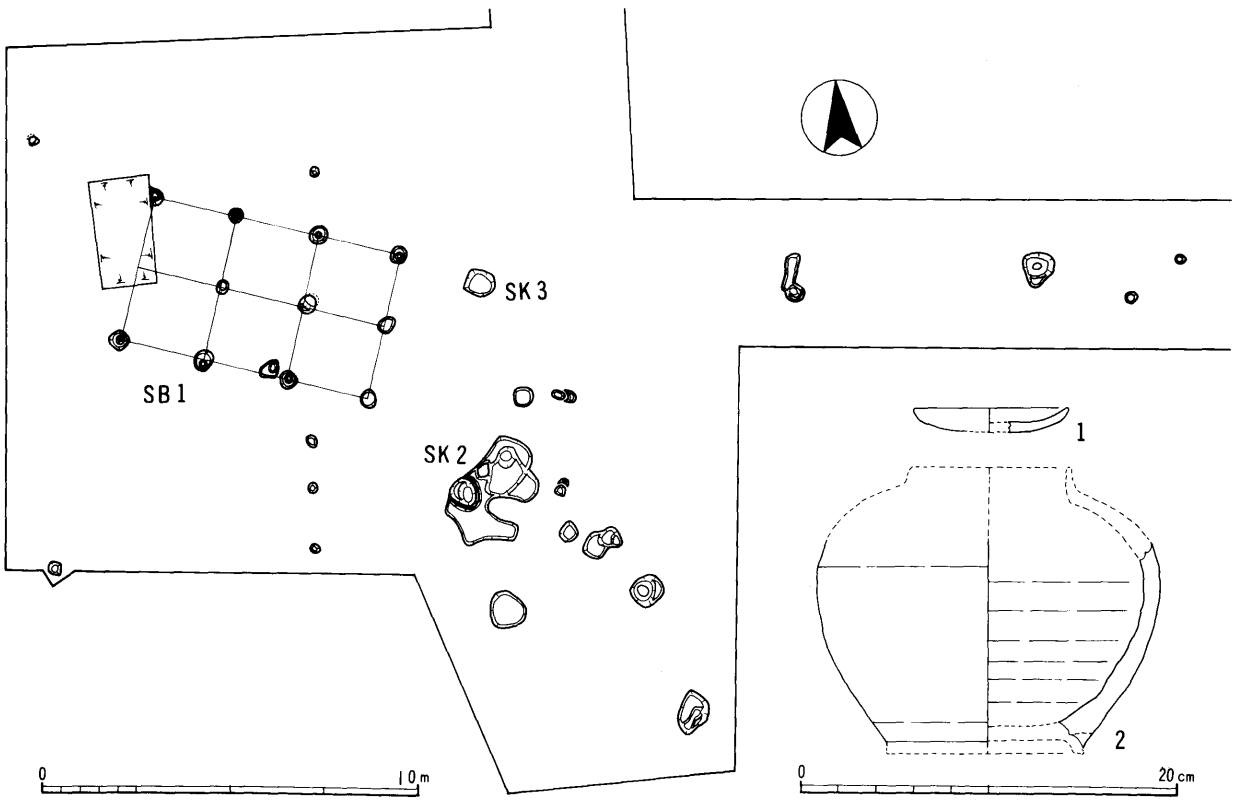
（宮田勝功）



第33図　遺跡位置図（１：50,000）
（国土地理院地形図『横野』『国東山』から）



第34図　調査区位置図（１：2,000）



第35図　調査区平面図（１：200）及び出土土器実測図（１：４）

Ⅷ　多気郡勢和村　丹生地区内遺跡群

本年度施行分の県営圃場整備事業に伴って、多気郡勢和村丹生地区内では３ケ所において第１次範囲確認調査を実施した。そのうちの２ケ所、若宮遺跡と大川原遺跡では、第２次範囲確認調査を行うこととなった。以下遺跡ごとに記述を行う。

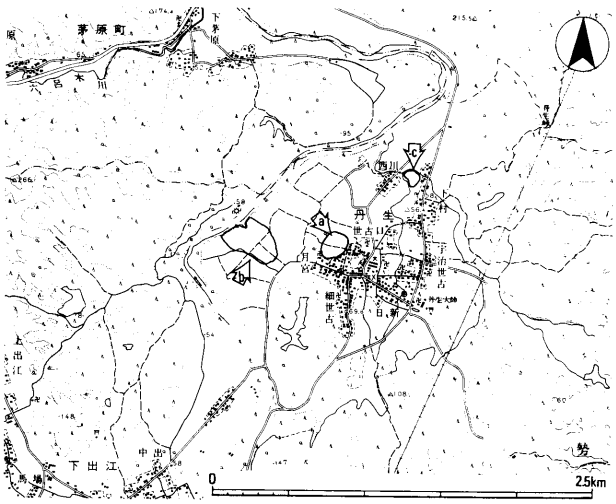
１　若宮（わかみや）遺跡[1]

当遺跡は字若宮に所在する。地形的には、櫛田川右岸の河岸段丘である平坦地にあり、現況は畑地となっている。第２次範囲確認調査は３箇所の調査溝（Ａ～Ｃ区）を設定して調査したところ、遺構が全ての調査区で濃厚であった。このため、排水路にあたるＡ区のみを調査対象として、他は盛土によって現状保存することとした。なお、Ａ区以外ではＣ区の溝ＳＤ１のみ完掘した。

（１）Ａ区の調査方法

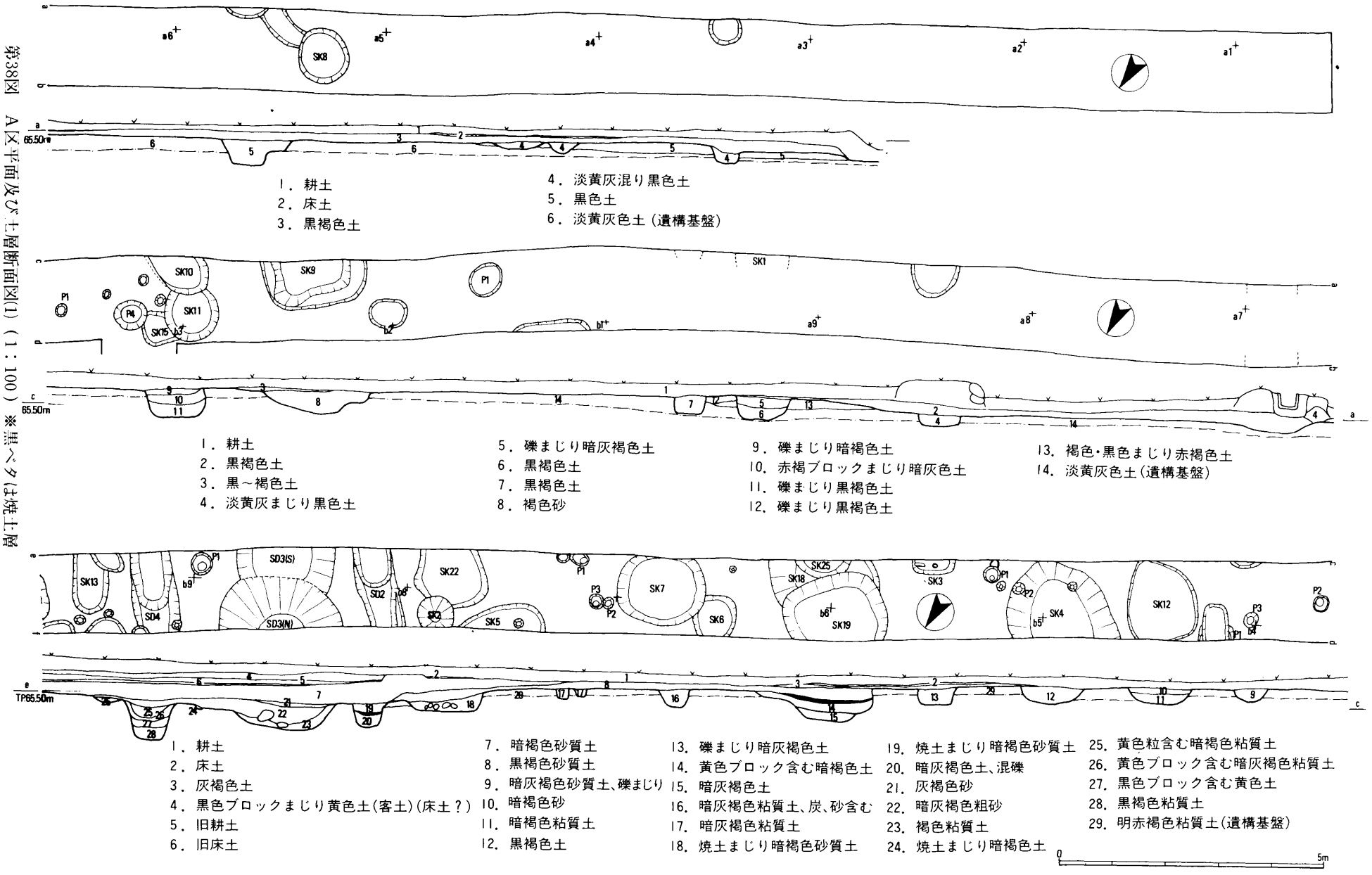
Ａ区は対象面積170㎡で、昭和63年11月17日から12月３日にかけて調査を行った。この間、近接するＢ区は平面図（検出状況）のみを作成した。

調査は４ｍ毎に地区杭を設定したが、調査区が直線でないため、途中の２点（c_1、c_9ポイント）で屈曲させた。c_1ポイント以西（ａ・ｂライン）は西からa_1、a_2の順にａラインを９等分し、続いてc_1ポイントまでをｂラインとして９等分した。



第36図　遺跡位置図　a＝若宮 b＝大川原 c＝柳浦（１：50,000）
（国土地理院１：25,000『横野』『国束山』から）

第37図　調査区位置図（１：2,000）



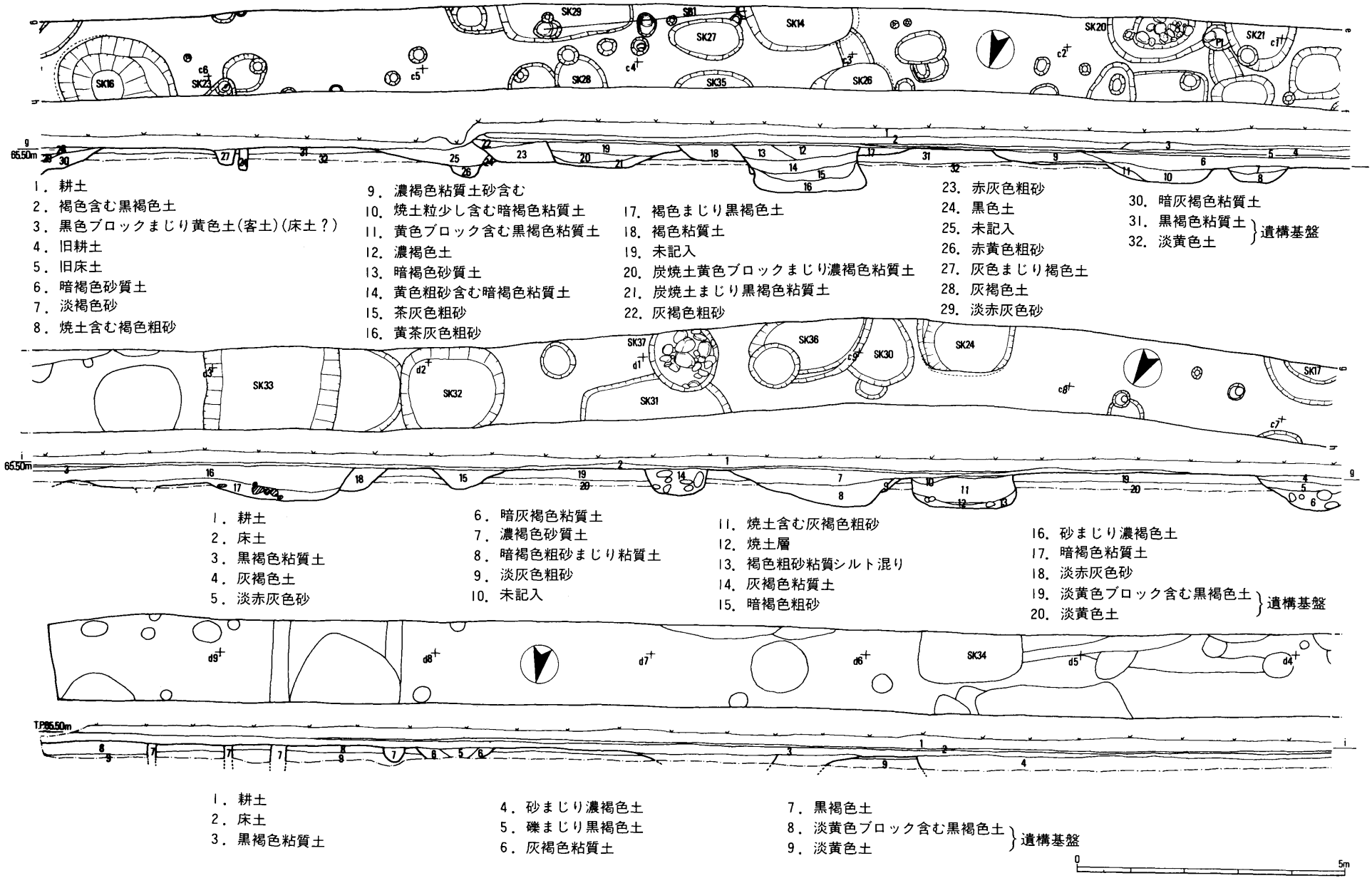
1．耕土
2．床土
3．黒褐色土
4．淡黄灰混り黒色土
5．黒色土
6．淡黄灰色土（遺構基盤）

1．耕土
2．黒褐色土
3．黒～褐色土
4．淡黄灰まじり黒色土
5．礫まじり暗灰褐色土
6．黒褐色土
7．黒褐色土
8．褐色砂
9．礫まじり暗褐色土
10．赤褐ブロックまじり暗灰色土
11．礫まじり黒褐色土
12．礫まじり黒褐色土
13．褐色・黒色まじり赤褐色土
14．淡黄灰色土（遺構基盤）

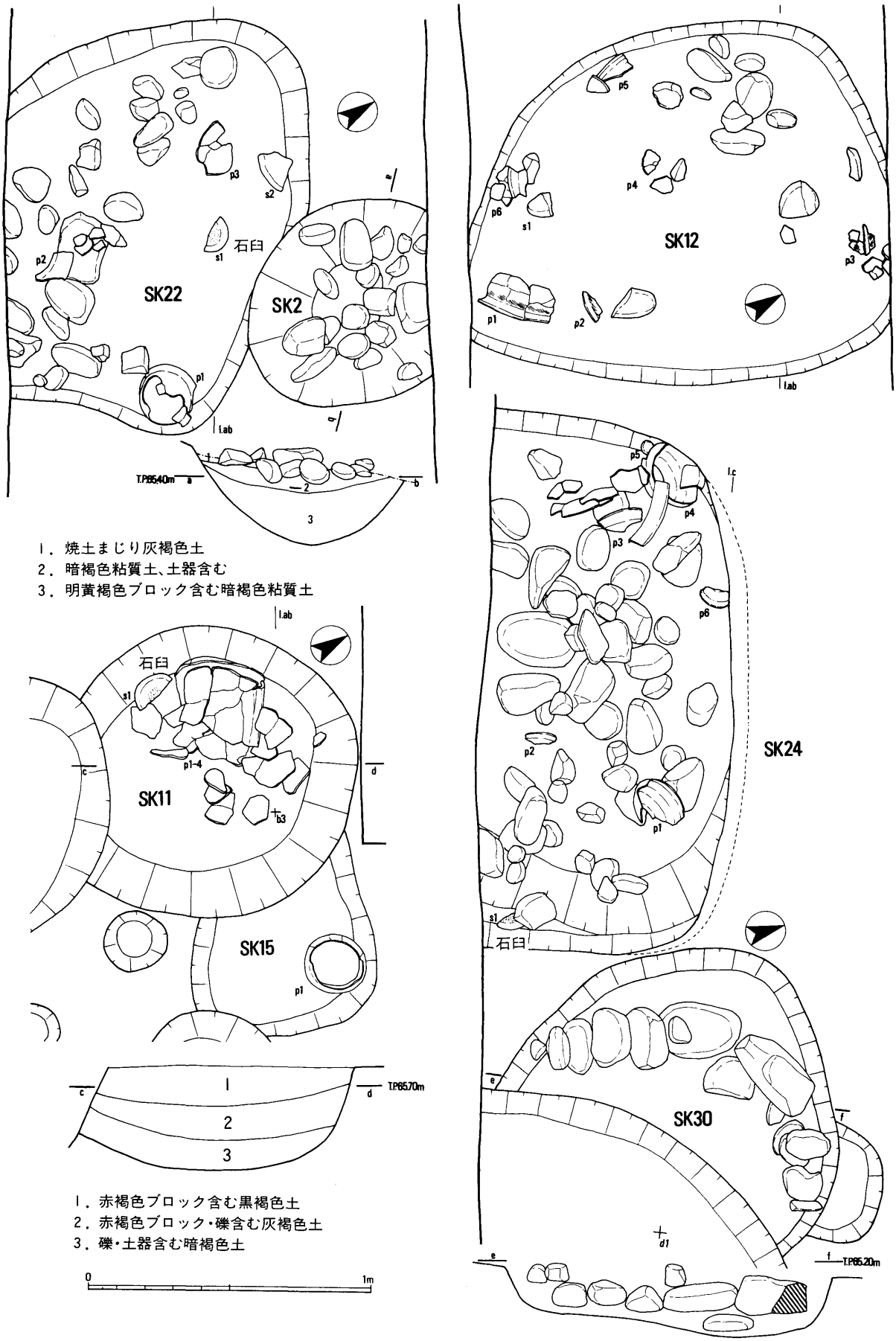
1．耕土
2．床土
3．灰褐色土
4．黒色ブロックまじり黄色土（客土）（床土？）
5．旧耕土
6．旧床土
7．暗褐色砂質土
8．黒褐色砂質土
9．暗灰褐色砂質土、礫まじり
10．暗褐色砂
11．暗褐色粘質土
12．黒褐色土
13．礫まじり暗灰褐色土
14．黄色ブロック含む暗褐色土
15．暗灰褐色土
16．暗灰褐色粘質土、炭、砂含む
17．暗灰褐色粘質土
18．焼土まじり暗褐色砂質土
19．焼土まじり暗褐色砂質土
20．暗灰褐色土、混礫
21．灰褐色砂
22．暗灰褐色粗砂
23．褐色粘質土
24．焼土まじり暗褐色土
25．黄色粒含む暗褐色粘質土
26．黄色ブロック含む暗灰褐色粘質土
27．黒色ブロック含む黄色土
28．黒褐色粘質土
29．明赤褐色粘質土（遺構基盤）

0　5m

第38図　A区平面及び土層断面図(1)（1：100）※黒ベタは焼土層



第39図　A区平面及び土層断面図(2)（1：100）



第40図　A区各個別遺構平面・断面・立面図（1：20）

c_1からc_9のライン（cライン）はabラインの北偏10°とし、9等分した。同様にc_9ポイント以東（dライン）はcラインの北偏10°とし、9等分した。これを調査区の主軸とグリットとして調査を行った。なお、dラインのd_3グリット以東は排水路変更のため、未掘のまま埋めもどすこととなった。

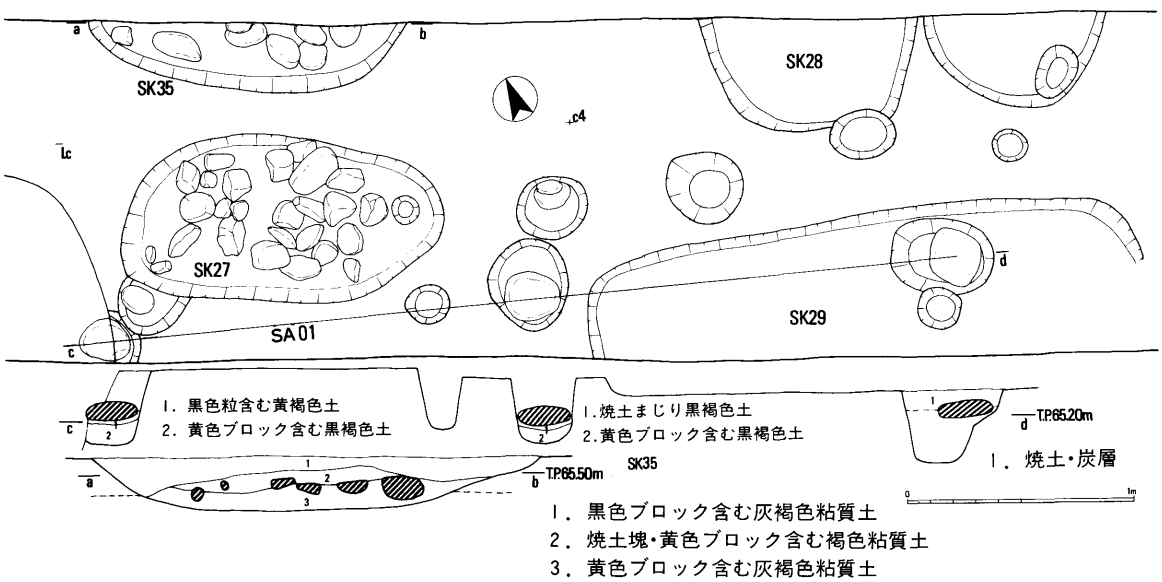
（2）検出した遺構

調査区では、b_7グリットからc_2グリットにかけては暗褐色砂質土の遺物包含層が認められたが、その他では、基本的に耕作土直下で遺構が認められた。遺構の基盤は一部黒色土（黒ボク）であるが、地山は淡黄灰～明褐色系粘質土のものである。土坑、溝、ピットが認められた。

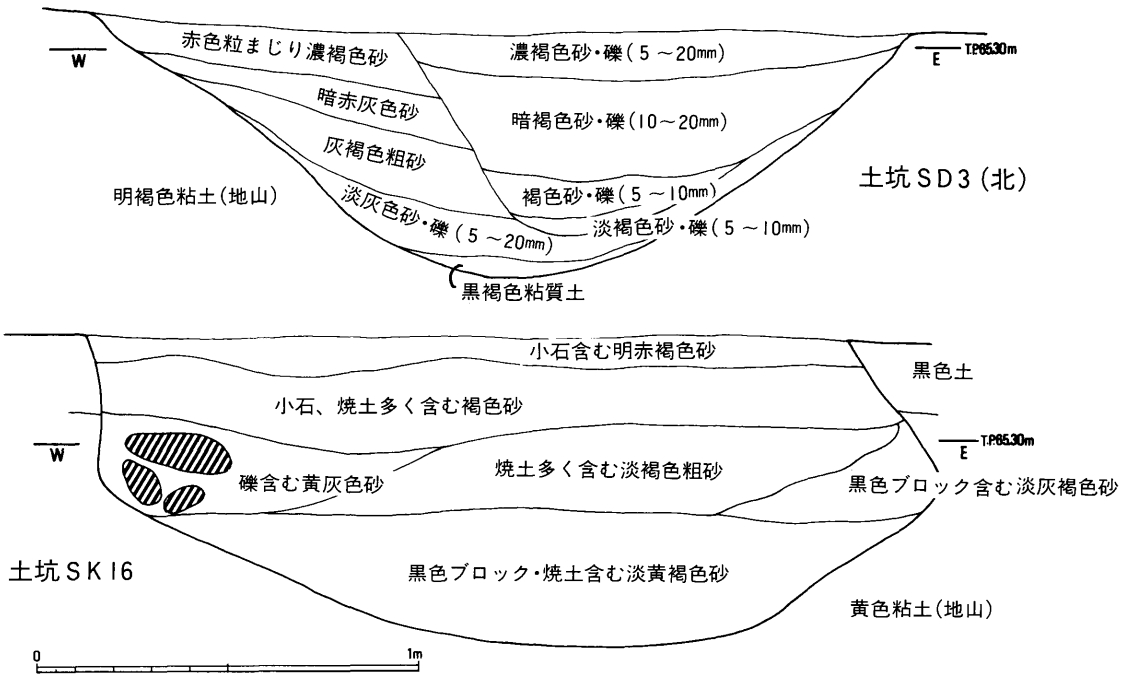
土坑は埋土が、a．基本的に砂礫で構成されているものと、b．黒褐色系の土で構成されているもの、の2者に大別される。aは土坑SD3（北・南）、SK4・9・14・16・21・24・26・29・32・36などがあり、総数はbに比べると少ないが土坑SD3（北・南）・SK4・24など一括性の高い土器群が含まれる土坑が多い。砂礫は5mm前後の小礫が大部分であるが、土坑SD3（北）では20mm前後の礫層が認められる（第42図）。なお、aに認められる礫は全て角礫である。

土坑埋土の特色としてはこの他に、拳大～人頭大の川原石を含むものが数多く認められる。これらをその状態から大別すると、a．規則性をもって配列されているもの（土坑SK30）、b．底面に意図的に貼りつけられていると考えられるもの（土坑SK24）、c．土坑掘削直後に投げ入れられるているもの〔土坑SD3（南）・SK12・20・21・22・27・33・35・37〕、d．埋土中に含まれているもの（土坑4・16・24・36）、e．土坑の上層部分にのみ認められるもの（土坑SK2）となる。このうち、人為的な配石の認められるa・bは土坑24・30に限られ、両者は近接していることから相互に関連した遺構と考えられる。cには土坑内を埋め尽くすように大量に入るものと、少量認められるものがある。前者は特に遺物の出土量が少ないが、後者は比較的まとまった土器が出土する傾向がある。前者には大形の石が入るもの（SK20・33・37）と、小形の石が入るもの（SK27・35）がある。小形の石が入る2基は並行して設けられており、焼土が混入する点（第41図）など、大形の石がはいるものとは別の用途が考えられるが、共に埋土に砂が入らない点では一致する。dについては埋土が赤味を帯びた礫や砂によって構成されている傾向がある。eは埋土にブロック土を含むことや礫群下の層のみが粘質を帯びることなど、比較的短期間に埋めもどされた後、配石された可能性も考えられる（第40図左上）。

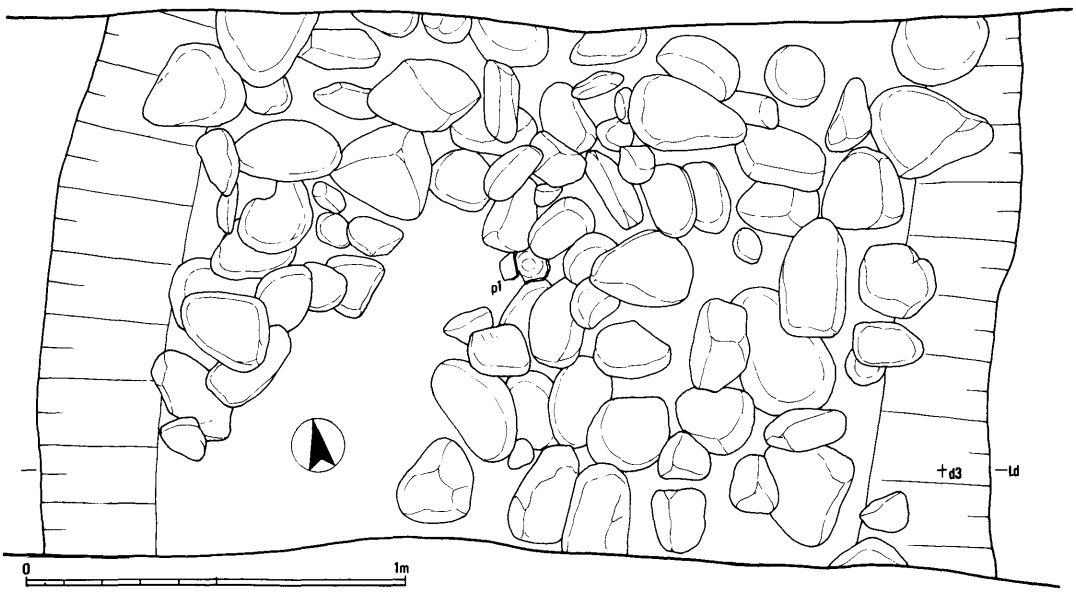
次に土坑の形態を見ておこう。土坑形態の中で特徴的なものを挙げると、a．断面が摺鉢状を呈するもの〔土坑SD3（北・南）・SK2・4）、b．断面がU字形を呈するもの（SK1・7・11・19・37）、c．土坑壁面がオーバーハングしているもの



第41図　A区土坑SK35、柱列SA01他 平面・断面図（1：30）



第42図　A区土坑SD3(北)及び土坑SK16土層断面図（1：20）



第43図　A区土坑SK33礫群・土器出土状況（1：20）

（SK10・14・16・24・26）、d．2段掘りのもの（SK9・17・20・36）、e．緩やかに落ち込むもの（SK5・12・15・21・27・29～30・33・35）がある。aはSK2を除いたものは埋土や礫の状態が比較的よく似たものである。bの埋土に砂礫を伴うものはないが川原石やブロック土を伴うものがある。cはいわゆる袋状土坑に類似するが、オーバーハングは全面に認められるのではなく、一方に偏っている。埋土は砂礫の他、土のみが入るものもあるが、後者はSK10のみで他と比べてやや小形であり、用途の違いによるものとも考えられる。dは砂の入った土坑（SK9）の他に川原石の入った土坑があり、後者の方が量的には多い。

最後に、土坑以外の遺構について概観したい。溝は確実なものではSD2・4とC区SD1がある。前2者は同一方向に伸び、南側で一段下がることや上段に焼土層を挟むことなど共通点が多い。C区SD1では一括性の高い土器群が大量に認められた。柱列は確実なものではc_3c_4グリッドのSA1がある。これは柱掘形の掘削後にある程度埋め戻し、根

石を据えて整えられている（第41図）。調査区内では２間分が確認されたに留まるが、建物になるものと考えられる。その他にピットが各所に認められたが、ｂ・ｃライン上とＢ区の南半部に集中する。

（３）出土した遺物

ａ．土器類

土器類は整理箱にして37箱ある。内訳は土師器、陶器、磁器で、それぞれ全体の85.7％、11.1％、3.2％である[2]。このうち土師器は鍋、甕の類を中心に当遺跡独特のものがあり、第44図に器種分類案を示した。

皿は形態と法量によって３類に分類できるが、Ｃについては坏として分離するべきかも知れない。Ａは口径に対して器高が高く、Ｂは低い。また、Ｂには口径が8.5cm前後のものと10cm前後のものとが認められ、細分できる可能性がある。

蓋Ａはツマミから体部まで連続した粘土紐の巻き上げによって製作されている。口径と形状から茶釜Ａとセットになるものと考えられる。

茶釜は１形態のみ確認された。口縁端部は外側へ開き、下方が若干肥厚している。

羽釜は、口縁端部を外側へ折り返すものである。手法上端面の有無によって細分することができる。胎土は鍋に比べてやや粗い。

鍋は新田洋氏による分類の７類[3]に相当し、口縁部形態で２類に大別できる。共に口縁端部を内側へ折り返す点で共通する。鍋Ａは概して小形で折り返した面に凹線状の強いヨコナデを施すものが大部分であるが、弱いヨコナデを施すもの（66）もある。鍋Ｂは口縁端部外側に面を有するもので、形態上５類に細分できる。鍋Ａは鍋全体のおよそ14.5％、鍋Ｂは85.5％を占める。

鍋Ｂは、B_1、B_2の順にそれぞれ鍋全体の68％、12％、18％、２％、を占め、鍋B_1が圧倒的に多い。口縁端部調整はB_1・B_3～B_4・「十能」のように強いヨコナデを施すものとB_2のように弱いものとがある。器形ではB_1とB_2が共通したものであるが、その他は、それぞれ独自な形態を呈している。「十能」は底部の調整手法や胎土などの点では他の鍋と共通しているので鍋Ｂの系統上にあり、図示したもの以外では小片で数点確認された。

鍋Ａ・Ｂは胎土、調整手法などの点ではほとんど差のないものである。口縁部形態以外では法量に違いが認められる。これらのことから鍋Ａ・Ｂ類は全体として同一の技法によって製作され、その用途によって法量・器形・口縁部形態などの点に相異点が生じているものと考えられる。この点は土坑や溝における出土状況から共伴関係にあると判断されることからも首肯される。

甕はＡ類のみが確認できた。火を受けておらず、貯蔵、あるいはそれに類した使用法が想定できよう。形態的には、口径より体部径が大きいもので、口縁部は「く」の字形に屈曲して開くものと丸味をもった頚部から開くものとがある。体部外面にはハケメ・ナデ・ヘラケズリが茶釜や鍋の類と共通した部分に施されている。

甕Ａは体部内面に墨かそれに類したもので焼成後に横線（第48図103～104のスクリーントーンで示した部分）が引かれている。その線を境に、上は褐色系の付着物が薄く付き、下は赤褐色に変色したり、白～灰色の付着物が厚く付いている。外面の同じ部分にも、白灰色の付着物が認められる例もある（広瀬報文参照）。

焙烙はＡ類のみで、出土も１点であった。形態的には偏平な体部にやや屈曲して開く短い口縁部がつくものである。ハケメ・ヘラケズリ・ナデの施し方や体部・口縁部の形態から甕Ａと製作技法上の緊密さが窺われる。火は受けていない。

陶器・磁器については観察表を参照されたい。陶器のうち、瀬戸、美濃窯と考えられるものについては井上喜久男氏の御教示によれば大窯Ⅰ期の範疇内ということであった。

以上のことからこれらの土器類は、現在の認識[4]による16世紀前半代に収まるものと考えられる。

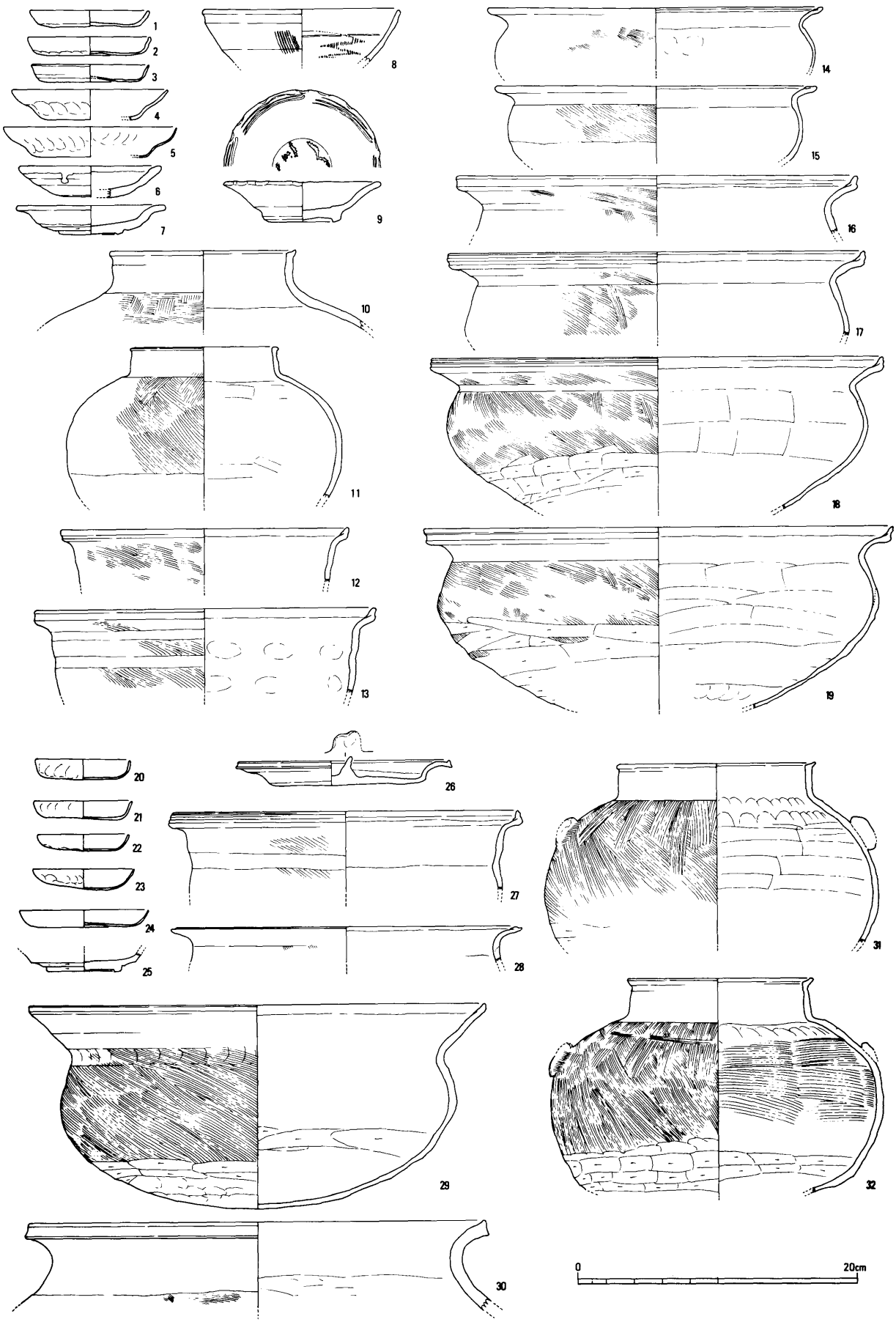
ｂ．石製品

調査区内で確認された石製品には粗製の石臼と擦痕のある石がある。石臼はＡ区で９点、Ｂ区で１点出土している。土坑ＳＫ36に３点、ＳＫ24に２点、ＳＫ４、11、22～23に各１点である。

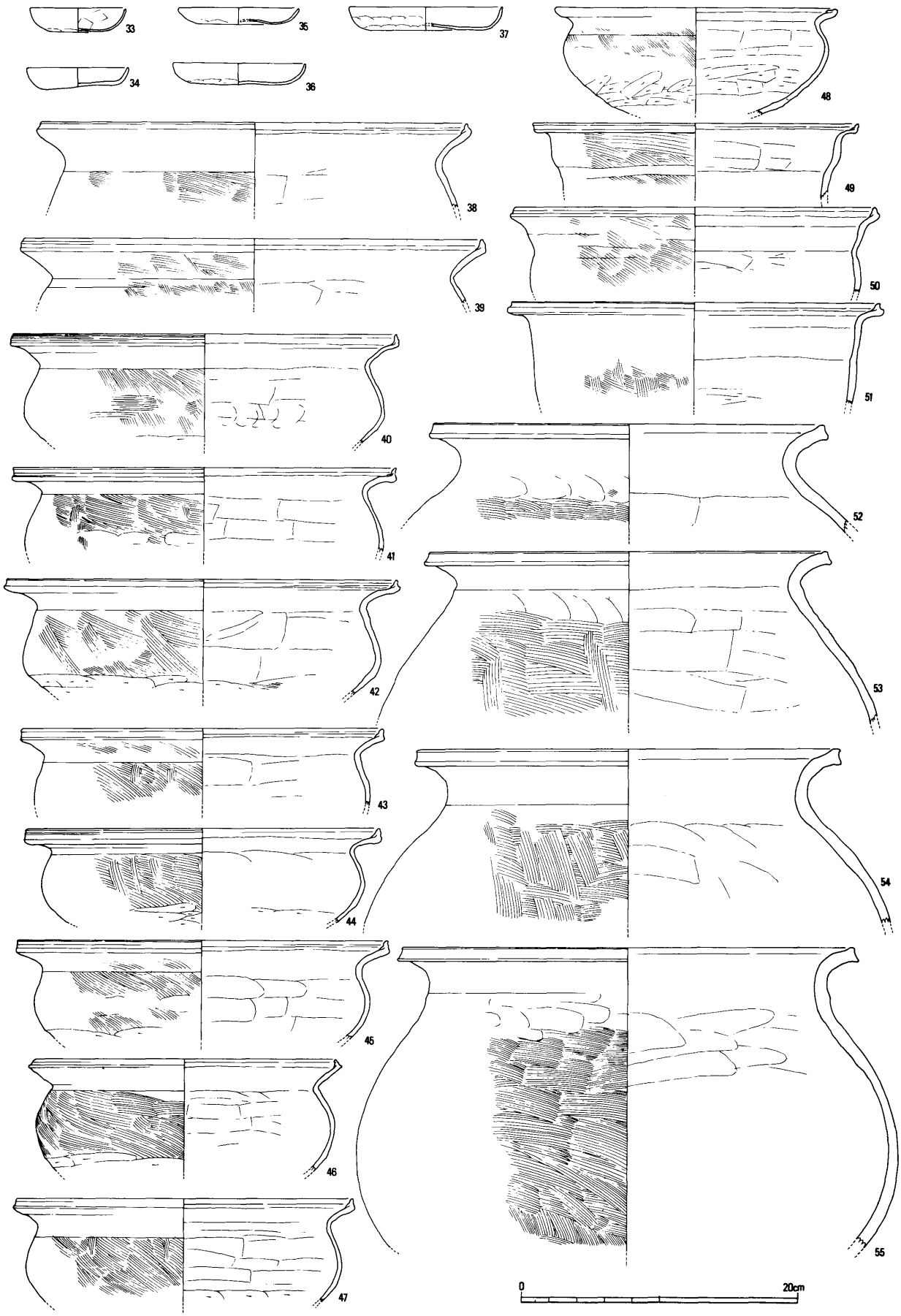
原材は花崗岩質の偏平な川原石を用いている。両面に使用痕があり、断面は凹レンズ状を呈している。完形品はなく、全て破損した状態で出土した。なお、

皿	A		口径６～７cm。	
	B		口径８～11cm。	
	C		口径11～13cm。二段に屈曲して開く。	
蓋	A		平担な体部から屈曲して開く口縁部を有する。 中央にツマミが付く。	
茶釜	A		断面惰円形の体部に直口気味の口縁部が付く。 口縁端部は内側に面を有し、体部上半には２ヶ所に 把手状の偏平な突起が付く。	
羽釜	A		口縁端部を丸く収める。	成形時の口縁端部を 外側に折り返すもの。 口縁部は内彎する。
			口縁端部内側に面を有する。	
鍋	A		口縁端部を内側へ折り返す。端部外側には面を有しない。 口径21～25cm。	
	B 1		口縁部が「く」の字形に屈曲 して開く。 口径25～26cmのものと27～30 cmのものとがある。	口縁端部を内側へ折 り返す。端部外側に 面を有する。
	B 2		口縁部が「く」の字形に屈曲 して開く。口縁部は長い。 口径32cm前後。	
	B 3		頸部がくびれず、口縁部は短 く開く。 口径24～27cm。	
	B 4		頸部に丸みを持ち、口縁部は 短い。 片口と把手が付く。	
「十能」	A		口縁部はそのまま開く。 片口と注口が付く。 「十能」に似た形態を呈する。	
甕	A		口径30cm前後。 頸部は丸みを持ち、口縁部は短かく開いて端部外側に 面を有する。 口縁部径は体部径より小さい。	
焙烙	A		体部は平たい。口縁部はやや屈曲して開き、端部外側に 面を有する。	

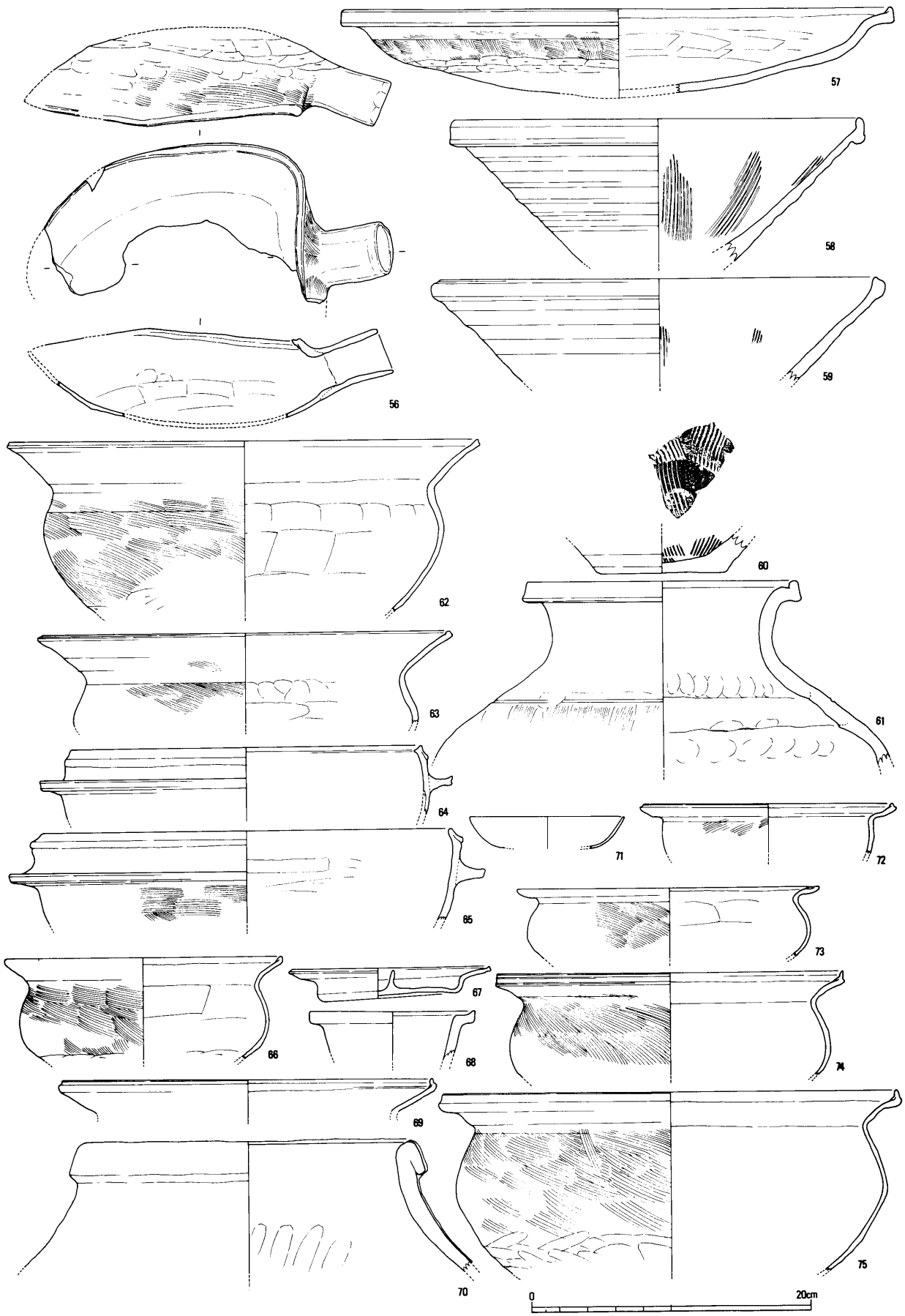
第44図　若宮遺跡出土土師器器種分類図（１：８）



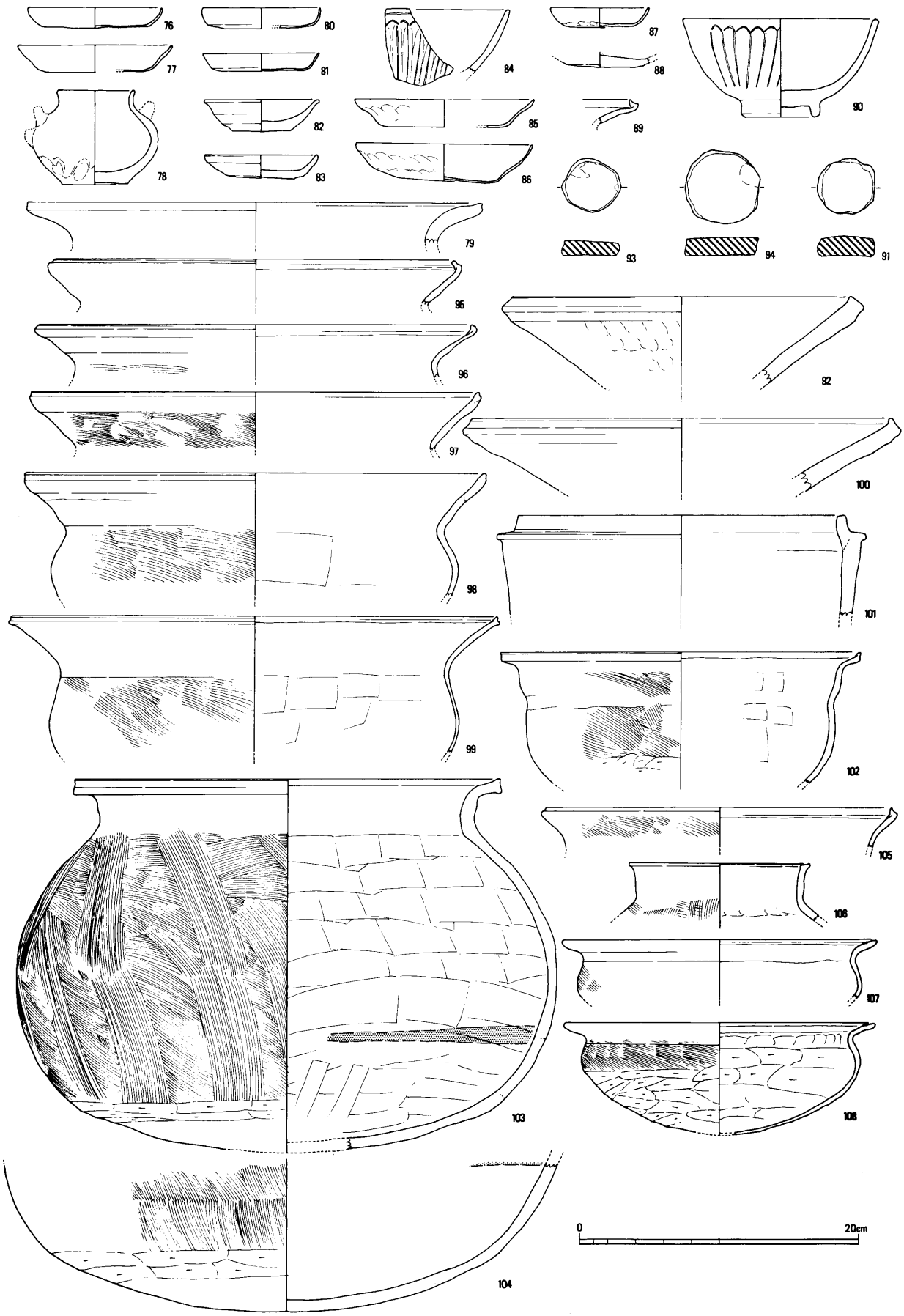
第45図　出土土器類実測図(1)（A区土坑ＳＫ４・24）（１：４）



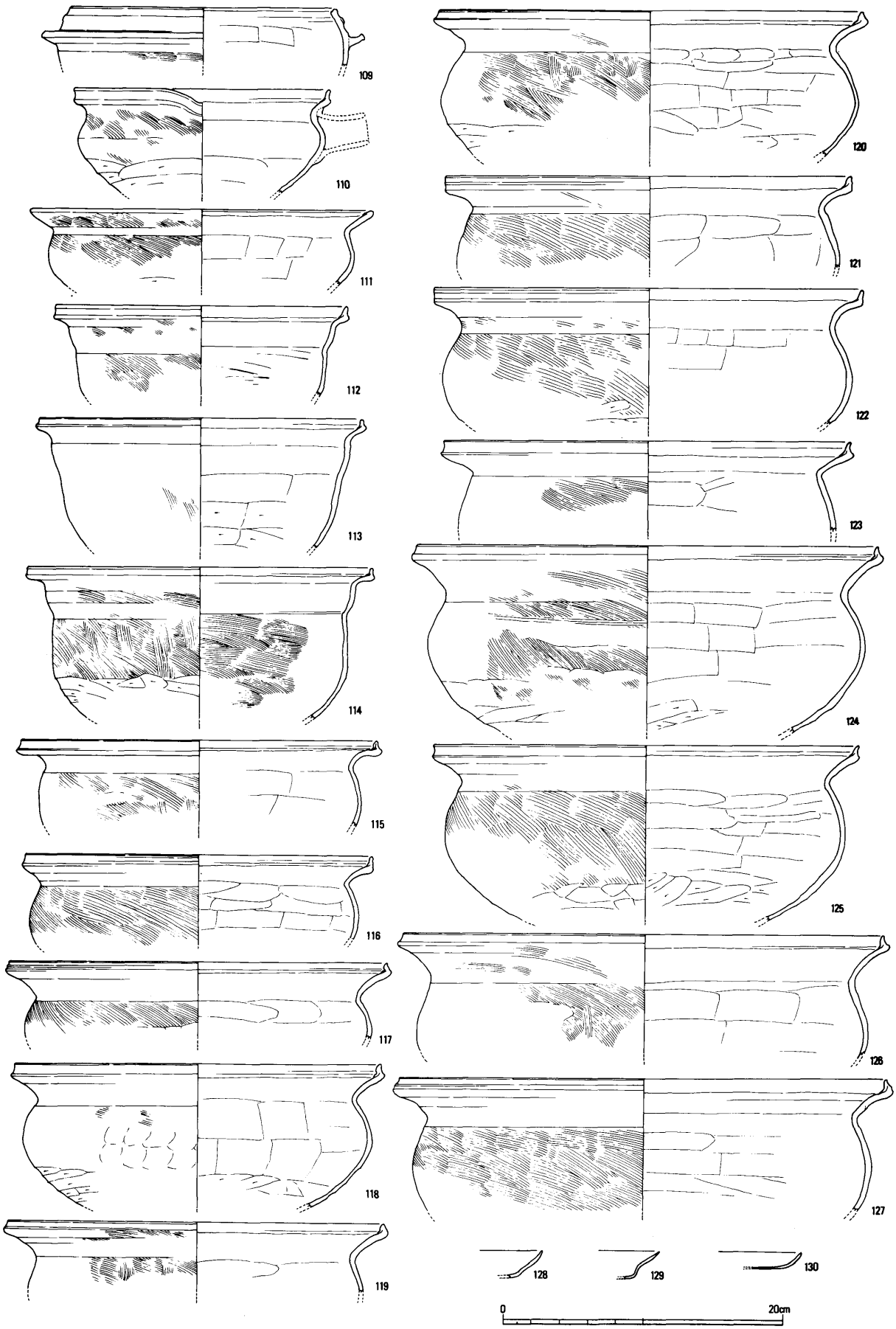
第46図　出土土器類実測図(2)（A区土坑ＳＤ３〔北・南〕）（１：４）



第47図　出土土器類実測図(3)（A区土坑ＳＤ３〔北・南〕他）（1：4）



第48図　出土土器類実測図(4)（A区各遺構）（1：4）



第49図　出土土器類実測図(5)（C区溝ＳＤ１）（1：4）

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	実測No.
1	土師器皿B	A	b 5 土坑SK4	(口)8.6 (高)1.2	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	粗 0.5～1.0mmの小石	良好	(外)暗褐色 (内)淡褐色	口縁 1／3		61
2	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口) 8.8 (高)1.3	外: 〃　〃 内: 〃	密 0.5～1.0mmの小石 赤色小粒	〃	(外)暗褐～淡褐 (内)淡褐	口縁 2／5		60
3	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口) 8.4 (高)1.2	外: 〃　〃 内: 〃	密 0.5～1.0mmの小石	〃	暗～淡褐色	口縁 1／3		63
4	〃　皿C	〃	〃　〃	(口)11.2 (高)2.2	外: 〃　〃 内: 〃	粗 0.5～1.0mmの小石	〃	淡褐色	口縁 1／4		62
5	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)12.4 (高)2.2	外: 〃　〃 内: 〃	密 0.5～2.0mmの小石	〃	白茶色	口縁 1／4		64
6	陶器　小皿	〃	〃　〃	(口)10.3	内・外:回転ナデ、底部に糸切り痕	粗 0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰色 (釉)淡緑灰色	口縁 1／4	口縁端部にのみ釉	58
7	〃　皿	〃	〃　〃	(口)10.7 (高)2.1	外:回転ナデのちケズリ 内:回転ナデ	粗 0.5～4.0mmの小石	〃	乳褐色 (釉)淡灰緑色	4／5	削り出し高台	50
8	青磁　碗	〃	〃　〃	(口)14.3	外:ロクロのちケズリ、施文 内:ロクロナデのち施文	密	〃	灰白色 (釉)灰黄緑色	1／8	同安窯系	57
9	〃 綾花皿	〃	〃　〃	(口)11.4 (高)3.0	外:ロクロのちケズリ 内:　〃	粗 0.5～2.0mmの小石	〃	淡赤褐 (釉)淡緑色	3／5	外底面には釉なし 内面底は釉かきとり	51
10	土師器茶釜A	〃	〃　〃	(口)13.4	外:ハケのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄褐色	1／2		52
11	〃　〃	〃	〃　〃	(口)10.7	外:ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:ナデ・板ナデのちヨコナデ	密	〃	淡褐色	1／4	外面にスス	54
12	〃　鍋B_3	〃	〃　〃	(口)20.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5～2.0mmの小石	〃	淡褐色 外面黒色(スス)	口縁 1／4	〃	67
13	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)24.5	外:　〃 内:ナデ、オサエのちヨコナデ	密 0.5～3.0mmの小石	〃	暗褐色	1／3	〃	35
14	〃　〃A	〃	〃　〃	(口)24.4	外:　〃 内:ナデ、オサエのちヨコナデ	密 0.5～1.0mm	〃	淡褐色 外一部暗褐色	口縁 1／4	〃	48
15	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)23.4	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ナデのちヨコナデ	密	〃	(内)淡褐色 (外)暗褐色	1／4	〃	56
16	〃　〃B_1	〃	〃　〃	(口)29.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:　〃	密 0.5～6.0mmの小石	〃	(内)淡褐色 (外)暗褐色	1／4	〃	53
17	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)30.2	外:　〃 内:　〃	密	〃	淡褐色	1／8	〃	55
18	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)32.9	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	密 0.5～2.0mmの小石	〃	〃 外面スス部分黒色	口縁 2／5	〃	49
19	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)34.0	外:　〃 内:板ナデのちヨコナデ・ケズリ	密 0.5～2.0mmの小石 赤色小粒	〃	淡黄褐色	口縁 1／3		65
20	〃　皿A	〃	c 8 土坑SK24	(口)6.8 (高)1.5	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	密 0.5mm前後の小石	〃	淡茶色	9／10		4
21	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)7.1 (高)1.3	外: 〃　〃 内: 〃	密 0.5～1.0mmの小石	〃	白茶色	口縁 3／5		7
22	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)6.6 (高)1.3	外: 〃　〃 内: 〃	密 0.5～1.0mmの小石	〃	淡黄褐色	ほぼ 完形		1
23	〃　〃〃	〃	〃　〃	(口)7.3 (高)1.5	外: 〃　〃 内:ナデ・オサエ	密 0.5～1.0mmの小石	〃	淡茶色	口縁 4／5		8
24	〃　〃B	〃	〃　〃	(口)9.3 (高)1.3	外: 〃　〃 内:ナデ	密 0.5～1.0mmの小石	〃	淡茶色	口縁 1／4		9
25	陶器　椀	〃	〃　〃	(高台) 5.4	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密 0.5～2.0mmの小石	堅緻	白灰色 (釉)白～淡緑色	底 3／5	灰色の釉かかる	10
26	土師器蓋A	〃	〃 〃 焼土内p6	(口)25.5	外:ナデ・オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐～暗褐色	4／5	内面にスス	13
27	〃　鍋B_3	〃	〃　〃	(口)25.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:　〃	密 0.5～1.0mmの小石、石英、長石、雲母	〃	淡褐色 (外)黒色(スス)	口縁 1／5	外面にスス	5
28	〃　A	A	〃　〃	(口)25.3	外:　〃 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石、石英、長石	良好	(内)淡褐色 (外)黒(スス)	口縁 1／8	〃	2
29	〃　〃B_2	〃	〃　〃 p3	(口)33.0	外:ナデ、ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:ナデのちヨコナデ、ケズリ	密 0.5mm～1.0mmの小石、石英、長石、雲母	〃	淡褐色	4／5		3

第8表　出土土器類観察表 (1)

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	実測No.
30	土師器甕A	〃	c 8 土坑SK24 p7	(口)33.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～2.0mmの小石、石英、長石、雲母	良好	(内)淡黄褐色 (外)淡褐色	口縁 1／8		6
31	〃　茶釜A	〃	〃 〃　p4	(口)14.3	外:ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:ナデ、板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石、石英、長石	〃	淡褐色	口縁～胴体部上半3/5		11
32	〃　〃　〃	〃	〃 〃　p1	(口)13.4	外:ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:ナデ、ハケメのちヨコナデ、ケズリ	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡茶灰色 ス部分暗茶～黒色	上半部 4／5	外面にス	12
33	〃　Ⅲ A	〃	b 8 土坑SD3	(口) 7.0 (高) 1.8	外:ナデ・オサエ 内:ナデ、板ナデ	密 0.5mm前後の小石	〃	淡褐色	口縁 1／2		33
34	〃　〃〃	〃	〃 〃(北)	(口) 7.3 (高) 1.6	外: 〃　　〃 内:ナデ	〃 〃	〃	褐色	完形		15
35	〃　〃B	〃	〃 〃(南)	(口) 8.8 (高) 1.2	外: 〃　　〃 内: 〃	〃 〃	〃	淡褐色	口縁 2／5		34
36	〃　〃〃	〃	〃 〃(北)p1	(口) 9.6 (高) 1.6	外: 〃　　〃 内: 〃	おおむね密 1.0mm程の小石を含む	〃	褐色	完形		14
37	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)11.2 (高) 1.7	外: 〃　　〃 内: 〃	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡褐色	口縁 1／3		32
38	〃　鍋B_1	〃	〃 〃(北)	(口)31.5	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～2.0mmの小石	〃	(内)淡茶灰色 (外)暗褐色	口縁 1／4	外面にス	44
39	〃　〃〃	〃	〃 〃(北)	(口)33.8	外:　　〃 内:　　〃	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡褐色	口縁 1／4		37
40	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)28.2	外:　　〃 内:オサエ、板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石、石英、長石	〃	淡褐～赤褐色	口縁 1／4	外面にス	26
41	〃　〃〃	〃	〃 〃(北)	(口)27.9	外:　　〃 内:板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡茶灰色	口縁 1／4		18
42	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)28.7	外:ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ、ケズリ	密 0.5mm～1.0mmの小石、石英、長石	〃	淡褐色	口縁 1／5	外面にス	29
43	〃　〃〃	〃	〃 〃(南)	(口)26.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	〃 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡褐色 (外)一部暗褐色	口縁 1／3	〃	45
44	〃　〃〃	〃	〃 〃(〃)	(口)25.9	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ、ケズリ	〃 〃	〃	(内)淡褐色 (外)暗褐～淡褐色	口縁 1／5	〃	43
45	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)27.1	外:　　〃 内:板ナデのちヨコナデ	〃 0.5mm～2.0mmの小石	〃	淡褐色	口縁 1／4	〃	28
46	〃　〃〃	〃	〃 〃(北)	(口)22.7	外:　　〃 内:板ナデのちヨコナデ、ケズリ	〃 0.5mm～1.0mmの小石	〃	〃	口縁 1／3	〃	17
47	〃　〃〃	〃	〃 〃(〃)p5	(口)24.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:　　〃	密	〃	暗褐色	口縁 1／4	〃	16
48	〃　〃A	〃	〃 〃(南)	(口)20.7	外:ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:　　〃	粗 0.5mm～2.0mmの小石	〃	(内)淡褐色 (外)黒～淡褐色	口縁 1／3	〃	42
49	〃　〃B_3	〃	〃 暗褐色粘質土	(口)23.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	(内)明褐色 (外)淡暗褐色	口縁 1／8	〃	21
50	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)27.0	外:ハケメのちナデ・ヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密	〃	(内)明褐色 (外)淡暗褐色	1／5	〃	20
51	〃　〃〃	〃	〃 〃(南)	(口)27.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡褐色 (内)明褐色	口縁 1／5	〃	31
52	〃　甕A	〃	〃 〃(北)p5	(口)29.1	外:　　〃 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～3.0mmの小石	〃	(内)赤褐色 (外)淡褐色	口縁 1／4		47
53	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)29.6	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	〃 〃	〃	淡褐色 一部黒褐色	口縁 1／5		46
54	〃　〃〃	〃	〃 〃(南)p10	(口)31.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・板ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～4.0mmの小石	〃	淡褐色	口縁 2／5		41
55	〃　〃〃	A	〃 〃(南)p10	(口)33.4	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～3.0mmの小石	〃	淡褐～暗褐色	口縁 体部1／5		22
56	〃「十能」	〃	〃 〃(北)		外:ナデ・ハケメ・オサエのちヨコナデ・ケズリ 内:ナデ・板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～2.0mmの小石	〃	淡褐色 赤褐色黒色(ス)	1／2	外面にス	38
57	〃　焙烙A	〃	〃 〃(〃)	(口)40.3	外:ナデハケメのちヨコナデ、ケズリ 内:　　〃	粗 0.5mm～3.0mmの小石	〃	淡褐～暗褐色	口縁 3／4		40
58	陶器　擂鉢	〃	〃 〃(南)p7	(口)30.1	外:回転ナデ 内:回転ナデのちハケメ	密 0.5mm～3.0mmの小石	〃	(内)黒褐色 (外)暗黒褐色	1／3	美濃瀬戸(大窯Ⅰ期)	19

第9表　出土土器類観察表 (2)

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	実測No.
59	陶器　擂鉢	A	b 8 土坑ＳＤ３	(底)9.5	外:回転ナデ 内:回転ナデのちハケメ	密 0.5mm～3.0mmの 小石	良好	(内)暗黒色 (外)暗褐色	1／4	美濃瀬戸(大窯Ⅰ期)	27
60	〃　〃	〃	〃 〃	(口)32.9	回転ナデ、ナデ 内:　〃	密 0.5mm～3.0mmの 小石	〃	暗黒褐色	1／3	美濃瀬戸(大窯Ⅰ期)	25
61	〃　壷	〃	〃 〃　(北)p6	(口)20.2	外:ハケメのちナデ・ヨコナデ 内:ナデ・オサエのちヨコナデ	密 0.5mm～4.0mmの 小石	堅緻	(内)暗褐色 (外)茶灰色	〃 2／5	常滑	39
62	土師器鍋Ｂ₂	〃	〃 〃　(南)p9	(口)34.2	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～5.0mmの 小石	良好	淡褐色	〃 3／10		36
63	〃　〃〃	〃	〃 〃　(北)	(口)30.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～2.0mmの 小石、赤色小粒	〃	(内)黒褐色 (外)淡褐色	〃 1／5	外面にスス	30
64	〃　羽釜Ａ	〃	〃 〃	(口)26.2	外:ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密 1.0mm～1.0mmの 小石	〃	(内)暗褐色 (外)明褐色	〃 1／4		23
65	〃　〃	〃	〃 〃　(北)	(口)31.2	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:板ナデ、ナデのちヨコナデ	密	〃	淡褐色	〃 1／8		24
66	〃　鍋Ａ	〃	b 9 溝SD4最下層	(口)20.0	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ハケメのちヨコナデ・ケズリ	粗 0.5mm～2.0mmの 小石、赤色小粒	〃	暗褐～淡褐色	〃 2／5		78
67	〃　蓋Ａ	〃	〃 〃	(口)14.6 (高)2.5～1.8	外:ナデ・オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの 小石	〃	淡褐～暗褐色	完形		77
68	陶器　小鉢？	〃	〃 〃最下層	(口)12.0	外:回転ナデのち施釉 内:回転ナデのち施釉	密	堅緻	器表白灰色 (釉)黒～暗褐色	口縁 1／5	鉄釉 美濃瀬戸？	79
69	土師器鍋Ｂ₁	〃	〃 〃	(口)27.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの 小石	良好	淡褐～暗褐色	〃 1／8	外面にスス	81
70	陶器　甕	〃	〃 〃	(口)26.0	外:釉 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの 小石	堅緻	(内)暗茶色 (外)白～淡青色	〃 1／5	常滑	80
71	土師器皿Ｃ	〃	b 4 土坑ＳＫ12	(口)11.1	外:ナデ 内:ナデ	粗 0.5mm～3.0mmの 小石	良好	淡茶灰色	〃 〃		74
72	〃　鍋Ｂ₁	〃	〃 〃　ｐ2	(口)18.5	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの 小石	〃	淡褐色 内面一部暗褐色	〃 1／4		72
73	〃　〃Ａ	〃	〃 〃ｐ3	(口)21.8	外:　〃 内:　〃	〃 〃	〃	淡褐色 外一部黒(スス)	〃 〃	外面にスス	73
74	〃　〃Ｂ₁	〃	〃 〃Ｐ6	(口)25.2	外:　〃 内:　〃	〃 〃	〃	淡褐色	〃 〃		71
75	〃　〃〃	〃	〃 〃ｐ1	(口)33.4	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ナデ・板ナデのちヨコナデ	〃 〃	〃	淡黄褐色	〃 1／3		70
76	〃　皿Ｂ	〃	c 9 土坑ＳＫ36	(口)9.6 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	〃	明乳赤褐色	3／5		83
77	〃　〃Ｃ	〃	〃 〃	(口)11.0 (高)2.0	外:　〃　　〃 内:　〃	〃	〃	赤褐色	1／8		84
78	陶器　水注	〃	〃 〃	(口)10.6 (高)6.8(底)4.7	外:回転ナデのち糸切り施釉 内:回転ナデ	〃	〃	濃紺～黒褐色 明青灰褐色(胎土)	3／4		82
79	土師器甕Ａ	〃	〃 〃	(口)32.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	〃	〃	明乳赤褐	1／8		85
80	〃　皿Ｂ	〃	b 7 土坑ＳＫ５	(口)8.6 (高)1.5	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	粗 1.0mm前後の 小石を含む	〃	淡褐色	1／3		98
81	〃　〃	〃	〃 〃	(口)8.4 (高)1.3	外:　〃　　〃 内:　〃	密	〃	明乳褐色	1／2		97
82	陶器　小皿	〃	c 5 上げ土	(口)8.4 (高)2.4(底)4.2	外:回転ナデのち糸切り 内:回転ナデ	〃	堅緻	灰白色 (釉)暗黒色	2／3	俗称山皿	95
83	〃　〃	〃	b 5 土坑ＳＫ３	(口)8.2 (高)1.5～1.9(底)4.7	外:　〃 内:　〃	密 1.0mm前後の 小石を含む	〃	灰白色	完形	〃	122
84	青磁　碗	〃	c 3 土坑ＳＫ14		外:陰刻のち施釉 内:ロクロナデのち施釉		〃	淡灰色 (釉)淡緑色	口縁 1/10未満	龍泉窯系	111
85	土師器皿Ｃ	〃	〃 〃	(口)12.9 (高)2.0	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	密 0.5mm前後の 小石	良好	淡褐色	〃 1／6		110
86	〃　〃〃	〃	b 5 土坑ＳＫ34	(口)12.8 (高)2.4～3.0	外:　〃　　〃 内:　〃	密	〃	乳明褐色	3／5		68
87	〃　〃Ａ	〃	c 6 土坑ＳＫ17	(口)7.2 (高)1.4	外:　〃　　〃 内:　〃	〃	〃	淡褐色	口縁 1／4		107

第10表　出土土器類観察表 (3)

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	実測No.
88	土師器小皿	A	b 7 pit 2	(底)4.8	外:ナデのち糸切り 内:ナデ	密	良好	淡黄赤褐色	底部 完形	ロクロ成形	96
89	〃　鍋B1	〃	d 2 土坑SK33		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 1cmの小石含む	〃	暗黄褐色	1/10未満		88
90	青磁　碗	〃	〃 〃	(口)14.2 (高)7.2(高台)5.7	外:ロクロナデ、のち陰刻、施釉 内:陰刻スタンプ文のち施釉	密 0.5mm～1.0mmの 小石	〃	淡灰色 (釉)灰緑色	口縁1/8 高台完形	龍泉窯系	86
91	土製　円盤	〃	〃	(径)4.1	周囲は粗いケズリ	密	〃	赤褐色	完形	陶器片転用	87
92	陶器　ねり鉢	〃	〃 〃	(口)26.3	外:ナデのちヨコナデ 内:ヨコナデ、磨耗	良好 0.5mm～2.0mmの 小石若干含む	〃	明～暗赤褐色	口縁 1／5	常滑	127
93	土製円盤	〃	d 1 土坑SK32	(径)4.2	周囲は粗いケズリ	粗 0.5mm～2.0mmの 小石	〃	暗褐色 (釉)赤褐色	完形	陶器片転用	89
94	〃	〃	上げ土	(径)5.3	〃	良好 0.5mm～1.0mmの 小石若干含む	〃	(内)暗赤褐色 (外)暗灰褐色	〃	〃	126
95	土師器鍋B1	〃	d 4 遺構面上	(口)29.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	〃	淡黄褐色	口縁 1／5	外面にススス	90
96	〃　〃〃	〃	b 5 pit 1	(口)32.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	〃	〃	(内)明灰褐色 (内口縁)明乳褐色 (外)明灰乳褐色	1／9		123
97	〃　〃B2	〃	c 3 土坑SK14	(口)32.5	外:　〃 内:ヨコナデ	〃	〃	(内)暗茶褐色 (外)淡褐色	口縁 1／5		108
98	〃　〃〃	〃	〃 〃	(口)33.3	外:　〃 内:板ナデのちヨコナデ	〃	〃	(内)淡灰褐色 (外)淡褐色	〃 1／7		109
99	〃　〃〃	〃	b 7 土坑SK2礫群	(口)35.4	外:　〃 内:板ナデのちヨコナデ	〃	〃	淡褐～淡灰褐 外面一部ススで黒色	〃 1／5	外面にススス	99
100	陶器　ねり鉢	〃	b 2付近 上げ土	(口)31.8	外:オサエ、ナデのちヨコナデ 内:ヨコナデ、摩耗	〃 0.5mm～2.0mmの 小石	〃	(内)暗褐色 (外)淡橙褐色	〃 〃	常滑	106
101	火舎？	?	不明	(口)23.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	〃 2.0mm程の 砂粒若干含む	〃	(外)黒色(イブシ?) (断)濃褐色	〃 〃	瓦質	125
102	土師器鍋B3	A	c 4 土坑SK28	(口)26.2	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5mm～3.0mmの 小石	〃	(内)灰褐色 (外)淡褐色	1／8	外面にススス	66
103	〃　甕A	〃	b 3 土坑SK11p1	(口)30.9	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデ・板ナデのちヨコナデ	密	〃	淡茶色	3／5	体部内面中央下に 横線(墨書?)あり	59
104	〃　〃〃	〃	〃 〃　p2～p4		外:ナデ・ハケメのちケズリ 内:ナデ	粗 0.5mm～3.0mmの 小石	〃	赤褐～淡褐色	底 9／10	赤土(?)が塗ってある	128
105	〃　鍋B1	〃	c 9 土坑SK31	(口)25.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ヨコナデ	〃 0.5mm～4.0mmの 小石	〃	(内)淡褐色 (外)淡褐色～暗褐	1／8	外面にススス	69
106	〃　茶釜A	〃	〃 〃	(口)13.0	外:　〃 内:ナデのちヨコナデ	密	〃	(内)暗褐色 (外)淡褐色	〃	〃	76
107	〃　鍋A	〃	b 3 土坑SK15	(口)22.7	外:　〃 内:　〃	〃	〃	暗赤褐色	口縁 完形		75
108	〃　〃〃	〃	b 7 土坑SK22p1	(口)22.7	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ナデのちヨコナデ・ケズリ	密 0.5mm～1.0mm 小石	〃	淡褐色 外面下半黒色(ススス)	〃 9／10	外面にススス	124
109	土師器羽釜A	C	溝SD1	(口)19.2	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～2.0mmの 小石	〃	淡褐色 外面一部黒色(ススス)	口縁鍔 1／5		115
110	〃　鍋B4	〃	〃	(口)18.3	外:ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの 小石	やや軟	淡黄褐色	〃 2／5	片口、把手付	116
111	〃　〃A	〃	〃	(口)24.7	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:　〃	〃 0.5mm～2.0mmの 小石	良好	淡褐色	〃 1／4		118
112	〃　〃B3	〃	〃	(口)21.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:　〃	〃 0.5mm～1.0mmの 小石、赤色小粒	〃	淡褐色 外面一部黒色(ススス)	1／5	外面にススス	113
113	〃　〃〃	〃	〃	(口)23.7	外:　〃 内:板ナデのちヨコナデ・ケズリ	〃 0.5mm～3.0mmの 小石	〃	(内)淡褐色 (外)黒色(ススス)	1／4	〃　(厚)	114
114	〃　〃〃	〃	〃	(口)25.0	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ハケメナデのちヨコナデ	〃 0.5mm～1.0mmの 小石	〃	淡褐色	口縁1/4 体部1/3	〃	112
115	〃　鍋B1	〃	〃	(口)26.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	〃 〃	〃	〃	口縁 1／5	〃	105
116	〃　〃〃	〃	〃	(口)25.2	外:　〃 内:　〃	〃 〃	〃	淡褐色 外面大部分黒色(ススス)	〃 1／4	〃	120

第11表　出土土器類観察表 (4)

No.	器　種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	実測No.
117	土師器鍋B1	C	溝SD1	(口)27.7	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～2.0mmの小石	良好	淡褐色～明褐色	口縁 1／4	外面にスス	104
118	〃　〃〃	〃	〃	(口)26.9	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ・ケズリ	〃 0.5mm～2.0mmの小石	〃	明褐色 スス部分黒色	〃 1／3	〃	94
119	〃　〃〃	〃	〃	(口)27.7	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ,板ナデのちヨコナデ	〃 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡褐～淡灰褐色	〃 1／4	〃	100
120	〃　〃〃	〃	〃	(口)31.3	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ・ケズリ	〃 0.5mm～2.0mmの小石	〃	淡褐色 外一部黒色(スス)	〃 2／5	〃	93
121	〃　〃〃	〃	〃	(口)29.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密	〃	暗黄褐色	〃 1／4	〃	92
122	〃　〃〃	〃	〃	(口)30.9	外:ハケメのちヨコナデ%ケズリ 内:　〃	〃 0.5mm～2.0mmの小石	〃	淡褐色 外一部黒色(スス)	〃 1／3	〃	121
123	〃　〃〃	〃	〃	(口)29.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:　〃	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	明褐色 外一部スス(黒色)	〃 1／5	〃	102
124	〃　〃〃	〃	〃	(口)33.8	外:ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内:板ナデのちヨコナデ・ケズリ	密 0.5mm～2.0mmの小石	〃	明褐色	〃 2／5		101
125	〃　〃〃	〃	〃	(口)30.5	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:　〃	密	〃	暗黄褐色	〃 3／4	外面にスス	91
126	〃　〃〃	〃	〃	(口)35.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密 0.5mm～1.0mmの小石	〃	淡灰褐～明褐色	〃 1／3	〃	103
127	〃　〃〃	〃	〃	(口)36.0	外:　〃 内:　〃	密 0.5mm～2.0mmの小石	〃	淡褐色 外面一部黒色(スス)	〃 4／5	〃	117
128	〃　皿C	〃	〃	(口)－ (高)2.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密 0.5mm前後の小石	〃	淡褐色	〃 1／8		129
129	〃　〃〃	〃	〃	(口)－ (高)2.0	外:　〃 内:〃	密 0.5mm前後の小石	〃	〃	〃 1／10		130
130	〃　〃B	〃	〃	(口)－ (高)1.2	外:オサエ・ナデ 内:〃	密 0.5mm前後の小石	〃	淡茶灰色	〃 〃		131

第12表　出土土器類観察表 (5)

接合資材はない。

擦痕のある石はA区から3点出土している。土坑SK16から2点、SK22から1点である。これらは砂岩質の偏平な石である。第51図6は両面に平らな、同7は片面に弧状の、それぞれ擦痕がある。原材石は赤色系の色素が認められた。

C　貨幣

貨幣は土坑SK12（1）と土坑SD3（北）（2）から出土している。1は皇宋通寶（北宋、1039年）、2は永楽通寶（明、1408年）である。

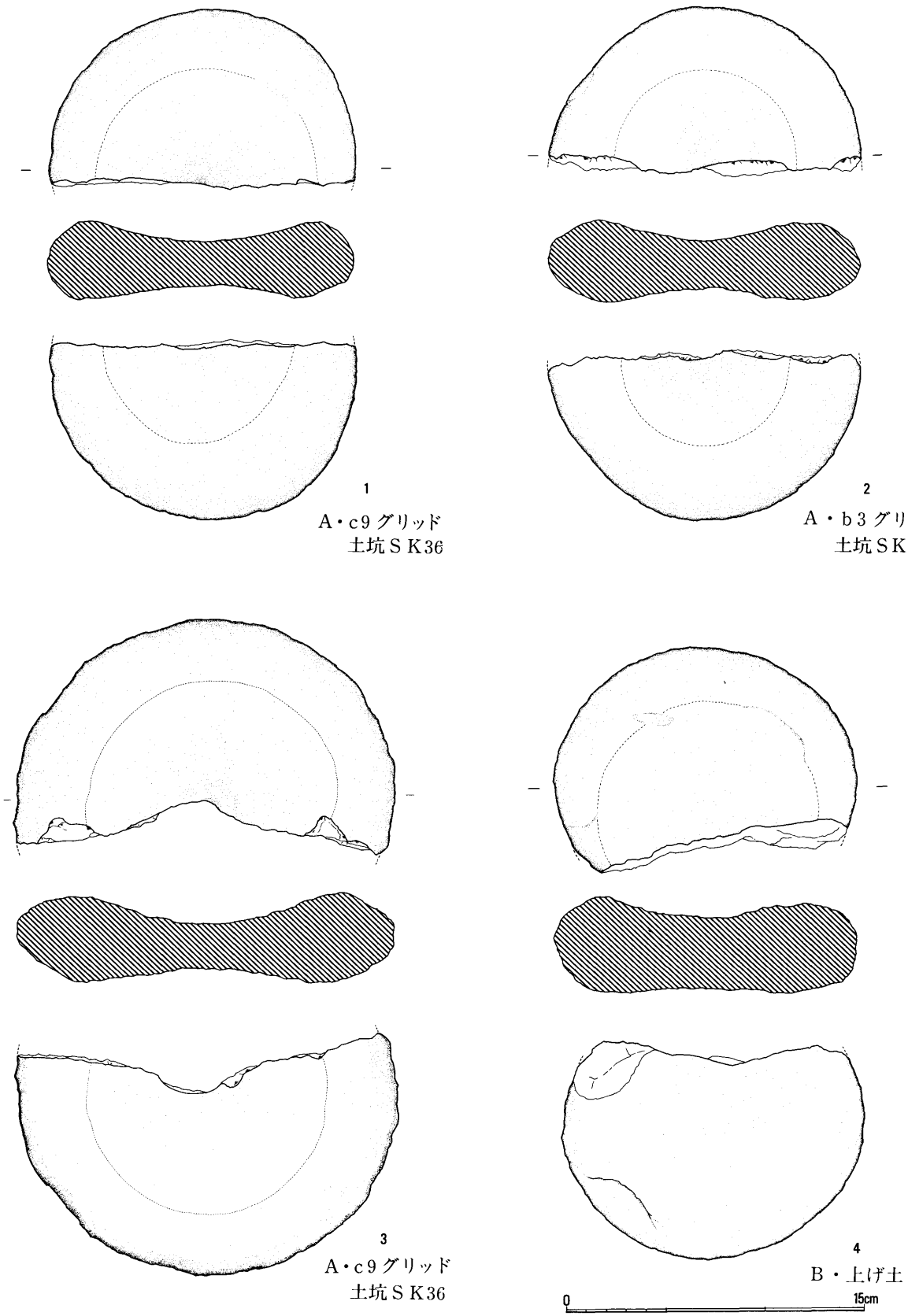
（4）小結－若宮遺跡の性格－

今回の調査は線的な発掘であったものの、遺構・遺物ともに若宮遺跡の性格を考える上で貴重な資料を得ることができた。遺跡の空間的把握は今後の調査を待つほかはないが、今回得られた調査結果をもとに、遺跡の性格について考えてみたい。

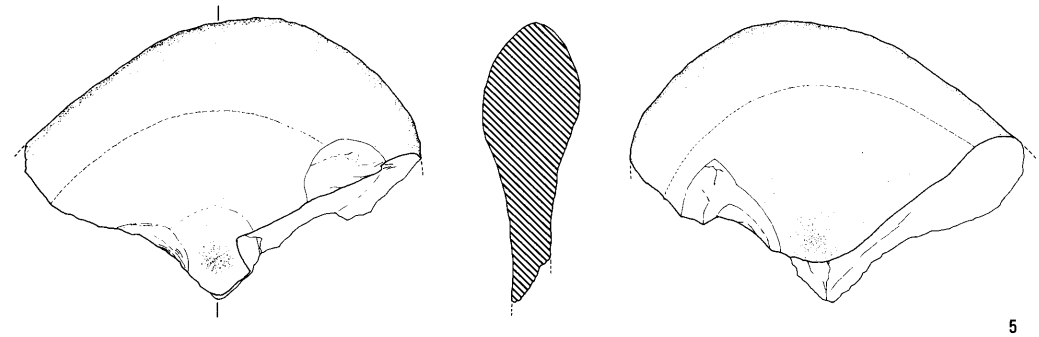
今回の調査によって確認された遺構では、土坑の数と埋土の状況が特筆されよう。土坑の形態や埋土の状況については前述の通りであるが、その中でも規則性を持たない礫群を伴った土坑と、砂礫を伴った土坑は注意すべきものと思われる。礫群は一般に認められる川原石と同様なものである。これらの礫は現在の地表面にはあまり認められないものであるが、段丘礫層内に認められるものと同様のものであり、そこからの採集物とも考えられる。また、土坑内の砂礫層は、近隣からそういった土砂の入り込む環境にないことや焼土や木炭を含んでいる場合があること、また砂礫は川原砂ではなく、角ばったものであることなどから、人為的に粉砕されたものが投棄されたものと考えられる。

次に、出土遺物に見られる若宮遺跡の特性を抽出していきたい。

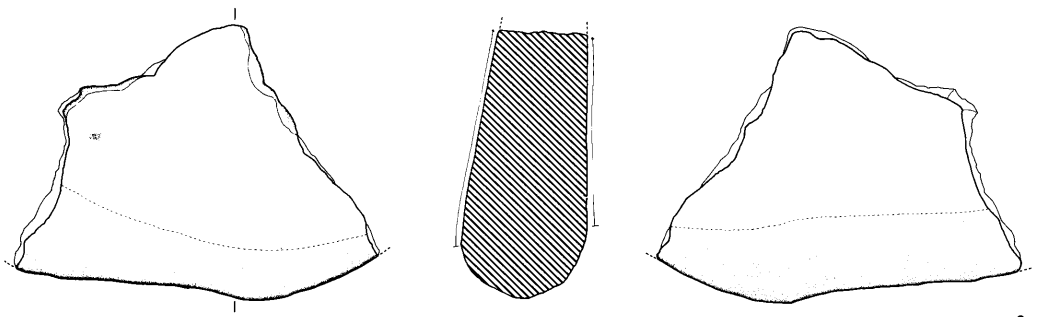
土師器は、前述の分類案をもとに見てゆくと、土師器のみで供膳形態（皿類）・煮沸形態（茶釜・羽釜・鍋の類）・貯蔵形態（甕類）が揃っていることが判明する。その中でも煮沸形態が土師器全体の約68%を占めており、煮沸による破損度の高いことを考えてもかなりの量であることが指摘できる。



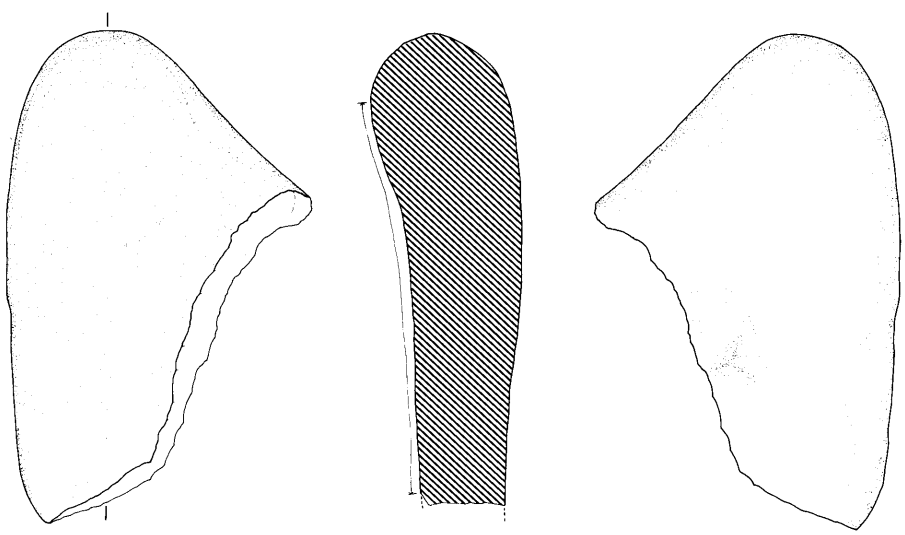
第50図　出土石製品実測図(1)（1：3）



5
C８グリッド
土坑ＳＫ24ｓ1



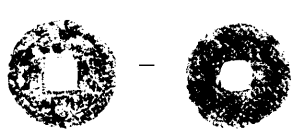
6
ｂ7グリッド
土坑ＳＫ22ｓ2



7
ｃ6グリッド
土坑ＳＫ16

0　15cm

第51図　出土石製品実測図(2)（1：3）



1

2

0　5cm

第52図　出土貨幣拓影（2：3）

羽釜を除いた煮沸形態と供膳形態の土師器は、観察表に示すように胎土中に粗い小石粒を含まない、かなり似通った土で作られている。同様な傾向は甕Aと焙烙Aとの関係にも見出せる。羽釜を除いた煮沸形態には、全体的に調整手法上の類似性が認められる。甕Aと焙烙Aとの関係も同様である。

これらのことから、若宮遺跡の土師器には皿・蓋・茶釜・鍋の一群、甕・焙烙の一群、羽釜の一群、という3つの製作技法的な系統が存在するといえる。ただし、外面調整・口縁部形態などの点では、それぞれの一群を越えた共通性を持つ。このことは個々の一群が全く異なった製作技法によって作られたものではなく、相互に関係のあるものといえよう。

さて、このような性格を持つ土師器類は、陶器・磁器類と比べて出土数が圧倒的に多いことも特筆される。このことを、時期的に近接していると考えられる他の遺跡と比較してみよう。

員弁郡大安町丹生川上城跡[5]ではⅦ郭に良好な資料が認められる。土師器に対して陶器の割合が高く、中でも皿・椀などの供膳形態が多くを占める。土師器も同様で、煮沸形態は少ないようである。

松阪市嵜谷遺跡[6]では当遺跡と同様、土師器の割合が高い。その中でも、皿類のような供膳形態が多い傾向のようである。

松阪市山添遺跡[7]では、比較的土師器の割合が高いが、陶器類もまとまっており、天目茶椀も目立っている。煮沸形態も鍋を中心に多いが、供膳形態も皿類を中心に多く認められる。陶器と土師器を合わせれば、供膳形態が前2者と同様、かなりの比重を占めるようである。

ここに挙げた遺跡は、丹生川上城跡が城館ないしは寺院関係遺跡、嵜谷遺跡が寺院跡、山添遺跡が居館かそれに類したもの、という性格を各々報文において推定されている。このような各遺跡の性格上の相違はあるものの、陶器もそこそこ認められ、居住地の性格として供膳形態の割合が高い、という傾向は共通するようである。城館・居館・寺院などは、土器の構成上、天目茶椀や青磁などの数量には一般集落との違いが認められるとしても、供膳形態の割合が高い点では、大差ないものと考えられる。その点からも、若宮遺跡の土器の構成は極めて異質と言えるであろう。そしてそれは鍋類と甕Aの存在に代表される。

鍋類はその量と、一括投棄に近い出土状況から、1時期にかなりの量が消費されたものと考えられる。甕Aは広瀬氏の分析によれば、ヒ素の量があまりにも多く、外面に塗料として塗っていたか、内側から浸み出したものかの判断はしにくいものの、特殊な状況である。甕Aの存在は現在までのところ当遺跡で確認されているに留まる点も示唆的である。

これらのことを簡単にまとめてみると、1．人為的に破壊された砂礫があり、2．土器の構成で煮沸形態のものが圧倒的に多く、3．当遺跡に特徴的な土器があり、4．他の遺跡にはあまりない粗製の石臼があり、5．成分中にヒ素が多く含まれる物質の付いた土器がある。また土器の型式から見ると、時期的には16世紀前半代頃に限定されそうである。

このような特徴から考えると、若宮遺跡は居住空間とは考え難く、何らかの生産が行われた場所と考えるのがより妥当ではないだろうか。ここで考えなくてはならないのは、当丹生地区が古来から水銀の産地として存在していることである。今回広瀬氏にお願いした分析の結果からは水銀に直接結びつけられるような結果は得られなかった。しかし、大量にヒ素を含んだ物質の存在は水銀生産の解明について、ひとつの鍵を提供したと考えられる。ヒ素は丹生鉱山中の鶏冠石の中によく入り込んでいる[8]ということなので、これが付着する甕Aは水銀生産にあたって何らかの容器に用いられた可能性がある。

以上、若宮遺跡の調査によって得た資料から、当遺跡は水銀生産と関わっていた可能性が推定されるに到った。中世の水銀生産についてはまだまだ未解決の点が多いが、若宮遺跡の資料はそれに一石を投じるものといえよう

（伊藤裕偉）

註

（1）協議・調査時には「垂清水（たるしみず）遺跡」と呼称していた。土器の注記も同様のため、注意されたい。

（2）図示したもののうち土製円盤と火舎を省いたものについての数字である。そのため、正確には皿・鍋類のパーセントが若干増えるが大勢に影響はない。

（3）新田洋「平安時代〜中世における煮炊用具－〔伊勢型〕鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1　1985）

（4）注（3）の文献および藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」

（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986）
（5）久志本鉄也・杉谷政樹『丹生川上城跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1985）
（6）野田修久・野原宏司「松阪市矢津町嵜谷・榾垣外遺跡」（『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ　三重県教育委員会　1987年）　野田修久「三重県松阪市嵜谷遺跡出土の土師器Ⅲについて」（『マージナル』№9　1988）
（7）新田洋他『山添遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1979）　なお、遺物の詳細については新田氏の御教示を得た。
（8）磯部克「三重の鉱物・辰砂」（『フォトぶらり』第11号　ミユキフォト　1989）

付　若宮遺跡出土土器・岩石の化学分析結果

若宮遺跡より出土した土器及び岩石について化学分析を行い、その成分について検討を加えた。

A（包含層出土甕A体部破片）については分析部位を、（1）容器内側の付着物、（2）容器、（3）容器外側の付着物、の3ケ所に分けた。B・Cは土坑SK16から出土した岩石である（Cは第51図7）。

1　分析方法

A・B・Cそれぞれの試料の一定量を秤量し、強酸分解後原子吸光光度法により定量を行った。

2　分析結果（第11表）

3　結果の概要

Aの分析結果で最も特徴的であることは、分析前に予想された水銀濃度が、一般土壌（0.1～0.5ppm）に比べれば高いが、水銀の鉱石（数千ppm）としては、かなり低い。しかし、ヒ素は鉱石に近いほど高濃度に含有されていた。この結果、試料Aについては当初予測したように、水銀鉱石の精練等に用いられたものかどうかは疑問であるが、容器の原土についてはさらに調査すれば産地の推定も可能であろう。

B・Cについては、化学分析からはほとんど特徴的なものはなく、朱ではないかと思われた赤色の物質も分析結果からは水銀ではないことが判明したのみであった。

（広瀬和久・三重県農業技術センター）

項目 試料	Ca（%） カルシウム	Mg（%） マグネシウム	K（%） カリウム	Na（%） ナトリウム	Cd（ppm） カドミウム	Zn（ppm） アエン
A－内側	0.14	0.66	1.15	0.08	＜0.1	86
〃－容器	0.15	0.41	1.20	0.10	0.66	83
〃－外側	0.07	0.12	3.79	0.14	3.53	653
B	0.34	0.42	0.50	0.07	＜0.1	60
C	0.15	0.55	0.25	0.05	＜0.1	41

項目 試料	Cu（ppm） ドウ	Ni（ppm） ニッケル	Cr（ppm） クロム	Pd（ppm） ナマリ	Fe（ppm） テツ	Mn（ppm） マンガン
A－内側	11.3	15.8	29.8	26.3	29,900	512
〃－容器	13.7	23.2	40.4	21.8	17,800	163
〃－外側	28.2	16.8	24.2	58.0	13,800	75
B	2.2	＜0.4	0.3	5.2	29,400	350
C	8.1	2.1	4.0	11.8	31,000	436

項目 試料	Hg（ppm） スイギン	As（ppm） ヒソ
A－内側	20.9	4,450
〃－容器	4.34	26,300
〃－外側	（1～5）	21,400
B	3.37	47
C	0.97	26

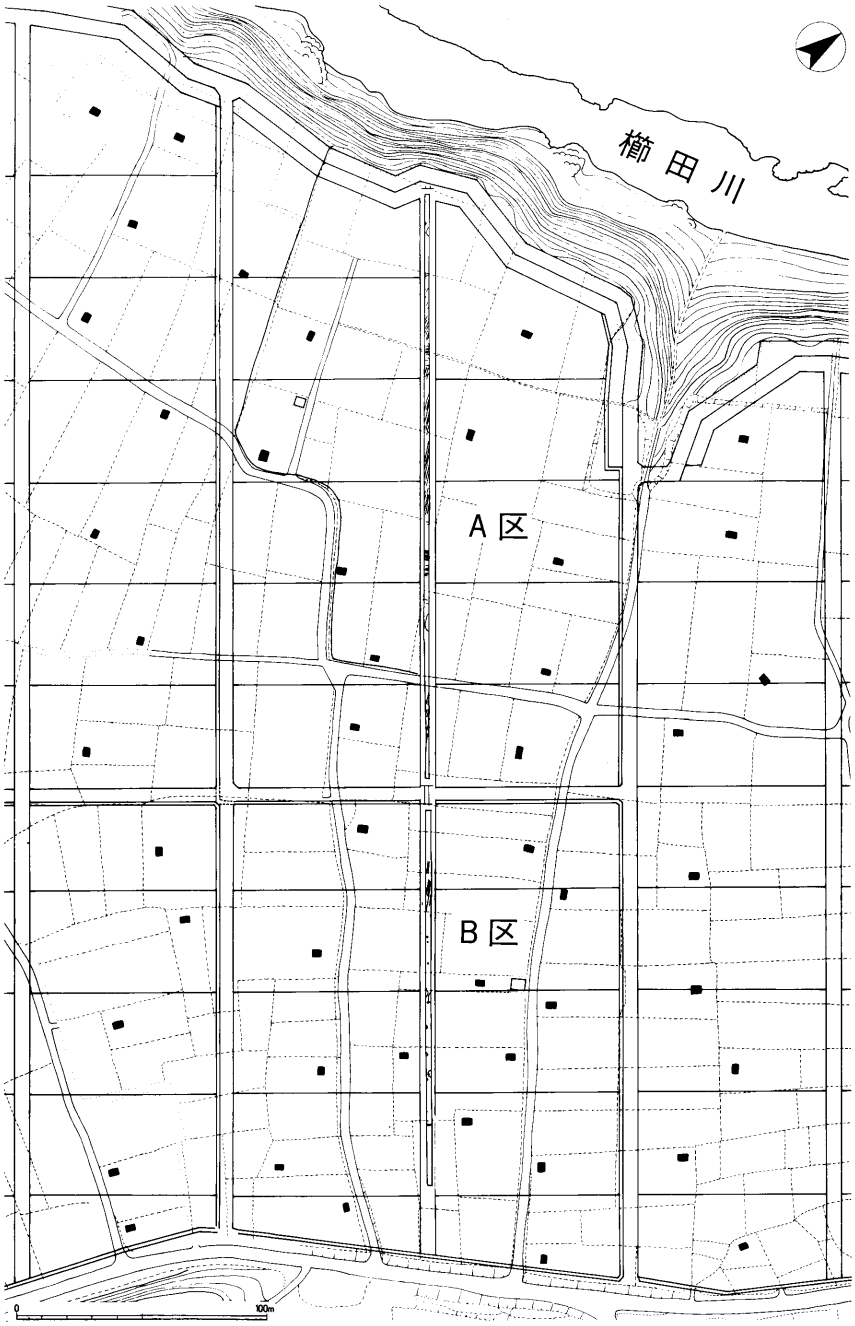
第13表　化学分析結果

2　大河原（おおかわはら）遺跡[1]

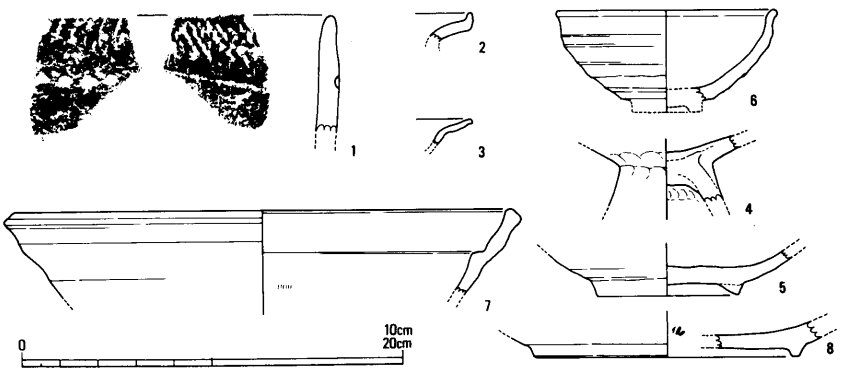
当遺跡は櫛田川が形成する河岸段丘の低位段丘面上、字大川原に所在する。若宮遺跡の西方にあたる。

調査は排水路部分の約680㎡を対象とし、昭和63年12月5日から9日にかけて行った。（第53～54図）

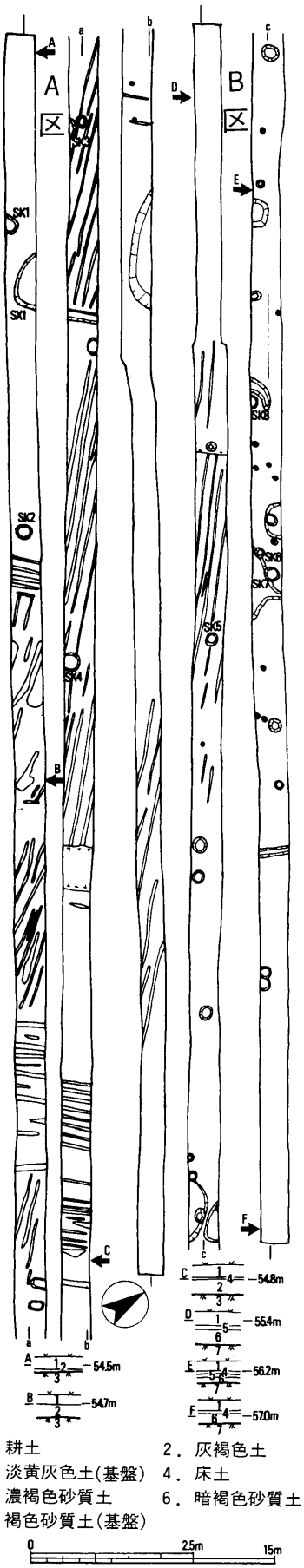
基本層序は耕土・床土・灰褐～暗褐色土・淡黄灰～褐色土（地山）の順で、地山面下20～50cmで拳～人頭大の川原石を多量に含んだいわゆる段丘礫層に達する。灰褐～暗褐色土が遺物包含層に相当するが、遺物の含有は極めて少ないものであった。遺構は小単位で方向や規模のまとまる小溝群の他、円形、方形の土坑、溝などを検出した。小溝群はA、B両区にまたがって存在し、全体で8群認められた。これが耕作に関したものと考えるならば[2]、1単位は耕作地の1単位を表すものと考えられる。1単位毎の重複が極めて少ない点も、それぞれがより独立的な



第53図　調査区位置図（1：3,000）※黒ベタは第一次調査坑



第55図　出土土器実測図（1＝1：2，2～8＝1：4）



第54図　調査区平面（1：200）・土層断面（1：50）図

ものであることを示すものと考えられる。なお、現況の耕作地とは必ずしも一致していない。時期的にはA区の小溝群中出土磁器（第55図８）や、溝群と埋土が近似した土坑ＳＫ３出土擂鉢（同７）から、およそ19世紀前半頃と考えられる[3]。

遺物は他に縄文土器（第55図１）、弥生土器（同２）、土師器高坏（同４）、中世の土師器（同３）、陶器椀（山茶椀、同５）、天目茶椀（同６）がある。全て、耕作土内や遺構埋土内に混入していたものである。１は口縁部内外に縄文を施しており、外面の縄文施文部分の下には列点文が施されている。船元Ｉ式のＡ類に属するものという[4]。

（伊藤裕偉）

注

（１）協議・調査時には「久保垣外遺跡」と仮称した。

（２）八尾博之「中近世素掘り小溝について」『矢部遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所　1988）

（３）藤澤良祐「本業焼の研究（２）－赤津村・上水野村を中心に－」（『瀬戸市歴史民俗飼料館研究紀要』Ⅶ　1988）

（４）奥義次氏（度会町教育委員会）の御教示による。

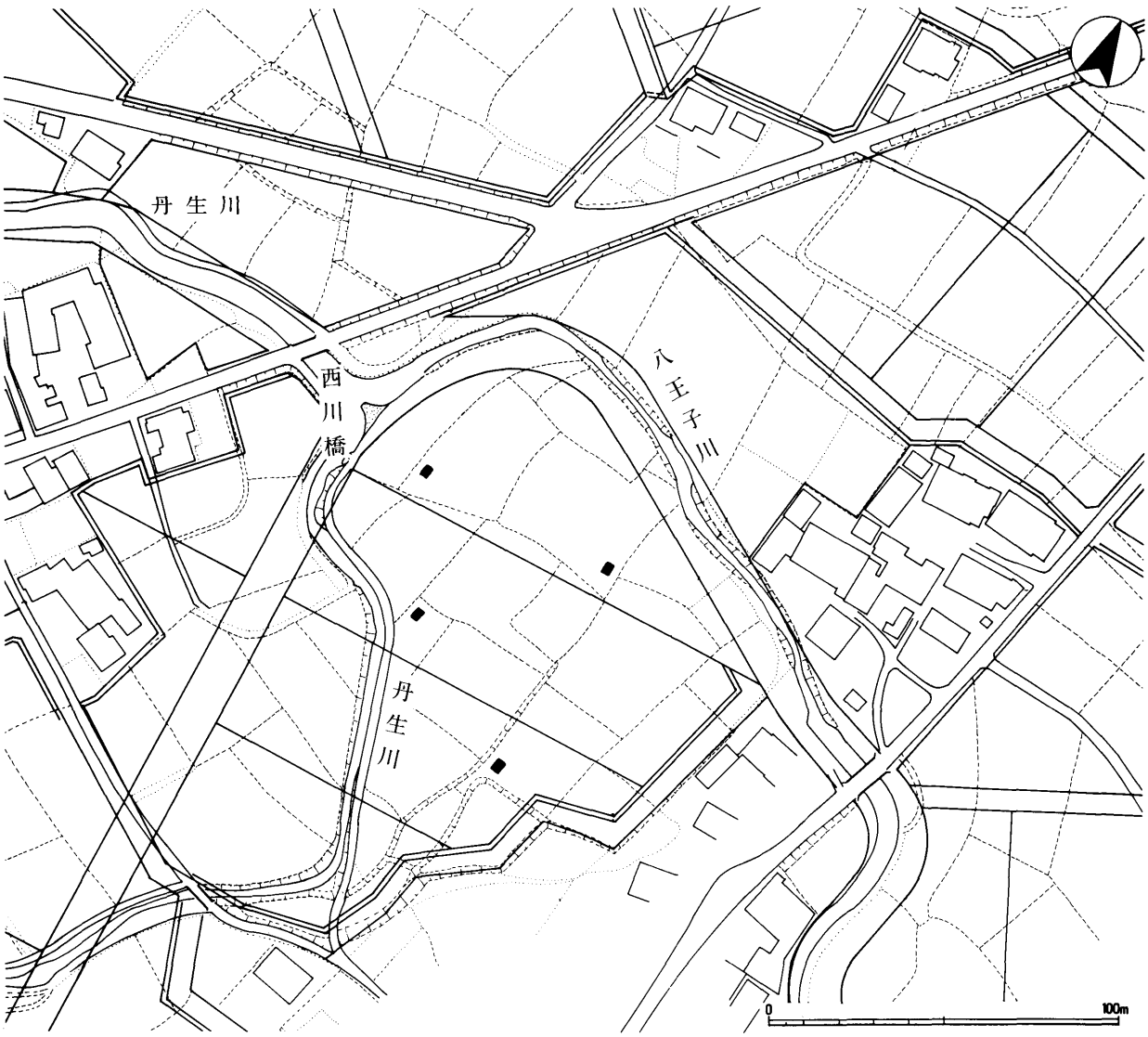
3　柳浦（やなぎうら）遺跡

第１次範囲確認調査を圃場整備の対象部分について行った（第56図）。その結果、耕作土を中心に中世陶器の散布が認められたのみで遺物包含層・遺構とも存在しなかった。このことから当遺跡の中心は南側の現況集落地内に求められよう[1]。

（伊藤裕偉）

注

（１）「字柳浦」で今回若宮遺跡で確認されたものと同様な石臼の出土が鈴木敏雄氏によって報告されている。鈴木敏雄『三重県考古誌考19巻・多気郡丹生村考古誌考』1960



第56図　柳浦遺跡第一次調査坑設定図（１：2,000）

Ⅸ　度会郡大宮町　中里（なかさと）遺跡

当遺跡は度会郡大宮町永会字中里に所在する。現況は水田である。調査期間は昭和63年9月11日・13日、調査面積は150㎡である。

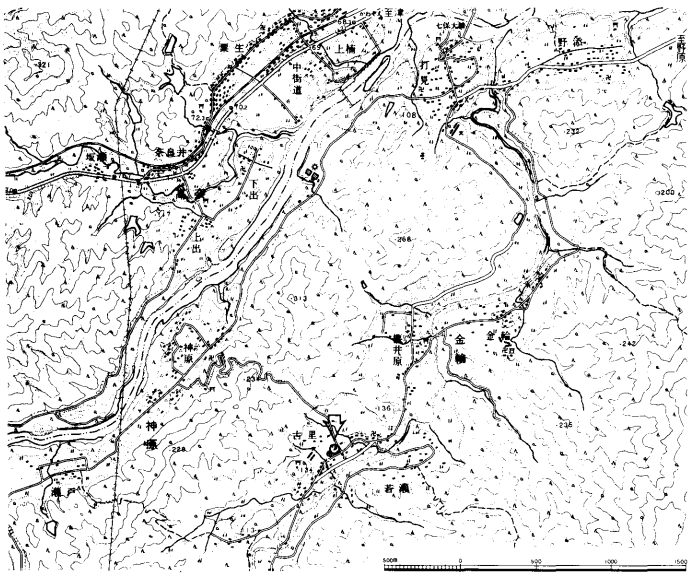
検出した遺構は、ピット30余りである。調査区南端で径80cm・深12cm程のピットが「L」字状に巡る。しかし、埋土の状況から比較的新しいと推定され、このピット群は掘立柱建物とは考えられない。

遺物は包含層がないため、前記のピット中に見られたのみである。すなわち、1～3はピット1から、4～5はピット2から出土した。1は瀬戸大窯Ⅱ期に、5は同Ⅰ期に比定される①。

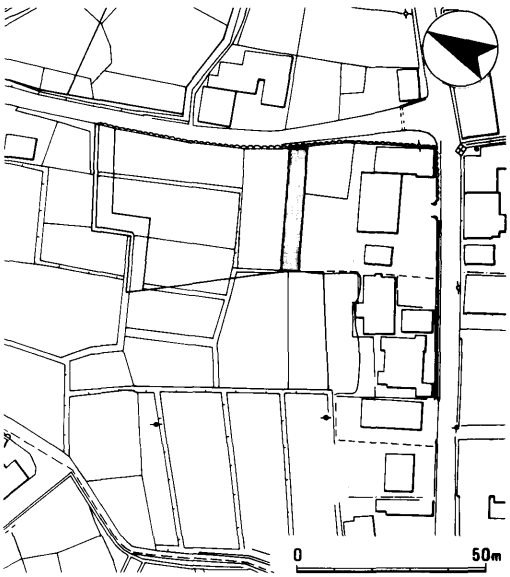
（田中久生）

註

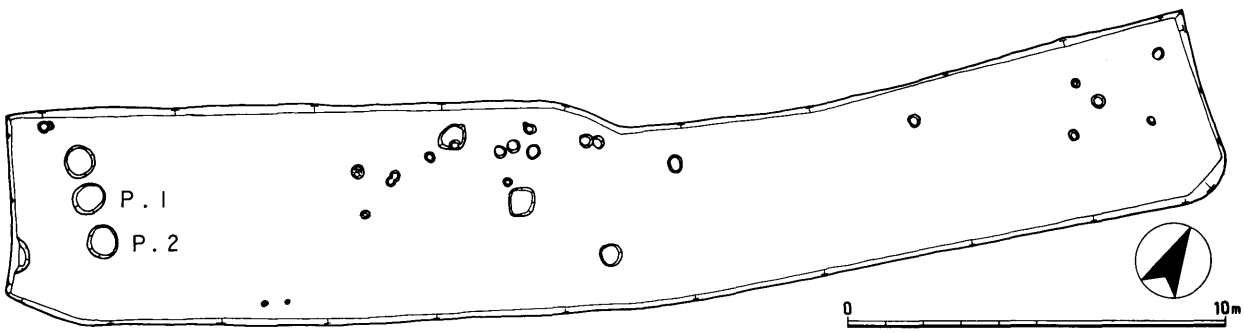
① 井上喜久男氏（愛知県陶磁器資料館学芸員）の御教示を得た。



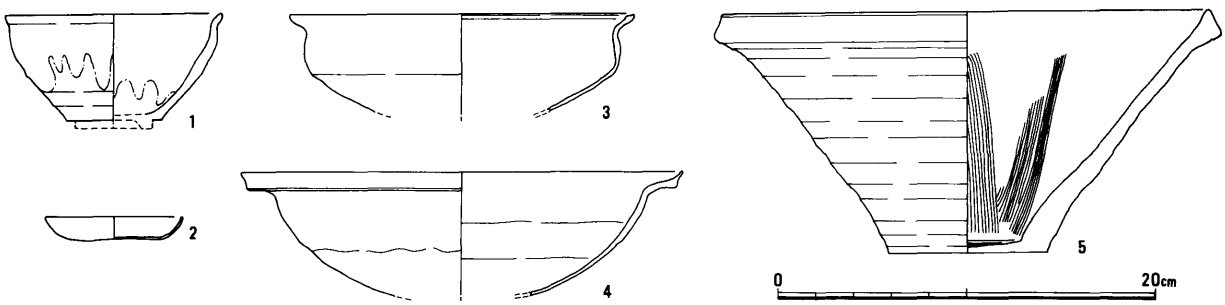
第57図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院地形図1：25,000『伊勢佐原』から）



第58図　調査区位置図（1：2,000）



第59図　調査区平面図（1：200）



第60図　遺物実測図（1：4）

X　阿山郡伊賀町　畔垣内（あぜがいと）遺跡

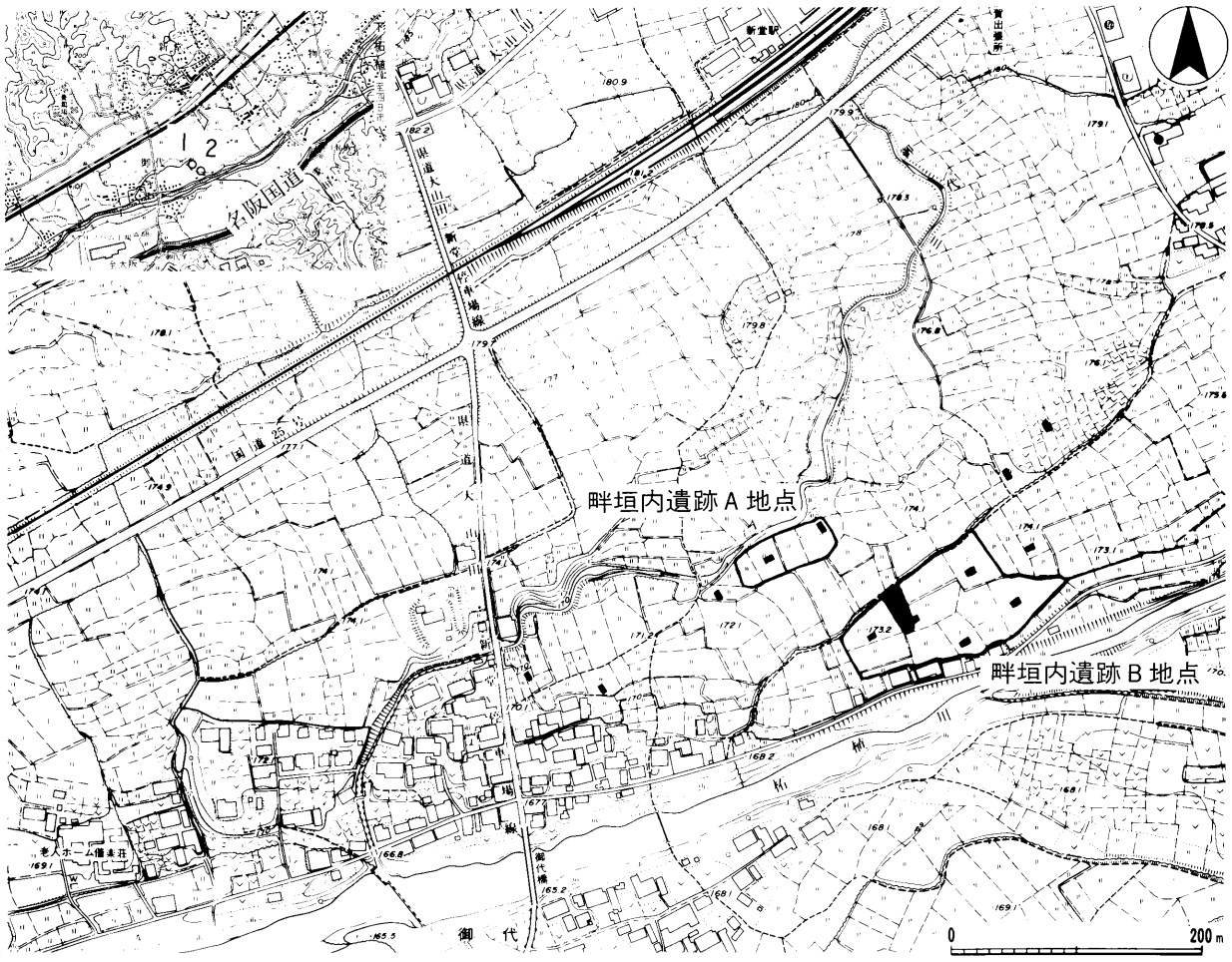
当遺跡は、阿山郡伊賀町御代字畔垣内に所在する。柘植川の右岸の河岸段丘上に位置し、現況は水田と荒地である。分布調査によって新たに発見された遺跡である。昭和63年11月28日の第１次範囲確認調査の結果、Ａ地点の範囲は東西約95m、南北約30～45mの約3,000㎡、Ｂ地点の範囲は、東西約140～180m、南北約90mの約10,000㎡であると確認された。Ｂ地点について遺跡の中央より西の一部約450㎡とＡ地点全域が削平を受けるため、その部分について平成元年２月８日～２月13日にわたり、第２次範囲確認調査を行った。

この結果、Ｂ地点については、現地表面下約45㎝で黄灰色粘質土の遺物包含層が認められ、更に約15㎝下の暗灰黄色粘土面において、幅約50㎝の東西方向の溝１条（ＳＤ１）と掘立柱建物１棟（ＳＢ２）と小穴が10数余り、土坑２基が検出された。

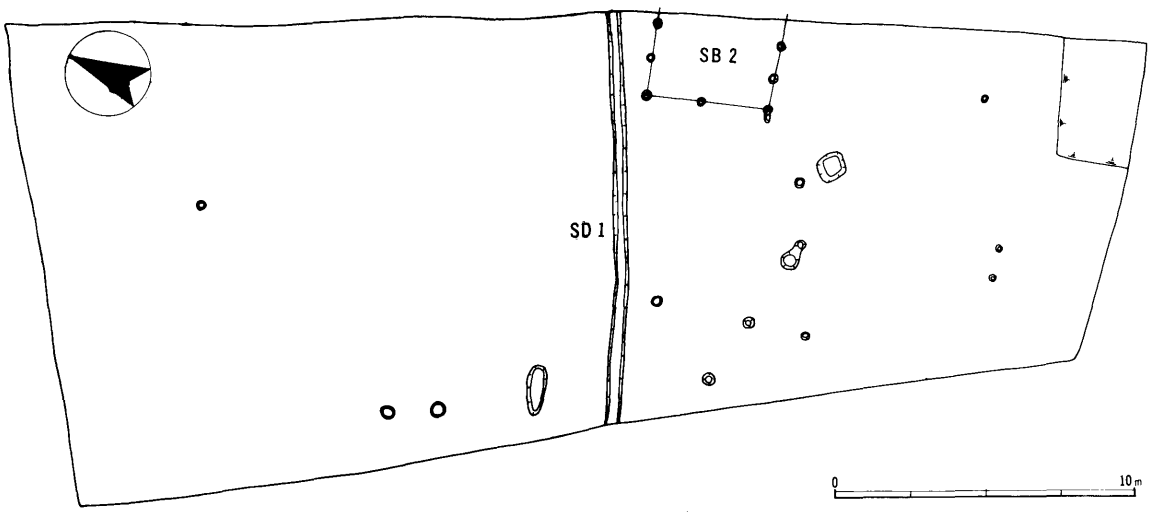
ＳＤ１からは、須恵器の高台付の杯片（２、４、６）が出土した。これらの遺物から、ＳＤ１は奈良時代のものと考えられる。

ＳＢ２は、東西２間以上、南北２間で、東西方向が棟方向と考えられる。柱間は等間であり、桁行は1.2m、梁行は4.2m（柱間は2.1m）を測る。ＳＢ２の時期については、土師器片が少量出土しているのみで、不明である。しかし包含層の遺物として、須恵器の高台付の杯（１、３、５）、杯蓋片（７）、白磁片（８）や瓦器片が出土しており、13世紀末まで存続していたものと考えられる。

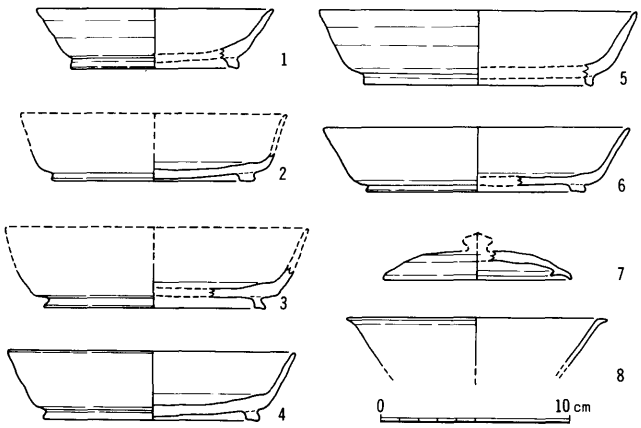
Ａ地点については、幅３mの調査溝を東西に約95m、南北に約14m、23m、42mの計４本を設定し、遺構や包含層の有無を確認した。その結果、現地表面下約30㎝の黄褐色土面において、竪穴住居２棟、小穴10余り、土坑数基を検出した。そして、Ａ地点



第61図　遺跡位置図（1：50,000）及び調査区位置図（1：6,000）
1．畔垣内遺跡Ａ地点　2．畔垣内遺跡Ｂ地点



第62図　B地点調査区平面図（1：250）



第63図　遺物実測図（1：4）

の範囲を東西約80m、南北約30mの約2,400㎡と確認した。遺構密度が高く、時期的にも本年度中の調査は困難であると判断し、来年度以降に本調査を行うことにした。

畔垣内遺跡は、6世紀前半にはA地点が中心であったと考えられ、後にA地点よりも比高の低いB地点へと移っていったと考えられる。

（中嶋千年）

XI　上野東部地区内遺跡群

1．上野市下友生　風呂ノ上（ふろのうえ）遺跡

当遺跡は、上野市下友生字風呂ノ上に所在する。久米川右岸の盆地の中央よりやや北に位置し、現況は畑である。今回、遺跡の東端に用水路が計画され削平を受けるため、その部分について昭和63年9月27日、28日に第2次範囲確認調査を行った。

当調査では、幅約2m、南北長約35mと約10mの調査溝を設定した。現地表下約30cmで包含層が認められ、土師器片が少量出土した。また、現地表下約50cmで黄褐色粘質土層、更に約40cm下で青灰色粘土層となるが、遺構は確認されなかった。

今回の調査の結果、当遺跡の中心は調査溝より西方になると思われる。

（中嶋千年）

2．上野市下友生　広見（ひろみ）遺跡

当遺跡は、上野市下友生字広見に所在する。久米川右岸の盆地の北縁に位置し、現況はなだらかに傾斜する水田と荒地である。第1次範囲確認調査時の結果を受けて、用水路及び水田として削平を受ける部分について、昭和63年9月27日、28日に第2次範囲確認調査を行った。

用水路部分については、幅約4m、東西長約80mと約20mの調査溝（A、B区）と南北長約25mの調査溝（C区）をT字形に設定し、水田部分については幅約4m、東西長約10mの調査溝を2ケ所（D、E区）を設定した。

A、B、C区では、現地表下約60cmで灰黄色粘土の地山となり、遺構は認められなかった。遺物は、

須恵器の高台付の杯（1）、瓦器皿（2）などが出土したが、明確な包含層は認められなかった。

D区では現地表下約40cmで、明褐色土の地山となり、E区では、現地表下約30cmで明黄褐色土の地山となるが、いずれの調査溝からも遺物、遺構は認められなかった。

今回の調査の結果、当遺跡の中心は、A区より南方、C区とD、E区の中間付近と考えられ、その面積は約1,200㎡と考えられる。

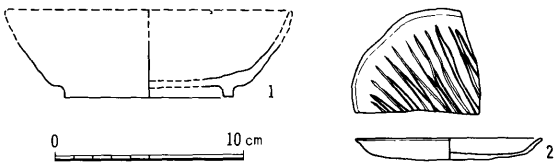
（中嶋千年）

第64図　遺跡位置図（1：60,000）

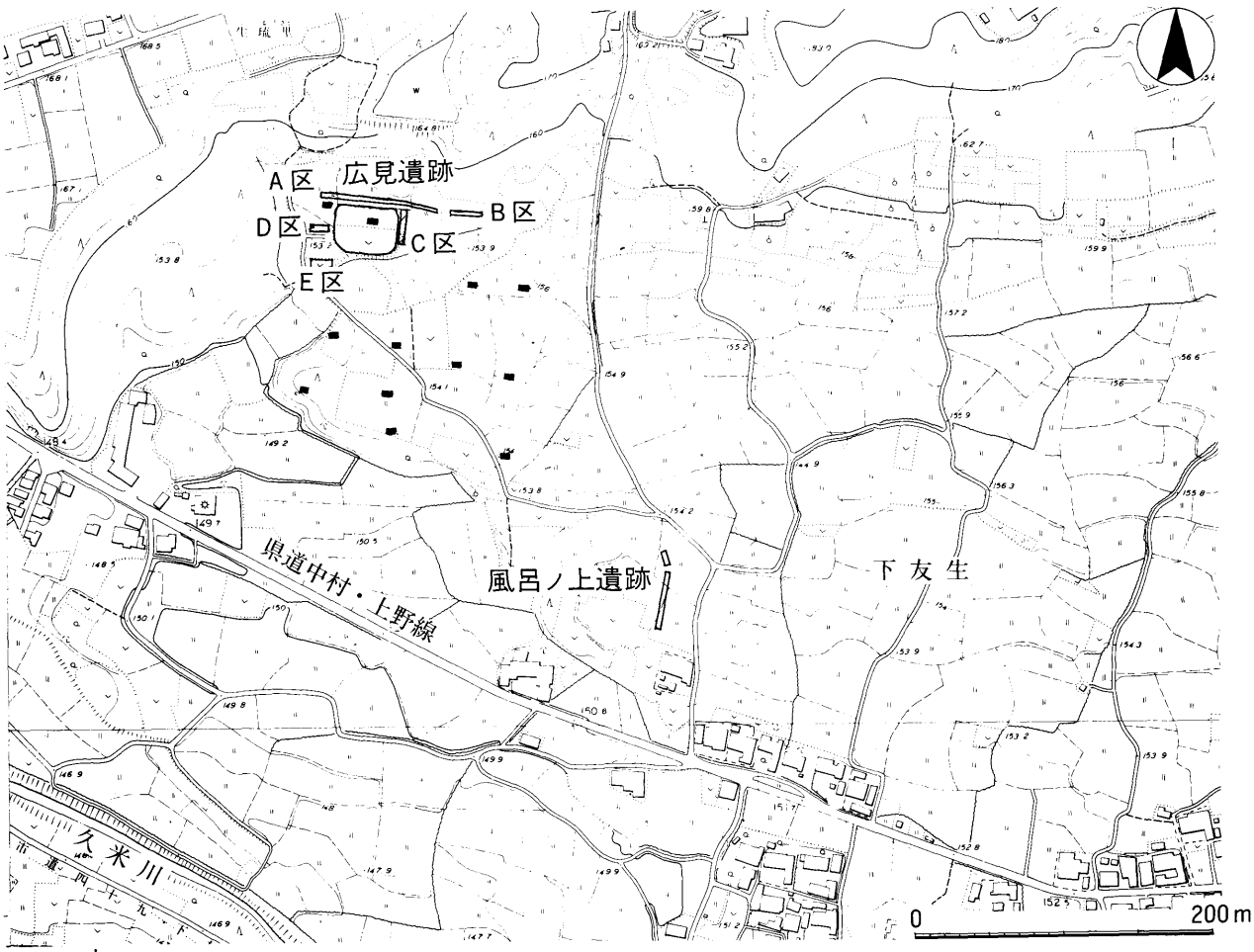
（国土地理院「上野」「伊勢路」1/25,000から）

1．広見遺跡　2．風呂ノ上遺跡　3．福地遺跡　4．東場谷遺跡

5．西場谷A遺跡　6．「奥小波田3号墳」



第65図　広見遺跡出土遺物実測図（1：4）



第66図　調査区位置図（1：5,000）※黒ベタは第1次調査坑

3．上野市中友生　福地遺跡

当遺跡は、上野市中友生字福地に所在する。久米川と渋田川にはさまれて西へのびる丘陵の東端に位置し、現況は水田、荒地である。分布調査によって新たに発見された遺跡である。昭和63年９月26日に第１次範囲確認調査を行い、事業地内の遺跡規模は東西約180m、南北約110mの約10,000㎡と確認した。遺跡内において、用水路部分と水田部分の削平を受ける部分について、昭和63年10月17日に第２次範囲確認調査を行った。

第２次範囲確認調査は、用水路部分については遺跡の北端に東西４m、南北７mの調査溝（A区）を、水田部分については遺跡の西端に幅２m、南北長約30mの調査溝（B区）を設定した。

調査の結果、A区から土師器片が少量出土したのみで、A、B区とも遺構は検出されなかった。

しかし、第１次範囲確認調査時に遺跡の南端から現地表下約30cmで12世紀頃の瓦器を多量に含む茶褐色粘質土の包含層が認められ、さらに約10cm下の黄褐色粘質土上面から、土坑、溝を検出している。

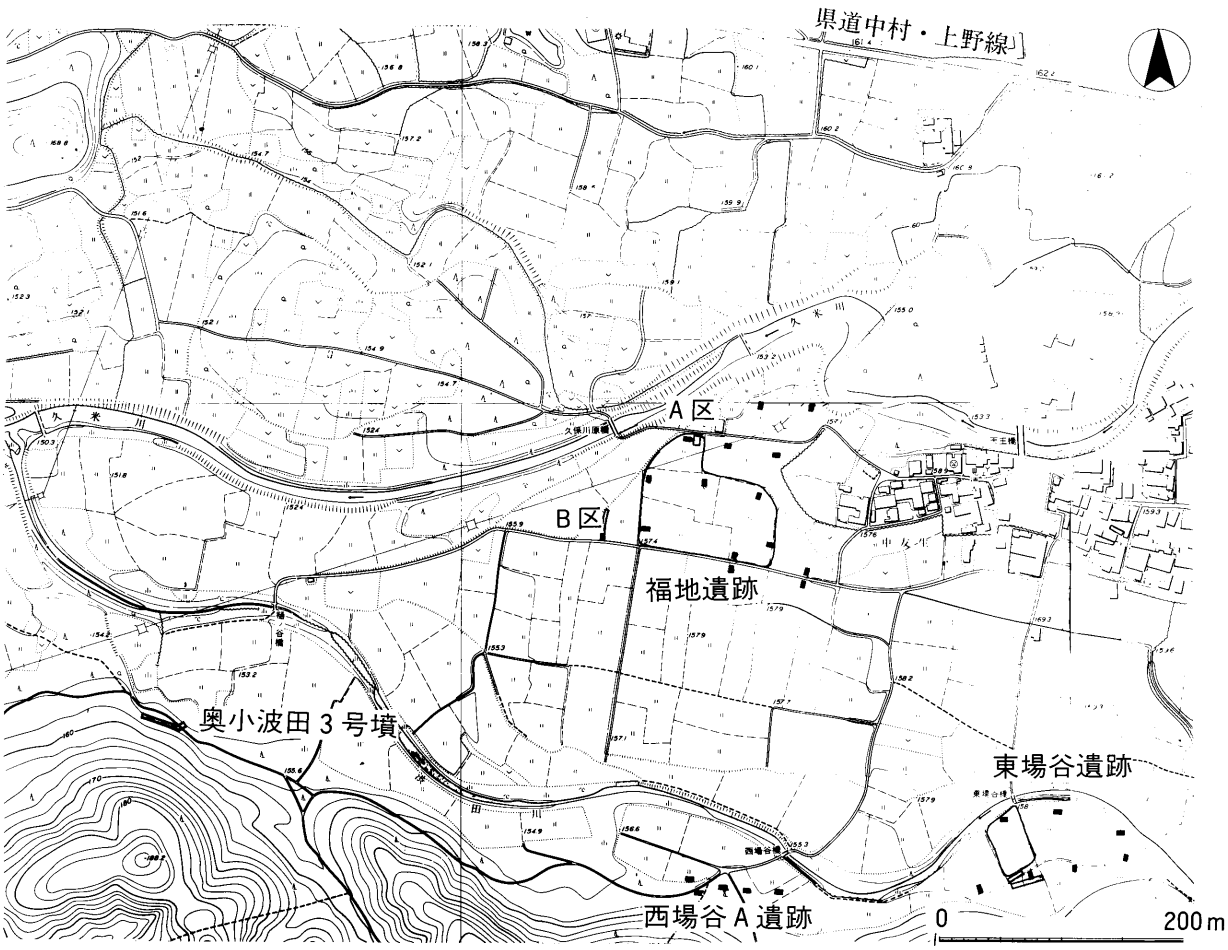
これらのことから、当遺跡の中心は調査溝B区より東にあると考えられる。

（中嶋千年）

4．上野市下友生　東場谷遺跡

当遺跡は、上野市下友生字東場谷に所在する。渋田川の左岸の山裾に位置し、福地遺跡の南東約400mの所にあり、現況は水田である。分布調査によって新たに発見された遺跡である。昭和63年９月26日に第１次範囲確認調査を行い、その結果、事業地内の遺跡範囲を南北約90m、東西約25mの約2,500㎡と推定した。今回、遺跡推定範囲内において河川改修が計画されたため、削平を受ける部分について昭和63年10月17日、第２次範囲確認調査を行った。

当調査では、幅約３m、東西長約25mと東西長約10mの調査溝を設定した。遺物は擂鉢片、土師器片がわずかに出土したのみで、明確な包含層は確認さ



第67図　調査区位置図（1：6,000）※黒ベタは第１次調査坑

れなかった。また、現地表下約90㎝の青灰色砂質土層で地山となるが、遺構は検出されなかった。

（中嶋千年）

5．上野市中友生　西場谷（にしばたに）A遺跡

当遺跡は、上野市中友生字西場谷に所在する。

上野市教育委員会・上野市遺跡調査会による上野新都市開発構想地域埋蔵文化財分布調査において、奥小波田３号墳とともに発見された遺跡である。東場谷遺跡から約200m西に位置し、現況は水田・山林である。

河川改修による削平を受けるため、昭和63年９月26日に第１次範囲確認調査を行った。削平される範囲内に、４m×２mの調査坑を５ケ所設定した。

いずれの調査坑についても、現地表下約20～50㎝で黄褐色砂層の地山となり、遺物、遺構ともに認められなかった。

（中嶋千年）

6．上野市中友生　「奥小波田（おくおばた）３号墳」

当遺跡は、上野市中友生字奥小波田に所在する。西場谷A遺跡の西約180mに位置し、現況は山林である。河川改修に伴い削平されるため、昭和63年10月26日に第１次範囲確認調査をおこなった。墳丘調査は上野市教育委員会が行うことになっていたため、墳丘の南側に幅約３m、東西長約35mの調査溝を設定した。

現表土下約30㎝で、淡灰色砂層と淡灰黄色砂質土層が互層となっており、遺物は出土しなかった。また周溝も確認されなかった。

（中嶋千年）

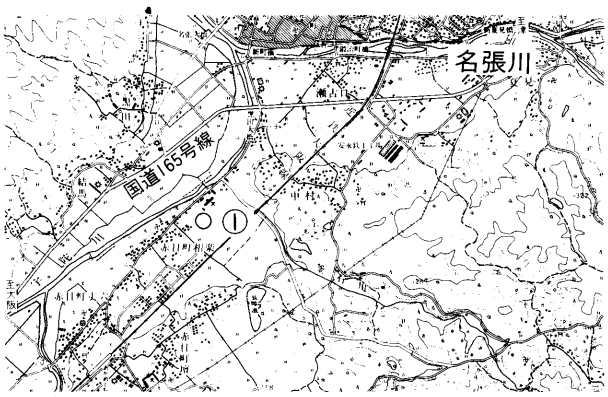
XII　名張市赤目町　脇ノ田（わきのた）遺跡

当遺跡は、名張市赤目町字脇ノ田に所在する。宇陀川の右岸の河岸段丘上に位置し、現況は畑である。分布調査によって新たに発見された遺跡である。昭和63年11月14日に第１次範囲確認調査を行い、その結果、東西約25m、南北約30mの約750㎡が事業地内遺跡範囲として確認された。遺跡範囲内において、東西約20m、南北約30mの約600㎡が削平を受けるため、この部分（A区）について、昭和63年12月５日、第２次範囲確認調査を行った。

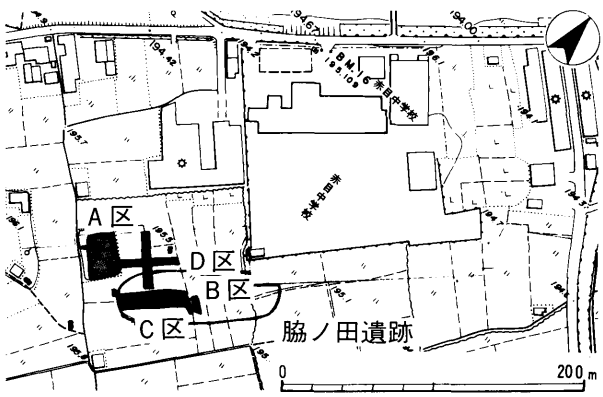
調査の結果、現地表面下約50㎝で黄褐色土の地山となり、遺物、遺構ともに認められなかった。

また、第２次範囲確認調査の時に、当遺跡から約20m南の水田から、土師器片等が多く散布していることが確認された。そこで、その水田に幅約３mの調査溝を東西約35mにわたって約２ケ所設定した（B、C区）。さらに当遺跡の東の水田に幅約３mの調査溝を東西約40m、南北約45mの十字形に設定し（D区）、当遺跡の第２次範囲確認調査として昭和63年12月８日まで行った。

その結果、B、C区においては、現地表面下約30㎝の暗褐色土上面で、小穴90余り、土坑10基、東西溝１条を検出した。小穴は多いが、掘立柱建物跡などは確認されなかった。遺構密度が高いため、今年度中の調査は困難であると判断し、遺構掘削は行わず、盛土対応によって遺跡の保存を図った。なお、D区からは遺構は検出されなかった。



第68図　遺跡位置図（1：50,000）１．脇ノ田遺跡
（国土地理院１：25,000『名張』から）

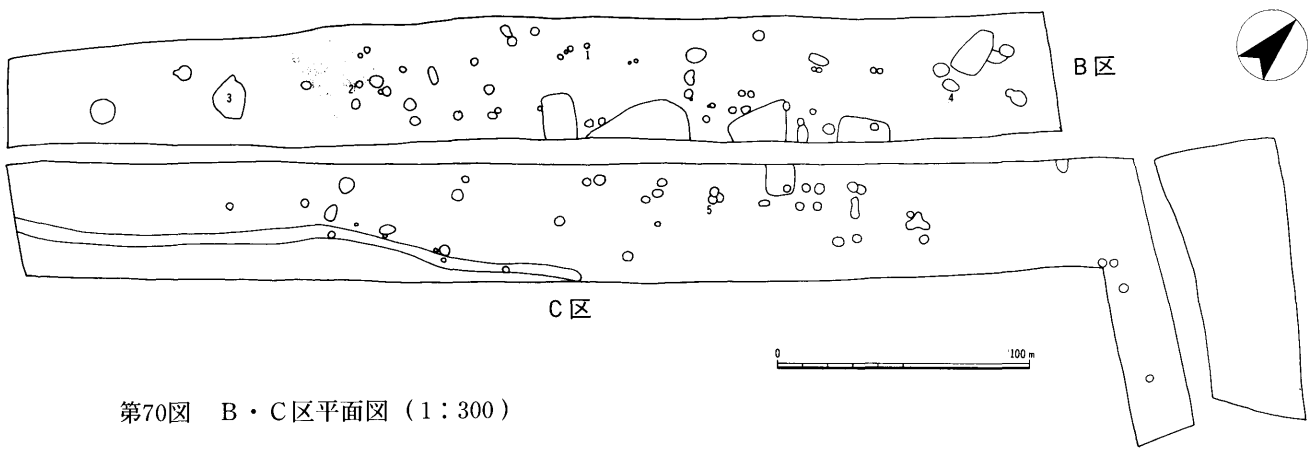


第69図　調査区位置図（1：5,000）

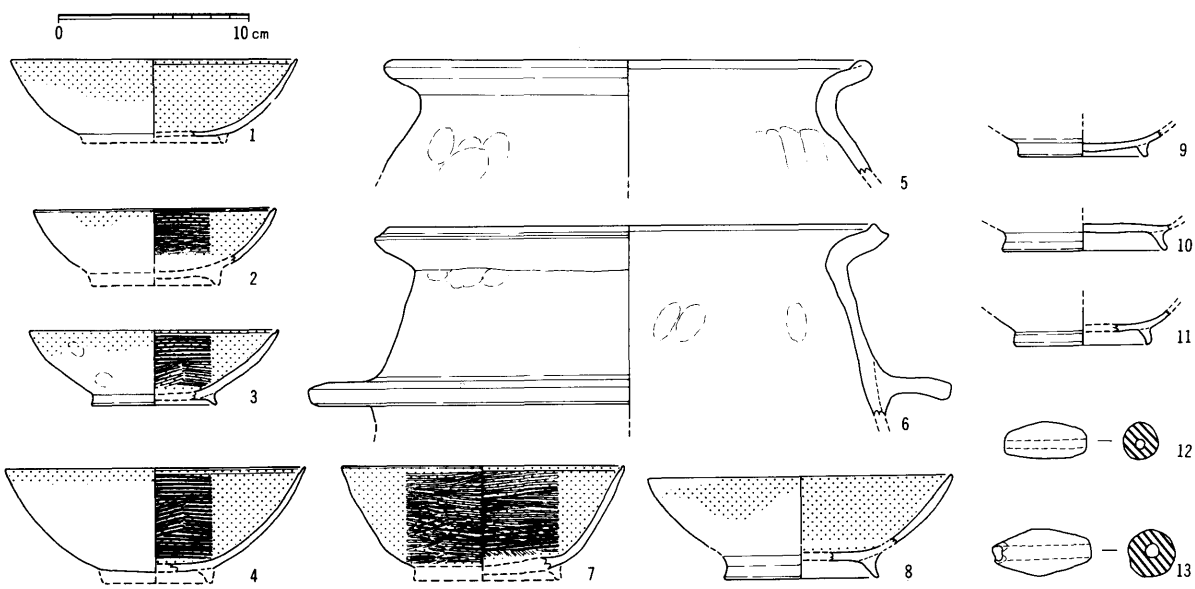
遺物としては、D区の調査溝の南から少量の土師器片が出土したにとどまった。しかし、B、C区においては、ピット1から羽釜の口縁部（6）、ピット2から黒色土器A類の椀（3）、ピット3から土師器の椀の底部（9）、ピット4から黒色土器B類の椀（7）が出土している。また、包含層からの遺物として、黒色土器A類の椀（1～2・4・8）、土師器の鍋か羽釜の口縁部（5）、灰釉陶器の椀の底部（11）、土錘（12～13）などが出土した。

第2次範囲確認調査の結果、当遺跡は10世紀頃を中心とした集落跡であり、事業地内の遺跡範囲は、東西約100m、南北約38mの約3.500㎡と推定された。

（中嶋千年）



第70図　B・C区平面図（1：300）



第71図　遺物実測図（1：4）

PLATE

シャゴジ塚調査前・調査区全景

調査前全景（北から）

調査区全景（北から）

A区東部全景（西から）

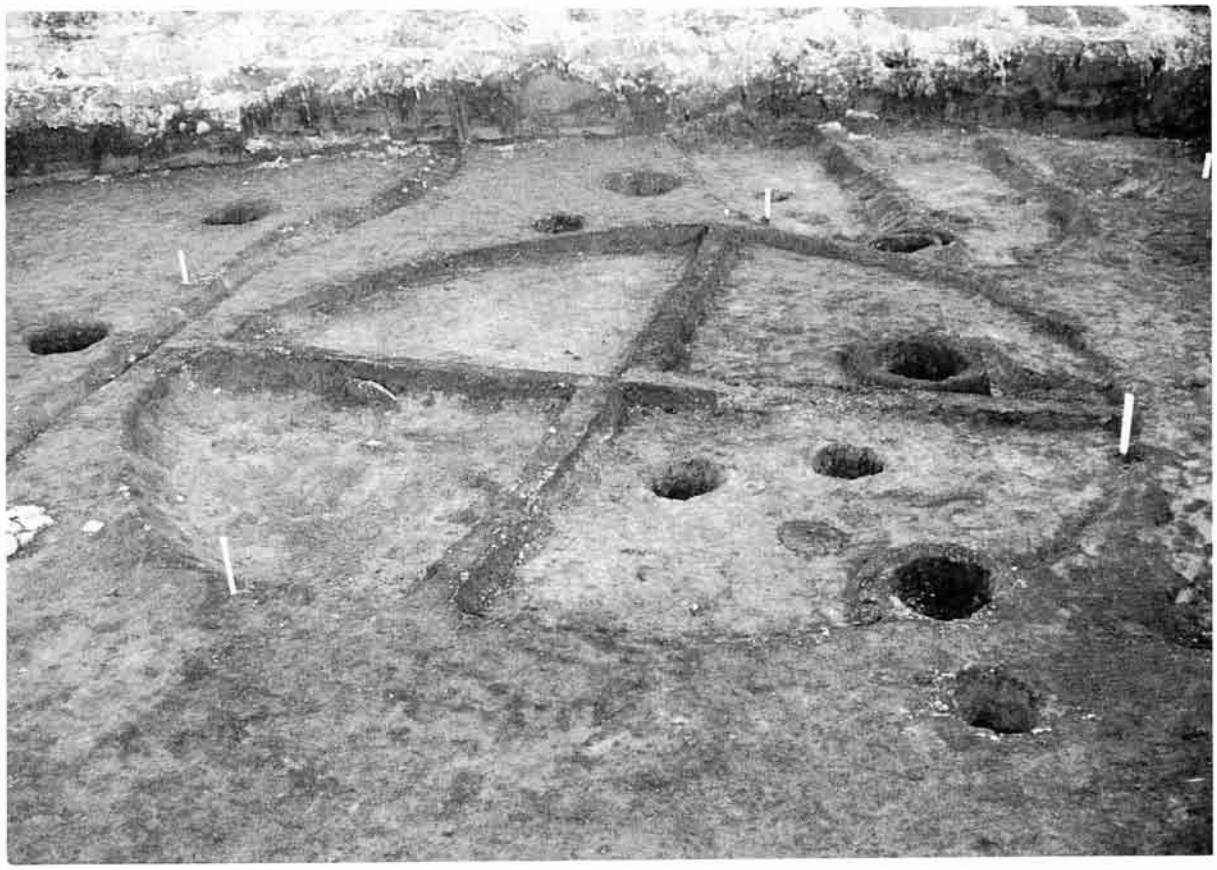
A区 SD1 弥生土器出土状況（第24図5）

A区SX15 遺物出土状況（北から）

B区全景（東から）

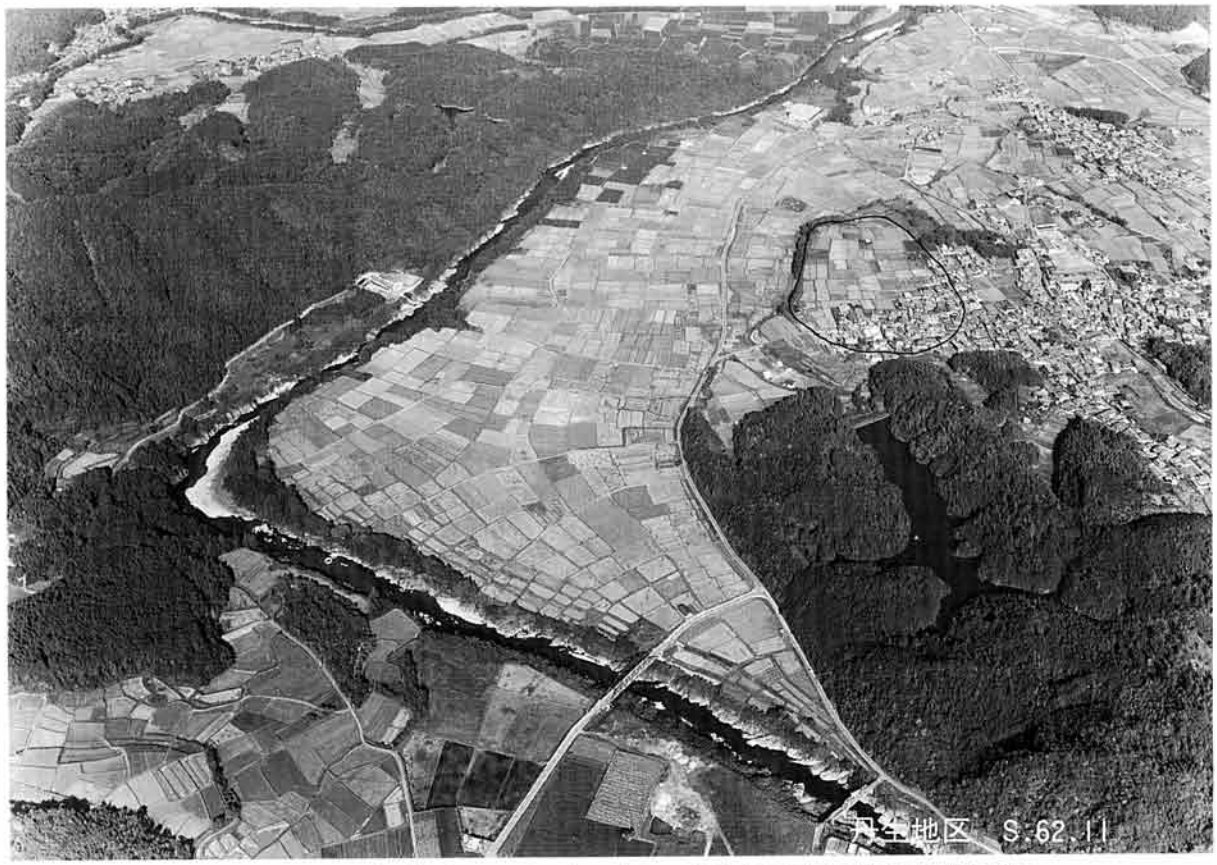
B区東部全景（西から）

C区全景（北から）



C区 SB 1・2（西から）

C区 SB 1・2・3（東から）



圃場整備前の丹生地区(南から)(松阪農林事務所提供)

若宮遺跡遠景(西から)

A区　西側（東から）

A区 中央（東から）

A区 東側（西から）

A区 東側（西から）

B区（南から）

柱例 SB1他（西から）

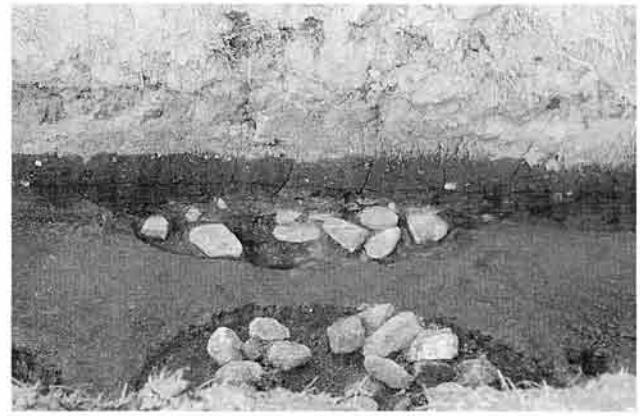
土坑 SK2・22（西から）

土坑 SK12（北から）

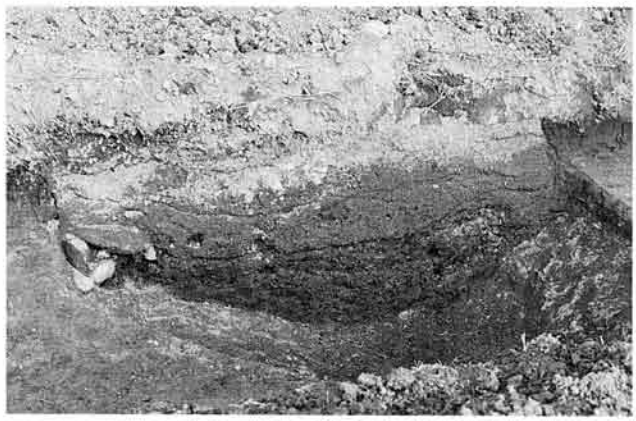
土坑 SK４土層（南から）

土坑 SK30（北から）

土坑 SD３(北)土層（南から）



土坑 SK27･35（南から）

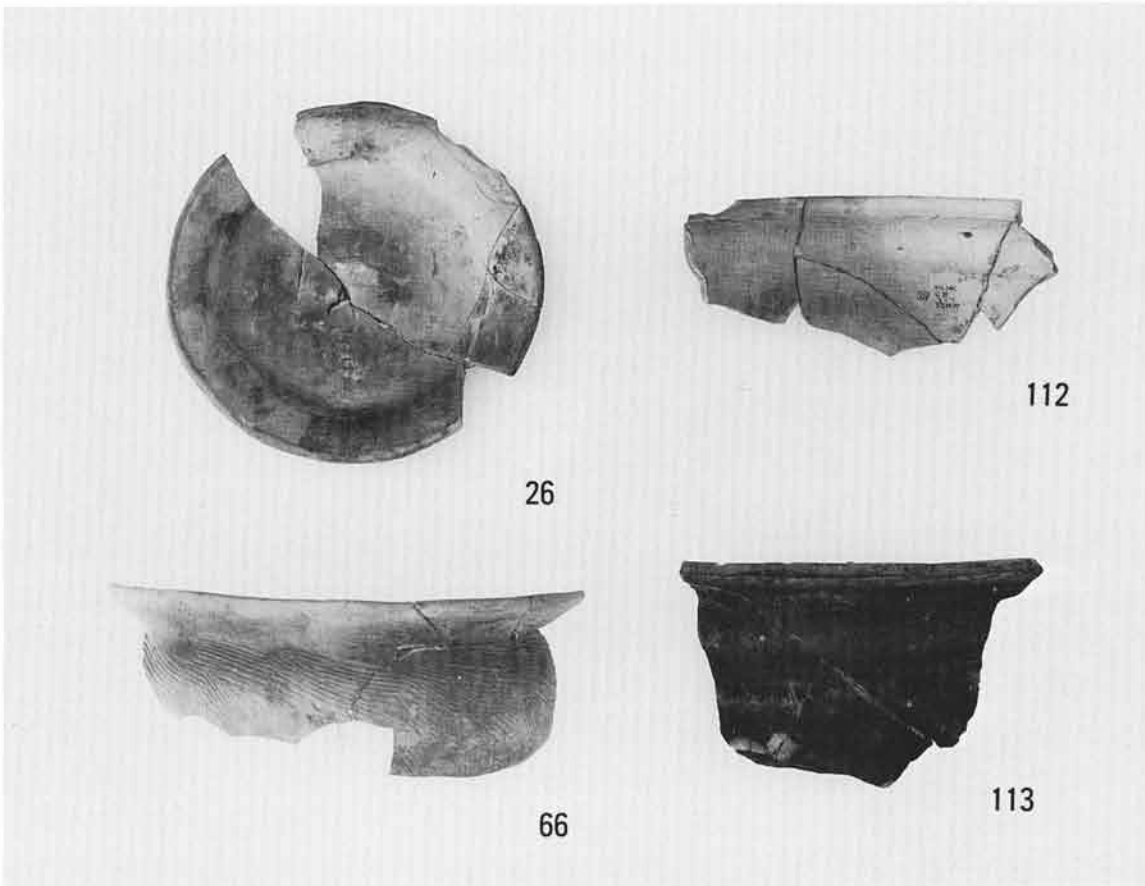


土坑 SK16土層（南から）

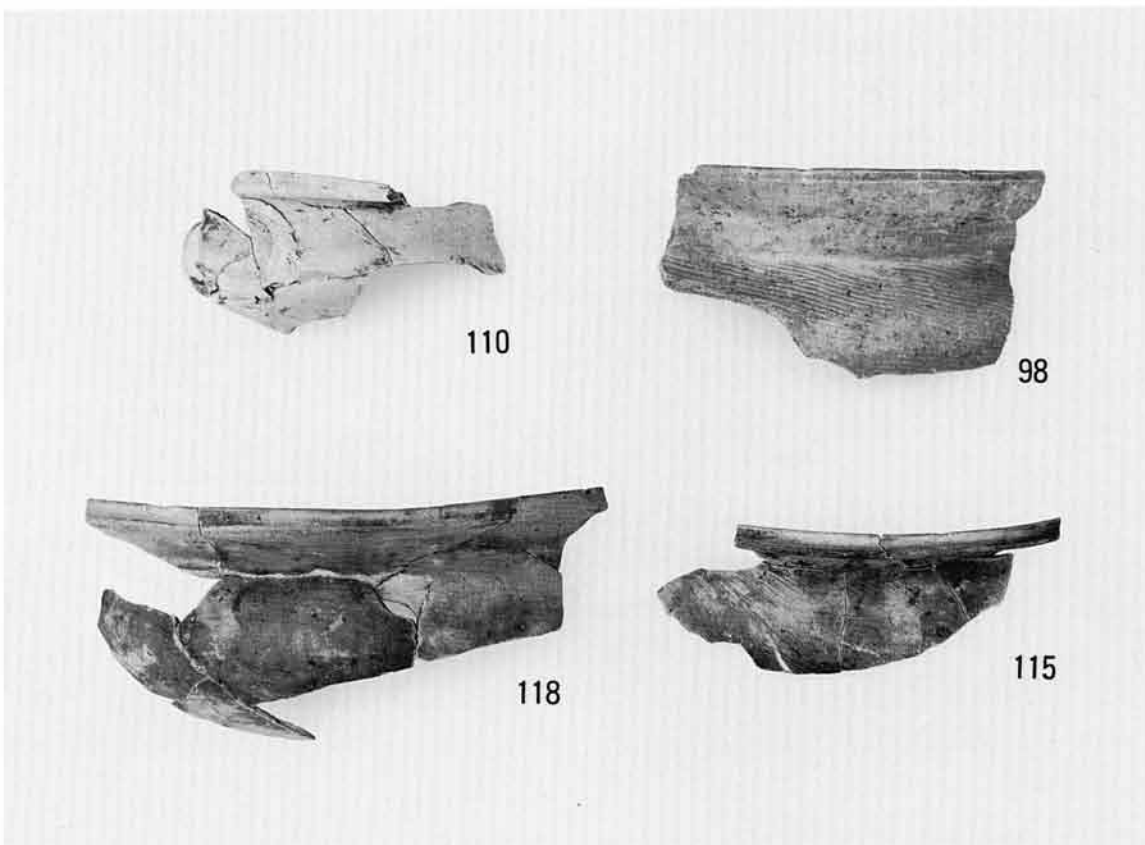
土坑 SK11（南から）

土坑 SK14土層（北から）

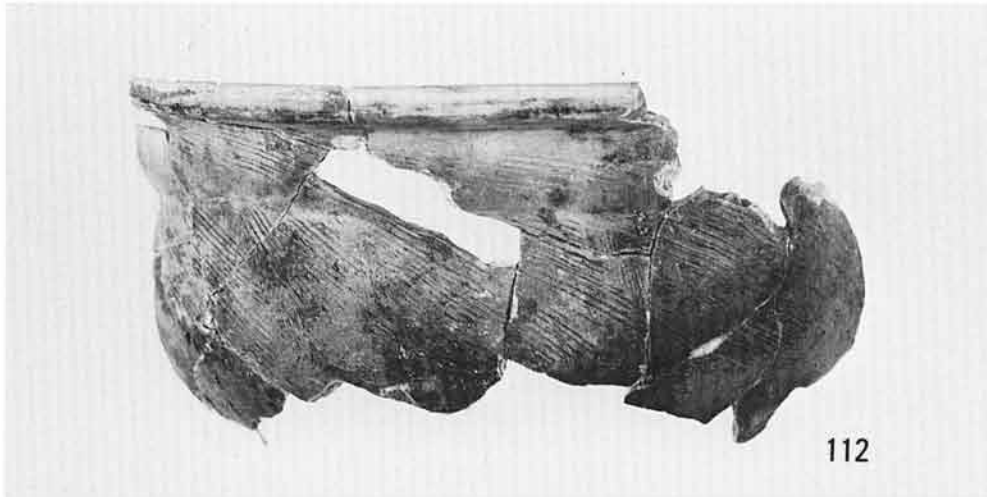
土坑 SK24（北東から）

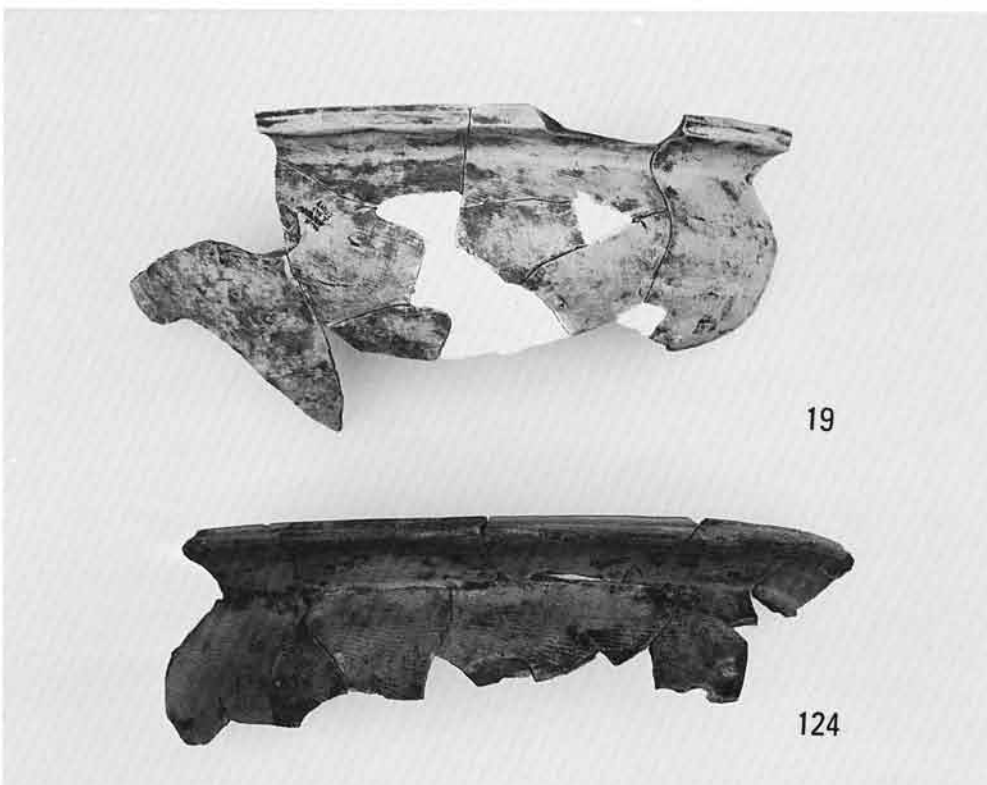


蓋・鍋 類



鍋 類

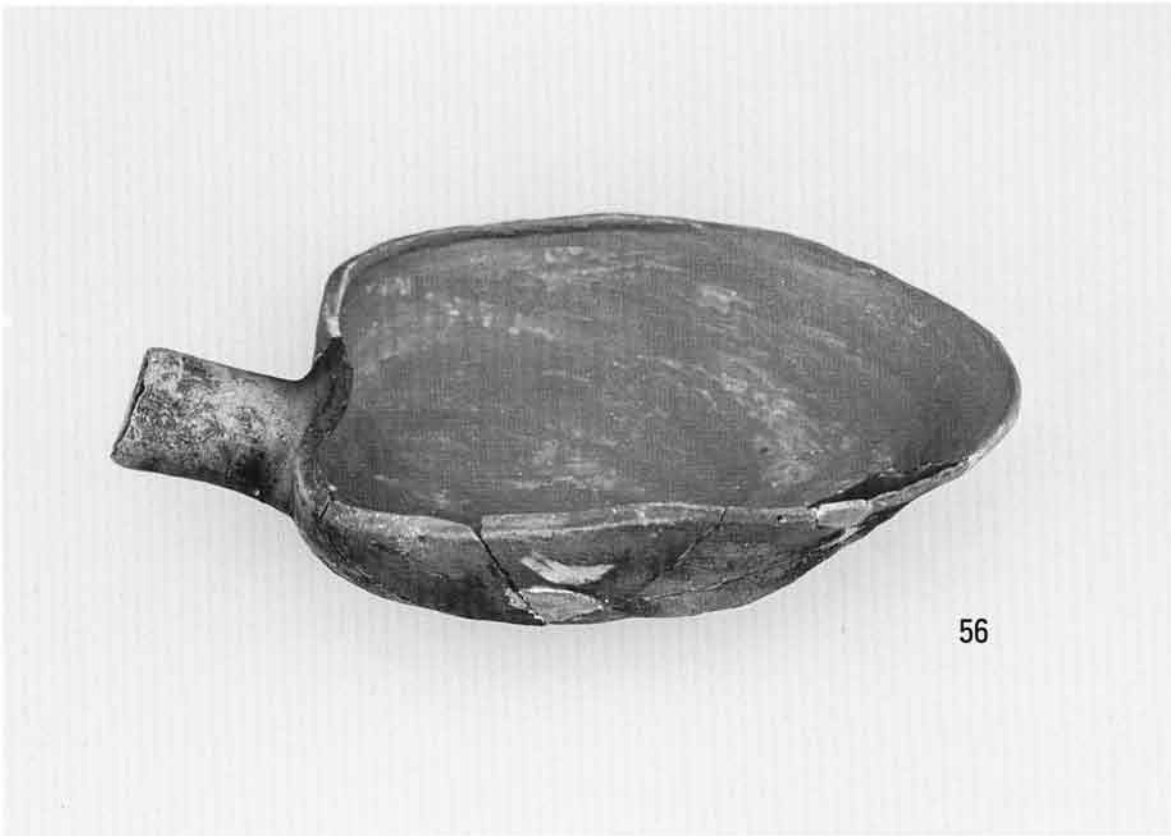




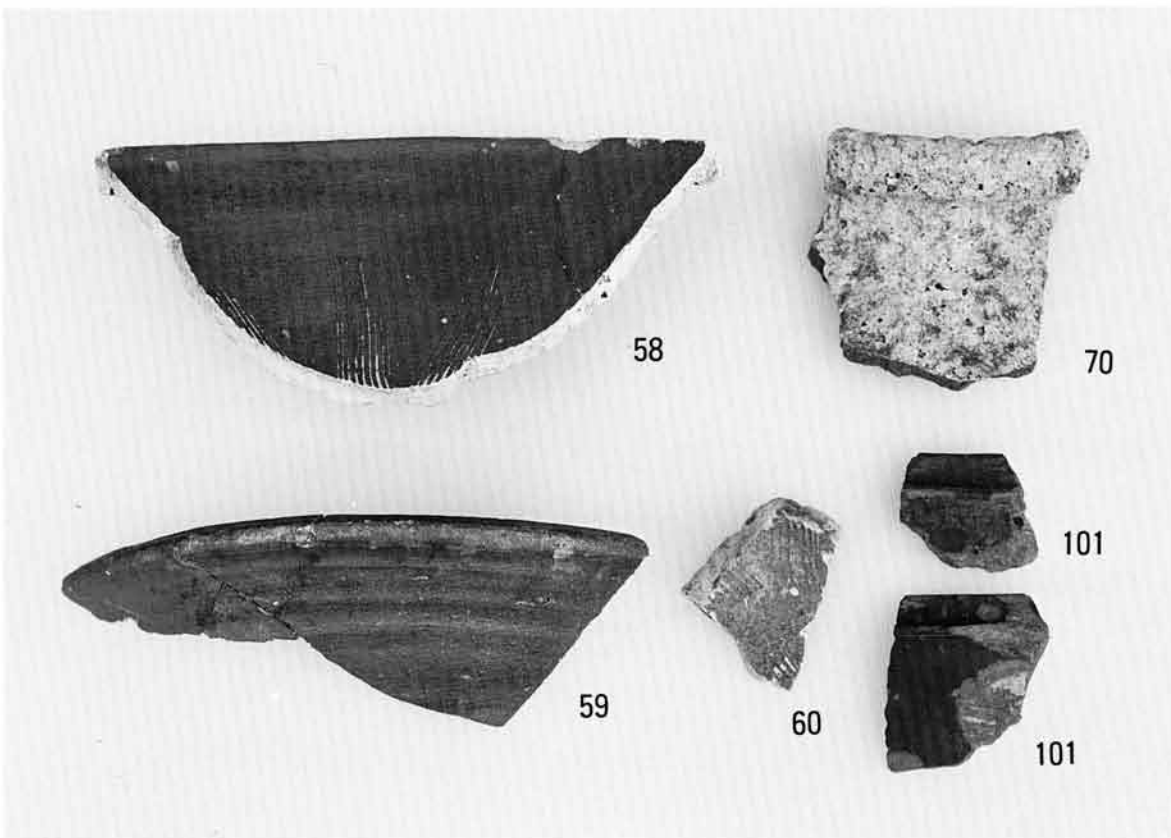
鍋　類

茶釜形

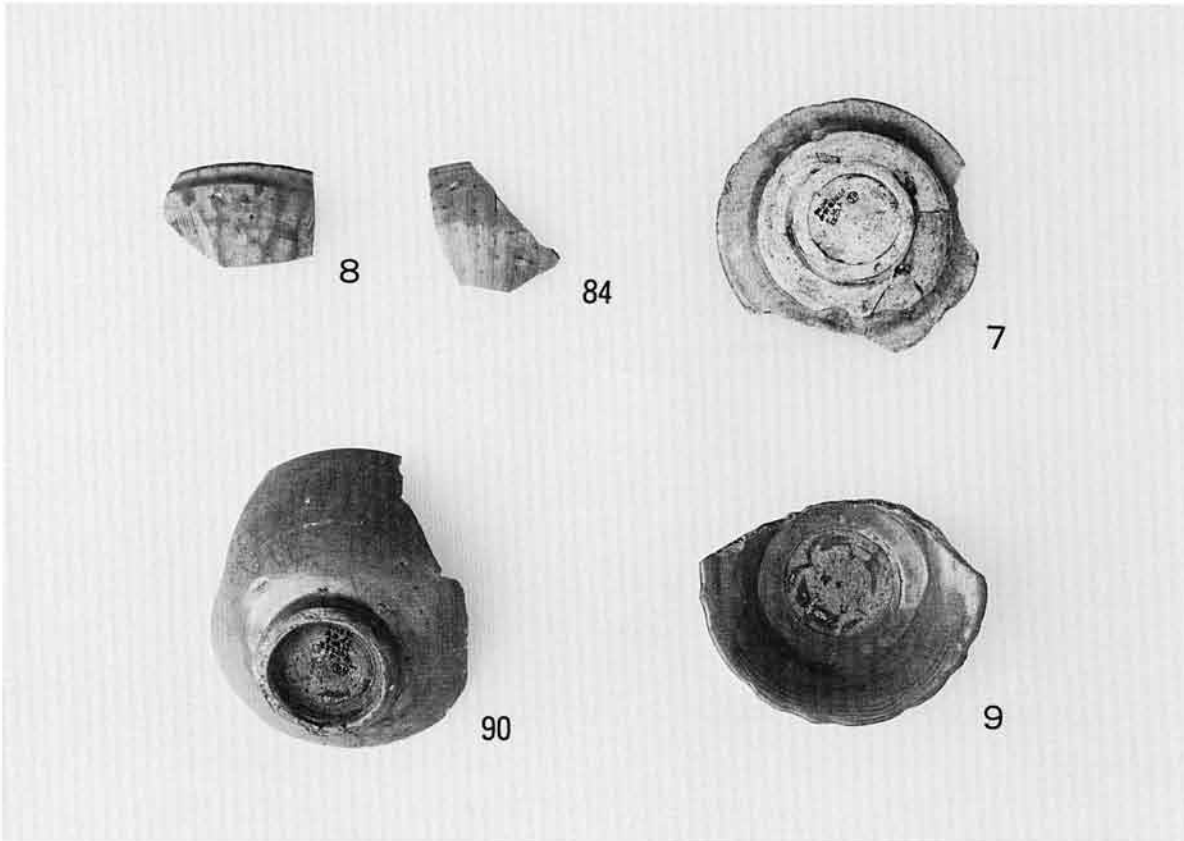
甕



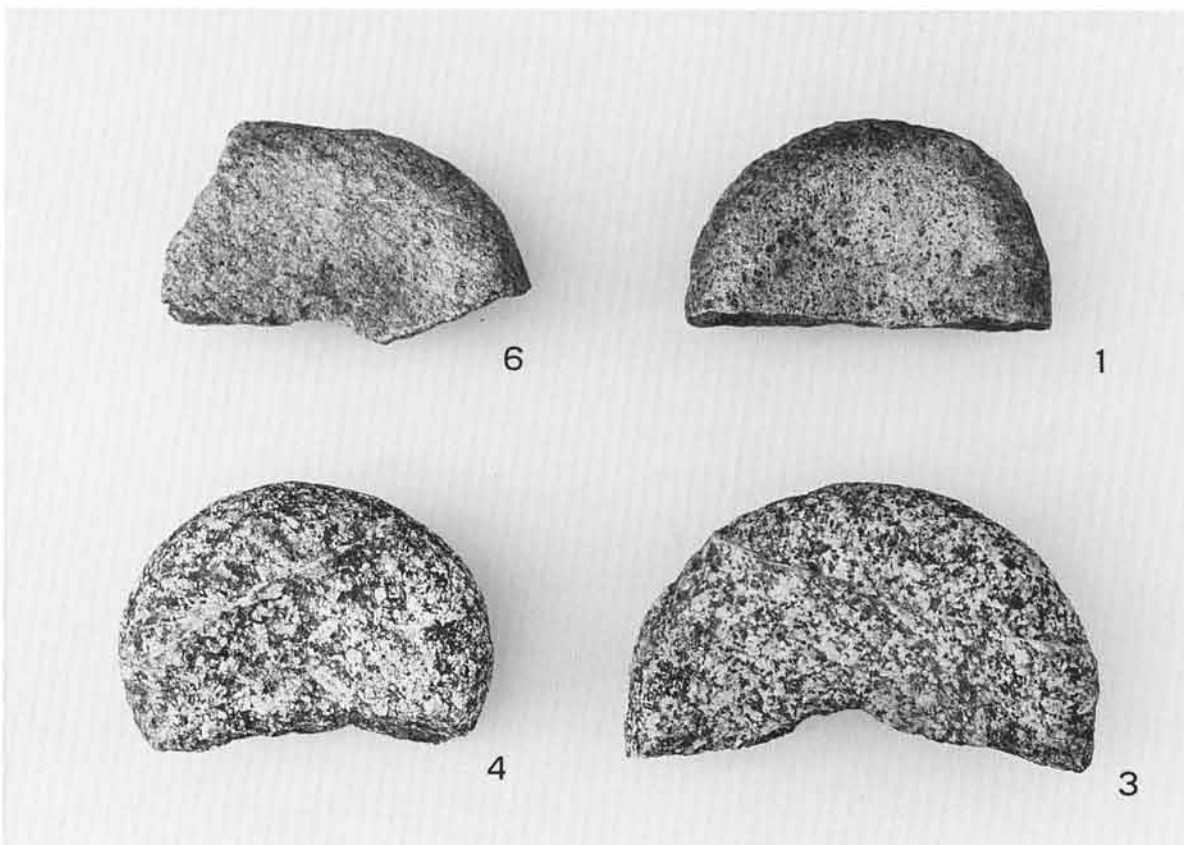
「十能」



陶　器　類　その他



陶　器・磁器類



粗 製 石 臼

昭和 63(1988)年 3月に刊行されたものをもとに
平成 18(2006)年 11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告88－1

昭和63年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

── 第1分冊 ──

1989・3

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　有限会社第一プリント社